



千葉国際芸術祭2025

Chiba City Arts Triennale 2025

ちから、ひらく。

**令和6年度
プレ企画事業実施報告書**

千葉国際芸術祭実行委員会

目次

- ・ P3 プロジェクト一覧
- ・ P4 「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
- ・ P54 「かえっこバザール」
- ・ P75 「千葉国際芸術祭2025」記者発表会
- ・ P82 ラウンドテーブル02「ちくわ部」
- ・ P87 国道357号上部空間プロジェクト「タイムラグ・パーク」
- ・ P106 公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」
- ・ P118 天馬船プロジェクト
- ・ P128 こども病院 ワークショップ
- ・ P144 「まちばのまちばり」
- ・ P166 「先生たちのアートアンデパンダン展」
- ・ P179 「今昔絵有動物借景」
- ・ P187 広報活動報告
- ・ P191 本会期に向けての課題

1. 栗原良彰「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
2. 藤浩志「かえっこバザール」
3. ラウンドテーブル02「ちくわ部」
4. 国道357号上部空間プロジェクト「タイムラグ・パーク」
5. 公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」
6. 天馬船プロジェクト
7. こども病院 ワークショップ1 西原珉
8. こども病院プロジェクト ワークショップ2 中村政人
9. 西尾美也「まちばのまちばり」
10. 「先生たちのアートアンデパンダン展」
11. TMPR「今昔絵有動物借景」
12. アーツうなぎ拠点改修
13. グレゴリー&ナヨンプロジェクト(動物園リサーチ)
14. 中村ディレクターが会いに行く

2024年8月1日(木)

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

(会場:高浜海浜小学校アフタースクール)

1. 実施概要

本芸術祭プレ企画として、夏休み期間に千葉市内6か所のアフタースクールにてワークショップを行った。その第1回を美浜区高浜海浜小学校アフタースクールで実施。

実施内容は、2023年度に千葉市美術館や千草台小学校アフタースクールで実施したワークショップと同内容となり、模型の制作から来年本会期で栗原氏の作品とともに展示するまでをひとつの流れとし、制作された模型は、本会期まで保管される。

●参加人数:15名(定員15名)



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 4名

開催日時: 2024年8月1日(木) 9時30分 ~ 12時00分

会場 : 高浜海浜小学校アフタースクール (千葉市美浜区高浜4丁目8-2) 工作室

参加方法: アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ

参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

8:30 現地集合(栗原氏、スタッフ4名)

8:35 先生方にご挨拶

8:40 会場設営、道具やパーツを搬入

9:00 事前打ち合わせ

9:30 ワークショップ開始

9:35 文化振興課 挨拶(芸術祭の説明)

9:40 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、
道具の注意点など

9:50 制作開始

※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ

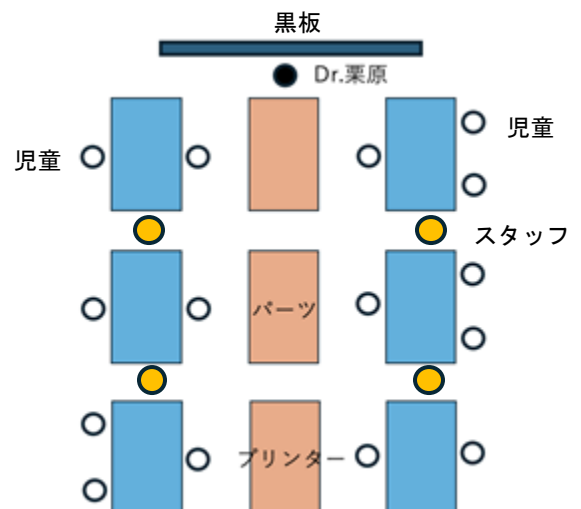
11:30 残り時間呼びかけ

12:00 終了時間だが希望者が多く、10分延長

12:10 完全終了→作品撮影開始→スタッフ休憩

13:00 片付け開始

14:30 完全撤収



【教室レイアウト】

4. アーティスト紹介 栗原良彰(くりばら・よしあき) ※P4～P53共通



アーティスト。1980年群馬生まれ。アーティストは、自由の体現者であるべきだという考えを持ち、特定の表現スタイルにこだわらず、彫刻や絵画、インスタレーション、ビデオ、パフォーマンス、映画、ワークショップなど、あらゆる表現方法で制作活動を行っている。

5. 評価／所感

本芸術祭キックオフイベントの一貫で、美浜区高浜にある高浜海浜小学校に隣接したアフタースクールで実施した。千葉市の地域資源を発掘し、市民参加型のアートプロジェクトを主眼に置いた本芸術祭の主旨を受け、それに呼応するように講師の栗原氏が本プログラムの設計を行った。まさに本芸術祭の在り方を象徴するワークショッププログラムである。

昨年度に千草台小学校アフタースクールで実施したことが実績となり、千葉市内のアフタースクール運営会社を所管する生涯学習振興課との連携により、夏休み期間のプログラムとして呼びかけを行い、手を挙げた千葉市内6か所のアフタースクールで実施に至った。

「自分だけが知っている千葉市のいいところを探しておこう！」というチラシの内容を受けて、事前に写真や資料を集めてきた児童も多く、それを元に制作を始めるなど、意欲的な姿が多く見られた。2時間半という限られた時間の中で一から作るのはハードルが高いが、栗原氏があらかじめ用意したパーツを見て触発され、自分なりの解釈を加えて新しいものを作り出すことは子ども達もとても楽しんでいるように見受けられた。先生方からは「こんなに集中して作っている姿を初めて見た」や「それぞれの個性があって見ていても楽しい」とのお声をいただき、栗原氏とともに我々も励みになった。

6. 課題

本ワークショップは本格的な建築模型と同様のスチレンボードを使用して制作する立体が、子ども達の想像力を掻き立てるものである。その切断に使用するスチレンカッターは、力を必要としなくても様々な形に電熱線で簡単に切り落とせるという機能を備えており、手を電熱線に近づけてしまう傾向がある。特に低学年(主に1年生)には注意が必要であるため、ケガについての対応を充分に行う必要がある。



7. ワークショップ記録写真



2024年8月2日(金)

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

(会場:西小中台小学校アフタースクール)

1. 実施概要

千葉国際芸術祭プレ企画としての栗原氏の夏休み期間のワークショップ第2回は、花見川区西小中台の団地内にある西小中台小学校アフタースクールで行われた。

◎参加人数:13名(定員15名)



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 4名

開催日時: 2024年8月2日(金)10時00分 ~ 12時00分

会場 : 西小中台小学校アフタースクール (千葉市花見川区西小中台3-1)2階教室

参加方法: アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ

参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

9:00 現地集合(栗原氏、スタッフ4名)

9:05 先生方にご挨拶

9:10 会場設営、道具やパーツを搬入

9:40 事前打ち合わせ

10:00 ワークショップ開始

10:05 文化振興課 挨拶(芸術祭の説明)

10:10 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、注意点など

10:20 制作開始

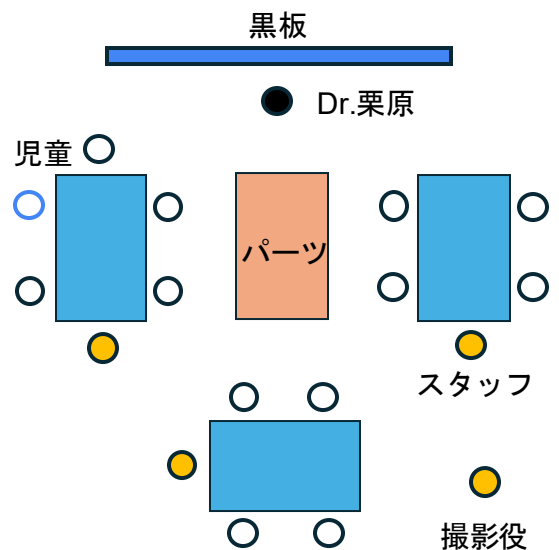
※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ

11:30 残り時間呼びかけ

12:00 終了

12:10 片付け開始

13:30 完全撤収



【教室レイアウト】

前日の反省(ケガ予防)を踏まえ、各机にスタッフ1名張り付き

4. 評価／所感

参加者である子ども達は準備された教室に入ってくるなり、パーツが積み上げられた山を見て歓声をあげて「早く作りたい！」と次々に言い出し、ワクワクする気持ちを止められない様子であった。栗原氏とスタッフがあらかじめ用意したパーツは千葉市を象徴するものがモチーフとなっており、模型作りの導入部を入りやすくしてくれている。形状にこだわり、立体的な高さのあるものを工夫して作り上げる子や、色彩にこだわりスチレンボードの発色の良さに気づいて、色を塗ることに夢中になる子など、個性が発揮された作品が数多く作り上げられた回となった。

5. 課題

スチレンカッターによる火傷への予防法として、栗原氏以外のスタッフを各テーブルに1名ずつ配置して見守りを更に強化することとした。また回の最初に道具の使い方について丁寧に説明したり、途中でも再度注意点を栗原氏から何度かアナウンスした。ただ細かいものをカットする際に、どうしても逆の手の指が電熱線に近くなってしまうことは避けられないため、継続して対策を検討する必要がある。



6. ワークショップ記録写真



2024年8月6日(火) 栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」 (会場:川戸小学校アフタースクール)

1. 実施概要

本芸術祭プレ企画として、夏休み期間に千葉市内6か所のアフタースクールにてワークショップを行った。その第3回を中央区川戸小学校アフタースクールで実施。

●参加人数:15名(定員15名)

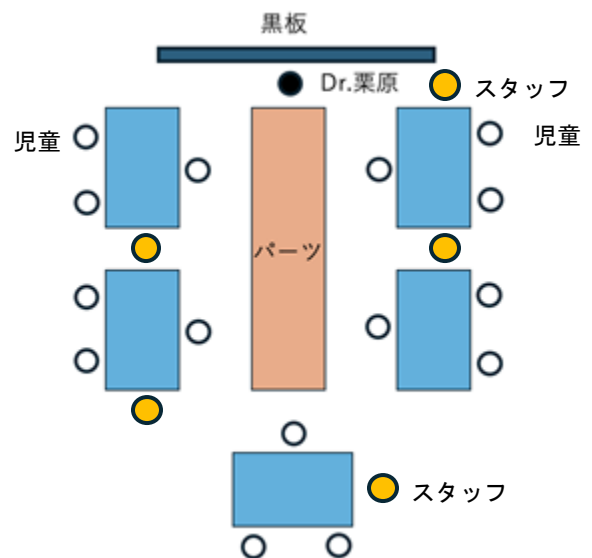


2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画
栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 5名
開催日時 : 2024年8月6日(火)9時30分 ~ 12時00分
会場 : 川戸小学校アフタースクール (千葉市中央区川戸町450)教室
参加方法 : アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ
参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

8:30 現地集合(栗原氏、スタッフ5名)
8:35 先生方にご挨拶
8:40 会場設営、道具やパーツを搬入
9:00 事前打ち合わせ
9:30 ワークショップ開始
9:35 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、
注意点など
9:45 制作開始
※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ
11:30 残り時間呼びかけ
12:00 終了時間
12:10 作品撮影開始
12:20 片付け開始
13:30 完全撤収→作品積み込み
15:30 コミュニティセンター作品搬入



【教室レイアウト】

4. 評価／所感

栗原氏による「私の千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」のワークショップ 夏休み企画の第3回目が中央区にある川戸小学校アフタースクールで行われた。回を重ねてくると、やはりその場の雰囲気というべきか、実施校ごとの特色が出てくるようになった。今回の会場はボリューム感があって、カラフルな作品が多く見受けられる回となった。モノレールの線路が幾重にも複雑に重なったものや、とにかく動物が沢山いる動物園、山かと思われるほど茂った木を表現した遊園地など、個性豊かな作品が作り上げられていく様は見守りをしながらでも驚きと感動を与えてくれる。アフタースクールの先生からも「とにかく集中して、限られた時間内によくここまで完成させました」との嬉しい感想を頂戴した。

5. 課題

第1回・2回の経験を踏まえ、スチレンカッター使用時の安全性を高めるため、子ども用のカラフルな軍手をサイズ違いで揃えた。また手の大きな子どもでも使用できるように白手袋も用意するなど、参加者の希望に合わせて対応できるように準備。さらにスタッフの人数を4人から5人に増員し、きめ細かい見守りを心がけた。スタッフはそれぞれ担当のデスクを決めるが、子供の対応によっては臨機応変にスタッフが入れ替わるなどして、常に周囲に気を配った。

今回のワークショップでは高さのあるダイナミックな作品が多くつくられ、搬出に使用する箱に入りきらないものがいくつか存在した。栗原氏の方針としては、子ども達には自由に制作してもらい、箱に入れる際は縦横など入れ方を工夫してみて、どうしても入らない場合は無理に箱に入れなくてもいいこととしている。



6. ワークショップ記録写真



2024年8月7日(水)

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

(会場:若松台小学校アフタースクール)

1. 実施概要

本芸術祭プレ企画として、夏休み期間に千葉市内6か所のアフタースクールにてワークショップを行った。その第4回を若葉区若松台小学校アフタースクールで実施。

●参加人数:15名(定員15名)



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画
栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 5名

開催日時 : 2024年8月7日(水)9時30分 ~ 12時00分

会場 : 若松台小学校アフタースクール(千葉市若葉区若松台2-25-1)多目的室

参加方法 : アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ

参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

8:30 現地集合(栗原氏、スタッフ5名)

8:35 先生方にご挨拶

8:40 会場設営、道具やパーツを搬入

9:00 事前打ち合わせ(9:20 子ども達少し早めに入場)

9:30 ワークショップ開始

9:35 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、注意点など

9:45 制作開始

※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ

11:30 残り時間呼びかけ

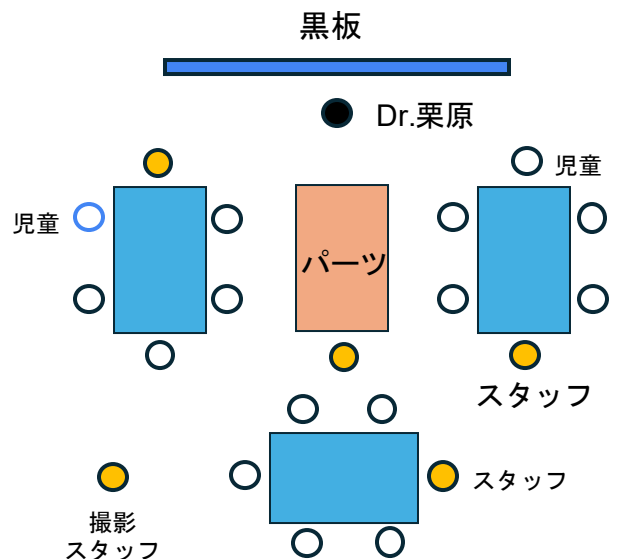
12:00 終了時間

12:10 作品撮影開始

12:20 片付け開始

13:00 完全撤収→作品積み込み

14:00 コミュニティセンター作品搬入



【教室レイアウト】

4. 評価／所感

ワークショップの冒頭に栗原氏より、この模型の作り方はプロの建築家も使用するスチレンボードや接着剤を使って制作することを説明しており、子ども達もモチベーションが上がっているようだ。今回は中学年の参加者も何人かいたため、建物のような複雑な造作物もいくつか作られた。大学の建築科でも教鞭をとっている栗原氏によると専攻している大学生よりも子どもたちの方が自由な発想で、独創的であり、レベルが高いものもあるという評価であった。

参加者はアフタースクールの児童全員ではなく希望者に限られるため、創作活動が好きな子ども達が集まっているという印象を持った。完成した作品を持ち帰って家族に見せたいという参加者が何人かいたが、今回の目的と今後の予定を丁寧に説明すると納得してくれているようだった。

5. 課題

ケガの予防は大切なことだが「作りたい」気持ちを一番に考えたいという栗原氏の理念を貫けるよう、スタッフ全員で見守りを強化した。特に1年生や所要時間の後半に起きやすいので、声がけをしたり、場合によってはスタッフが代わりにカットするなどの対応を行った。



6. ワークショップ記録写真



2024年8月20日(火)

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

(会場:高浜第一小学校アフタースクール)

1. 実施概要

本芸術祭プレ企画として、夏休み期間に千葉市内6か所のアフタースクールにてワークショップの第5回を美浜区高浜第一小学校アフタースクールで実施。参加者は少なめだったが、その分和気藹々とした雰囲気の手厚くケアが出来た。

◎参加人数:5名(定員15名)



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 3名

開催日時 : 2024年8月20日(火)9時30分 ~ 12時00分

会場 : 高浜第一小学校アフタースクール (千葉市美浜区高浜1丁目4-1)1階 視聴覚室

参加方法 : アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ

参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

8:30 現地集合(栗原氏、スタッフ3名)

8:35 先生方にご挨拶

8:40 会場設営、道具やパーツを搬入

9:00 事前打ち合わせ(9:20 子ども達少し早めに入場)

9:30 ワークショップ開始

9:35 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、注意点など

9:45 制作開始

※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ

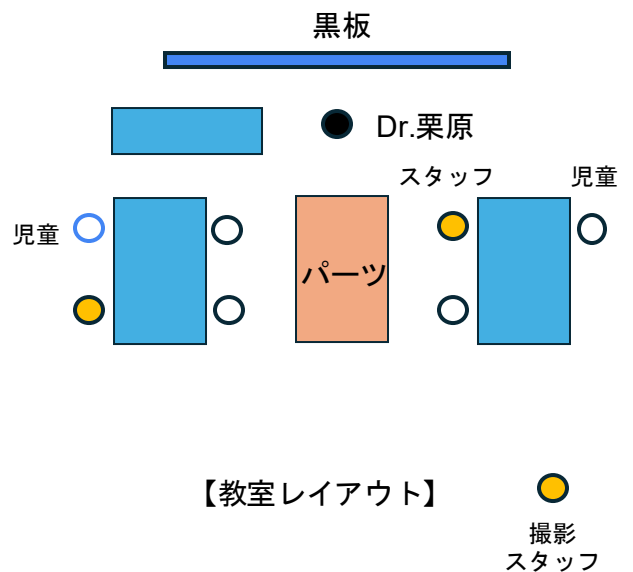
11:30 残り時間呼びかけ

12:00 終了時間

12:10 作品撮影開始

12:20 片付け開始

13:00 完全撤収→作品積み込み



4. 評価／所感

当初参加者が2名ということで心配したが、先生方の熱心な呼びかけもあり当日の朝には5名になった。参加した5人の児童は真剣に栗原氏の話に聞き入り、実際に制作の時間が始まると夢中でパーツに色を塗ったり、スタッフに希望する形状にスチレンボードのカットを依頼したりと思い思いに作品づくりに取り組んでいた。先生の中にはお子様が第1回の高浜海浜アフタースクールで、このワークショップに参加した方もいらして、作品は見えていないが、こんな体験をしてきたのか！と感慨深げであった。近い地域で実施したことでこのような偶然もあり、ぜひ来年の本会期には展示を見にきていただけるようお知らせすることを約束した。

5. 課題

完成したのは1人。楽しかったので午後や明日以降も頑張りたいという参加者が多く、当日の作品の回収はせずに同週の22日(木)に回収することとした。2時間半というワークショップの時間は冒頭には挨拶や説明があったり、終盤にはアンケートの記入などもあるので参加者には短く感じるかもしれない。しかし子どもたちの集中力を考慮するとやや短いと感じるこの2時間半くらいが適当なのかもしれない。

参加者5人というのは大人も子どもも気持ちにゆとりがあり、落ち着いて取り組めるという良さがあった。



6. ワークショップ記録写真



千葉市（の形）のプリンセス

2024年8月21日(水)

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」 (会場:千城台みらい小学校アフタースクール)

1. 実施概要

本芸術祭プレ企画として、夏休み期間に千葉市内6か所のアフタースクールにてワークショップを行った。その全6回中の最終回を若葉区千城台みらい小学校アフタースクールで実施。

◎参加人数:18名(定員15名)



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 5名

開催日時 : 2024年8月21日(水)9時30分 ~ 12時00分

会場 : 千城台みらい小学校アフタースクール (千葉市若葉区千城台東3丁目18-1)4階 第一学習室

参加方法 : アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ

参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

8:30 現地集合(栗原氏、スタッフ5名)

8:35 先生方にご挨拶

8:40 会場設営、道具やパーツを搬入

9:00 事前打ち合わせ

9:30 ワークショップ開始

9:35 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、注意点など

9:45 制作開始

※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ

11:30 残り時間呼びかけ

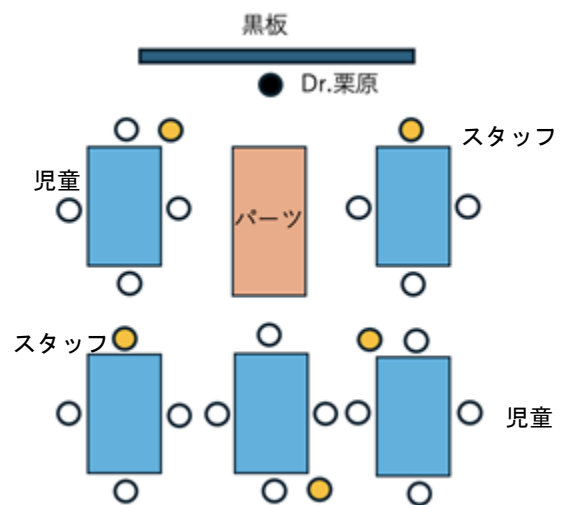
12:00 終了時間

12:10 作品撮影開始

12:20 片付け開始

13:30 完全撤収→作品積み込み

14:30 コミュニティセンター作品搬入



【教室レイアウト】

4. 評価／所感

夏休み期間のアフタースクールにおけるワークショップの最終回は定員を超える18名の参加があり、賑やかで活気がある。参加者は1年生が多いものの、高学年も数名いて頼もしい存在でもある。下調べをしたものを持参した子もいて、熱意を感じる。大きなポートタワーがある作品や、風太くんが20匹以上連なる作品など、今回も個性的なテーマパークが生まれた。時間が足りないという子もいる一方で、1年生はやや集中力が散漫になり、持て余し気味の子も見受けられたので、やはりこの2時間半という実施時間は適切であると思われた。

5. 課題

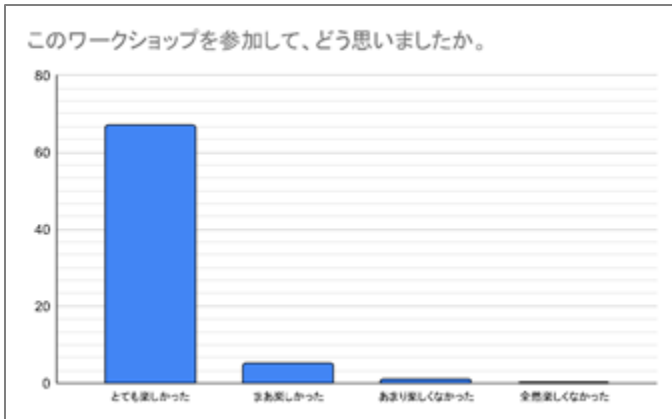
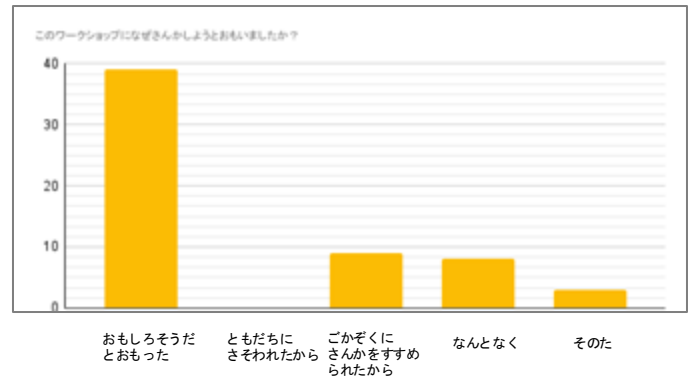
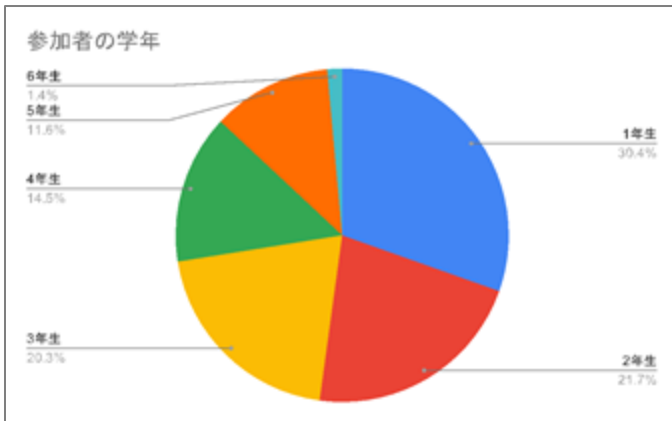
アフタースクールでの開催には先生方のご協力もあり、無事に6ヶ所やり遂げることができた。スタート時にはスチレンカッターによる火傷も心配されたが、軍手などの対応で大事には至らず、未然に防ぐことが出来るようになった。こどもたちの「作りたい！」という気持ちに寄り添いながら、出来るだけ危険は回避するための対応は、子ども向けのワークショップの永遠の課題であることを再認識する機会となった。



6. ワークショップ記録写真



7. アンケート結果(全6箇所集計) *取得数 74



◎設問

授業の中で、初めて知ったことや面白いと思ったこと、思い出に残ったことを教えてください。

- ・色々な道具があつてとってもびっくりしました。
- ・切るのが楽しかったです。めちゃくちゃ楽しかったのもう一回やりたいです。
- ・発泡スチロールが溶けたこと。
- ・一生懸命やったこと
- ・作るのが楽しかった。
- ・こうさくをしたことが面白い
- ・塗るのが楽しかった。
- ・熱いもので発泡スチロールを切れた
- ・つけるのがたのしかった。
- ・初めてこんな工作をしたので、思い出に残りました。
- ・いっぱい笑ったこと。
- ・切るのが楽しかった。
- ・模型を作ったのが楽しかったです。
- ・たいへん
- ・使ったことない道具を使ったり作ったりモノレールを作るのが楽しかった。
- ・ひこね先生と頑張ったことが思い出に残った。
- ・知らない道具を使っていろんな物を作った。
- ・作ることを考えること楽しかった
- ・将来建築家になろう！模型作るのが好きになった。
- ・馬とかをついたり、色を塗ったりところがとても大変だったから、思い出になりそうです。
- ・いっぱいについて素敵な町ができるのが楽しかったです。
- ・大きくできた。
- ・色々な花の形をつかって楽しかった。
- ・全部初めてだった
- ・くっつけるとできるのが面白かった。
- ・ドラゴンとドクターにアドバイスされてすごく上手いったりして、ありがたかった。
- ・模型を横から見たら立体に見えて楽しかったです。

◎設問

授業に参加して、千葉市への気持ちが変わりましたか？

- ・かわった。
- ・千葉市かたちやいろをくわしてくれた
- ・作るのかむずかしかった。
- ・すぐおもしろかった。
- ・千葉市に楽しいことがたくさんあると知れてよかった。
- ・ない
- ・千葉市にいろんな建物があるのがわかった。
- ・もっと千葉市について知りたくなった。
- ・千葉市の良いところを知った。
- ・千葉市がこんなに面白いだと知れてよかった。
- ・千葉市の新しい面白いところを知れてよかった。
- ・モノレールに乗りたいです。
- ・千葉市の動物を知れた。
- ・千葉市にきれいなところがあるから
- ・千葉市が新しくなるのが楽しみ！
- ・千葉市はよく分かった。
- ・色々な動物が集まっているってということがわかりました。
- ・とても良かった。
- ・千葉市はいろんなところがあったりして、面白いと思いました。
- ・千葉市はとっても楽しいところだと思いました。
- ・むずかしかった
- ・動物園がいいと思いました。
- ・千葉市は色々なところがあった。
- ・千葉市の面白い場所を知れた。
- ・千葉市の魅力や、知らない所を知れて良かった。
- ・千葉市博物館をすると素敵な所になった。
- ・千葉のいろんな所を知れた。
- ・わかりました。
- ・新しい千葉市は見つけてよかった。
- ・千葉市にたくさんテーマパークがあると知れた。
- ・千葉市の自然の豊かさが感じられました。
- ・千葉市に楽しいこと面白かったです。

設問

今回の授業ではどんなことを学びたい、やってみたいと思いますか。

- ・今回よりもっと芸術品が作りたいです。
- ・いろんな建物を作りたいです。
- ・切るのが楽しかった。
- ・千葉市とモノレール
- ・音楽でいっぱい歌いたい。
- ・塗り絵したいです。
- ・また作ってみたいです。
- ・千葉の模型を作る(本物)
- ・世界をテーマにしてやりたい。
- ・工作
- ・テーマを学校にして作ってみたい。
- ・ぐちゃぐちゃでお絵描き
- ・虹色に発泡スチロールを塗ってみたいです。
- ・楽しかった。
- ・もう一回やりたい。
- ・もっとすごいもの作ってみたい。
- ・もっと大きくしたい。
- ・次もやりたい。
- ・千葉県のことをやりたい。
- ・次回でも模型を作りたいけど、その他のものをやってみたいです。
- ・たくさんの動物を作りたい。
- ・また作りたいです。
- ・動くもの
- ・動く人間
- ・本物のモノレールを使いたい
- ・工作
- ・色鉛筆を使いたいです。
- ・もっとたくさん千葉市に詳しくなって、たくさん建物を作りたいです。
- ・電車のこうさく
- ・今日よりもすごいものを作りたいと思います。
- ・遊園地作ってみたい。
- ・公園作ってみたい。
- ・また違うものを作りたい。
- ・水族館を作ってみたい
- ・色々なきかいを学びたい。
- ・もっと大きいもの作ってみたい。
- ・もっときれいにやりたい
- ・立体的に作りたい
- ・もっとコツを知りたい。
- ・発泡スチロールを切ったり、つけたりした所です
- ・すみたい家や、学校の模型を作りたい。(模型を作るのが楽しかったから)
- ・貼ったり切ったりしていろんな形を作りたいです。次はいっぱい切りたいです。
- ・もっとリアルにできる

2024年10月11日(金)実施 栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」 (会場:きぼーる こども交流館 工房)

1. 実施概要

夏休みに引き続き、秋休み期間中に市内小中学生向けのワークショップを開催。募集に関しては市政だよりと市のホームページを中心にいった。

●参加人数:8名(定員16名)

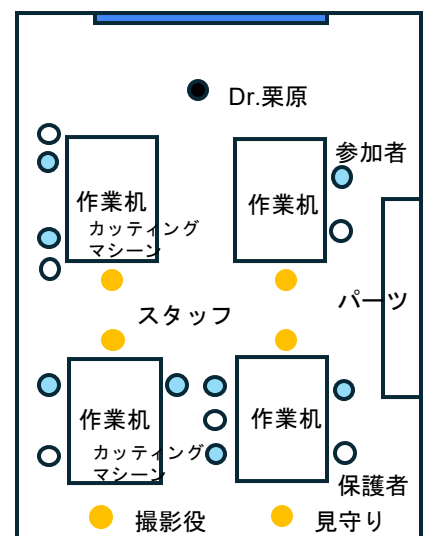


2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画
栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 6名
開催日時 : 2024年10月11日(金)13:00～ 15:30
会場 : きぼーるこども交流館 工房(千葉市中央区中央4丁目5-1)
参加方法 : 事前申し込み(市ホームページより応募フォーム)
参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

09:45 現地集合(スタッフ5名)1Fアトリウム
09:55 栗原氏とスタッフ1名駐車場到着
10:00 こども交流館ご担当者にご挨拶
10:05 会場設営、道具やパーツを搬入
11:00 事前打ち合わせ
12:30 受付開始
13:00 ワークショップ スタート
13:10 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、注意点など
13:50 制作開始
※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ
15:20 残り時間呼びかけ
15:30 終了時間→参加者で記念撮影
15:45 完全終了→作品撮影開始
15:50 片付け開始
17:00 完全撤収



【工房レイアウト】

4. 評価／所感

昨年度から継続しているこの栗原ワークショップはここまでの子どもたちの作品数が累計105個となった。目標の200個に向けて折り返しまで到達したと言えるが、今回も個性的な作品が見事に完成した。きぼー内、子ども交流館の工房での実施ということで、参加者である子どもたちのモチベーションは随分と上がっていたように思われる。ワークショップをどのような場所でやるかという会場の選定も本ワークショップの重要なファクターのひとつである。

アフタースクールと違い、今回は大半の子どもが保護者と来場していたが、栗原氏からは「このワークショップではどうぞ大人の手もどんどん加えて協力して作っていただけて結構です！」という宣言の下、子ども以上に楽しまれている保護者が多かったのが特徴と言えよう。これは今後、大人向けのワークショップを企画するにあたって、手応えを感じる現象であった。

今回のワークショップは保護者同伴の方が多かったことや我々スタッフも子ども用軍手を用意したり、夏休みに実施した経験が活かしていることもあり、火傷や怪我のトラブルは皆無であった。

5. 課題

アフタースクールや今回のような会場は閉じられた空間であり、落ち着いて制作にあたれるという利点はあるが、参加した人たちの充実感が毎回高いだけにこういった取り組みをもっと多くの人に知ってほしいというジレンマもある。また本芸術祭の開催についてもまだ十分に市民に浸透していない現状を考えると、今後はもちろんアフタースクールなどの実施も継続して丁寧に対応すると同時に、商業施設や一般の市民が入入するような公共の空間でも積極的に実施して、栗原ワークショップの素晴らしさや芸術祭のアピールにも繋げていきたい。



6. ワークショップ記録写真



2024年10月15日(火)

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

(会場:市役所1階イベントスペース)

1. 実施概要

夏休みに引き続き、秋休み期間中に市内小中学生向けのワークショップを開催。募集に関しては市政だよりと市のホームページを中心に行った。

◎参加人数:8名、うち保護者2名(定員20名)



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画
栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ 6名

開催日時 : 2024年10月15日(火)13:00～ 15:30

会場 : 市役所1階 市民ヴォイド(千葉市中央区千葉港1-1)

参加方法 : 事前申し込み(市ホームページより応募フォーム)

参加料 : 無料

3. タイムスケジュール

09:45 現地集合(栗原氏とスタッフ6名)

09:50 駐車場より荷物運搬

10:00 長机や椅子を用意

10:10 会場設営、道具やパーツを準備

11:30 交代で休憩

12:30 受付開始

13:00 ワークショップ スタート

13:10 栗原氏 挨拶→ワークショップの説明、注意点など

13:50 制作開始

※途中、カッターの注意点や給水などを呼びかけ

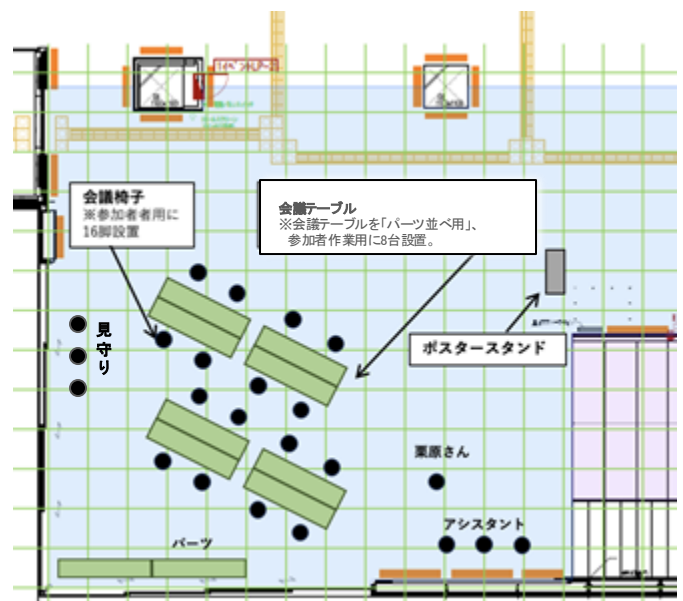
15:20 残り時間呼びかけ

15:30 終了時間→参加者で記念撮影

15:50 完全終了→作品撮影開始

16:00 片付け開始

17:00 完全撤収



【会場レイアウト】

4. 評価／所感

今回のワークショップでは、自分でも制作したいという保護者の希望者が2名あり、かねてより大人の参加者もぜひ実施したいという栗原氏の想いを実現できた回となった。お二人とも違和感なく楽しまれており、作品も自由な発想の楽しいもので、今後の展開の参考になった。

会場はガラス張りで天井が高いため、自然光が入り開放的な空間での制作は子どもも大人も創作意欲が膨らむ環境であったに違いない。その楽しげな様子や表情は周りにも伝播し、終始和やかな空気感を醸し出していた。

5. 課題

市役所1階入り口付近という場所柄、通りかかった方の多くが興味深く足を止めて見学されていた。中にはスペース内に入ってこられ、一人一人の作品を見ながら「あらかじめ知っていたら参加したかった」とおっしゃる高齢の女性客もいらっしゃったことは我々も想定外であった。栗原氏からはこのように一般の方の目に触れる場所だからこそ、「芸術祭」をもっとアピールしても良かったのでは？との意見もあり、10月21日の記者会見終了後は、正式ロゴも入れた展示物なども使用できるので、積極的にPRしていきたいと考えている。また芸術祭の告知という目的で、市民に開かれた場所でのワークショップを戦略的に展開することも検討したい。

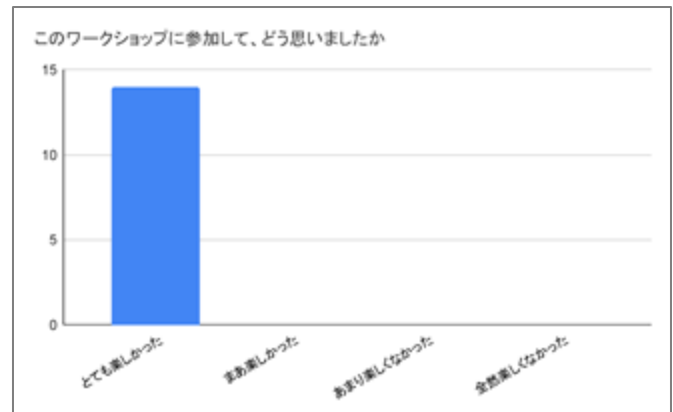
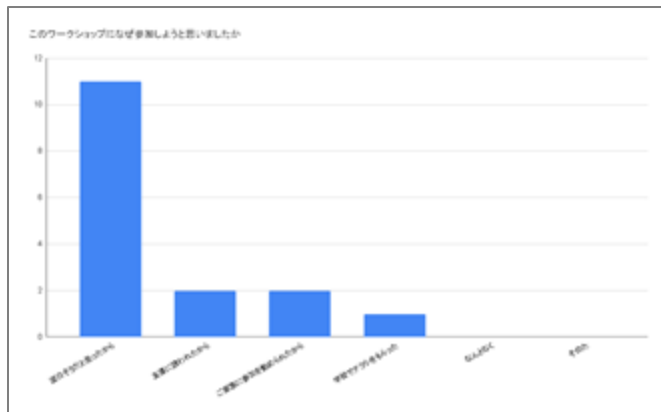


6. ワークショップ記録写真



7. アンケート結果 取得数25（こども:14 ／保護者:11）

<こどもの参加者>



◎子ども設問(原文のママ)

授業の中で、初めて知ったことや面白いと思ったこと、思い出に残ったことを教えてください。

- ・いろいろな形を作れたので楽しかったです。
- ・溶かして、形を作るのを初めて知りました。
- ・発泡スチロールがすいすい切れるなんて思わなくて面白かった。
- ・いつも発泡スチロールをとめるのに苦戦していたが、とめ方がわかったこと。
- ・協力して楽しく作れた。
- ・大きくすれば楽しくなる
- ・このテーマパークの工作をして発泡スチロールの使い方を知りました。
- ・発泡スチロールを切るのが楽しかった。
- ・発泡スチロールで色んな物、形が作れて楽しかった、色塗りが楽しかった。
- ・どうやって考えながらやったのが楽しかった。
- ・黄色機械で発泡スチロールがとけるなんてすごい
- ・電車や信号機を細かく作れたこと

授業に参加して、千葉市への気持ちが変わりましたか

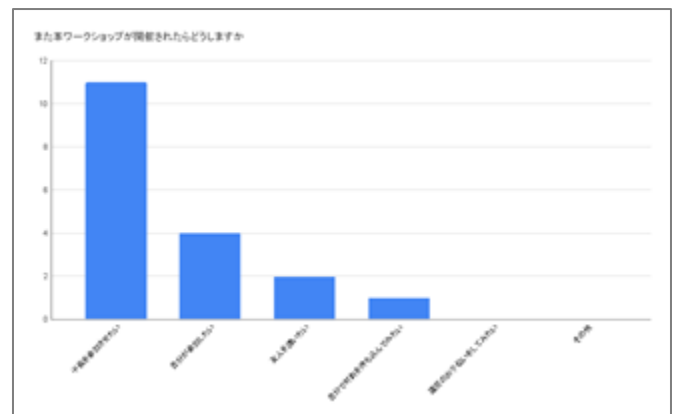
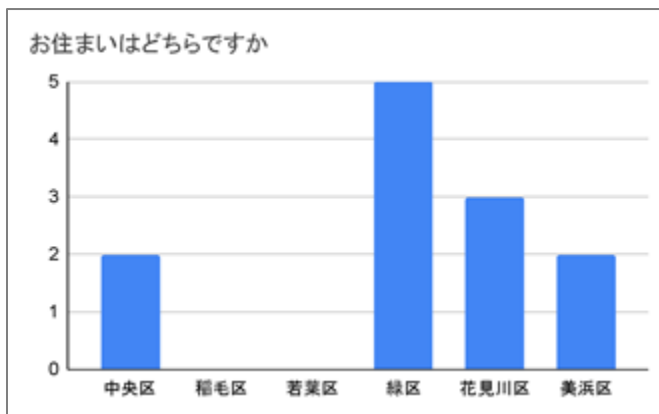
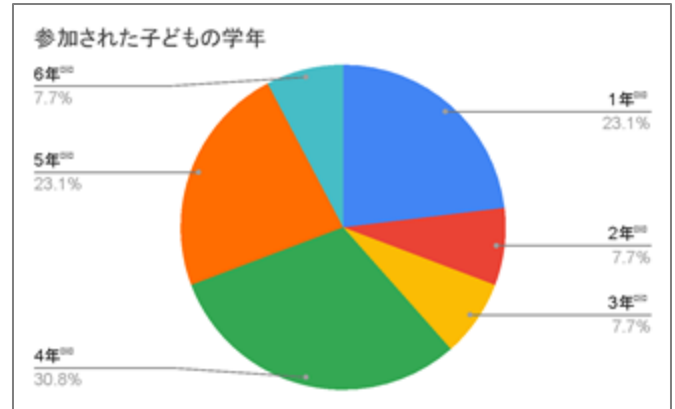
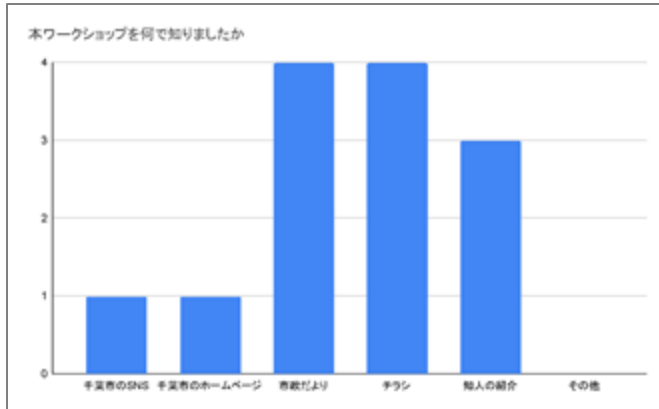
- ・千葉市のことをよく考えながら作ったから、より千葉市が好きになった。
- ・好きになった
- ・千葉市が6区だったと知れた
- ・変わった
- ・変わりました
- ・より思いが深まった
- ・千葉市のよいところを改めて知った
- ・近所で楽しいところがいっぱいあるだな
- ・色々な千葉市の所などが知れてになったです。他の市でもいいけど千葉市の所をもっと見たいです。
- ・千葉市に色々なものがあるのが改めてわかった。

次回の授業ではどんなことを学びたい、やってみたいと思いますか

- ・段ボールで何か大きなものを作りたい。
- ・次回では海かプールなどを作りたいです。(粘土で)
- ・自分が入れるものを今度は作りたい
- ・実際にある建物を作りたい
- ・今回ののが楽しかったからまたやりたいです。人が入れるぐらいの大きいのを作りたいです。
- ・全員のものをくっつけてみたい
- ・自由にテーマを決めて作ってみたい
- ・粘土やステンドグラス
- ・模型で迷路を作ってみる
- ・発泡スチロールで動物をいっぱい作りたい
- ・もっと作り込める時間があつたらいいな！
- ・千葉市の違う所を作りたい

7. アンケート結果

<保護者>



◎保護者設問(原文のママ)

本ワークショップについて感想を教えてください

- ・なかなかアイデアが浮かばず、難しかったけど、作るのはとても楽しかったです
- ・実際にアーティストの方と触れ会える機会なんて、なかなかないので息子にとって良い刺激になりました。ありがとうございました。
- ・元々ものづくりが大好きでマインクラフトで大人もビックリする様なものを作ったりする子なのでとても楽しそうに作っていたので参加して良かったです。
- ・皆さんが気さくに手伝ったりして下さり、とても楽しかったです。やり始めたら作り込みたくなり、時間がもっとあっても良かったです。
- ・子どもと一緒に楽しく創作できました。初めての素材でも詳しい説明があり、工夫して楽しめました。大人も参加するのでできるタイミングがあるなら、ハサミ、カッターなどがあると使い安いかと思います。
- ・ふだん使わない、使えないもので作業できて、とても楽しそうでした！
- ・親も参加させていただいて、楽しくすごせた。よい経験になったと思う。
- ・とても楽しかったです！子供より自分がわくわくしました。
- ・子どもと一緒に考えながら楽しく参加できました。いろんな発想があって面白かった。
- ・時間が足りないくらいとても楽しかった様です。

本会場以外で本ワークショップを開催してほしい場所がありますか

- ・千葉周辺ならどこでも有難いです。(電車で行きやすいところ)
- ・家から近いので問題ないです。
- ・ここだと利便性が良いので、ここでおねがいします。
- ・花見川団地！

2024年12月23日(月)実施 栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」 (会場:おゆみ野南小学校アフタースクール)

1. 実施概要

本芸術祭のプレ企画として、夏休み期間に千葉市内6か所のアフタースクールにてワークショップを行った。その際実現できなかった緑区にて、いよいよ冬休み直前の最終授業日に実施。開催場所は「おゆみ野南小学校アフタースクール」。本開催で千葉市内全6区でのワークショップ開催を実現した。

参加人数:18人(定員18人)

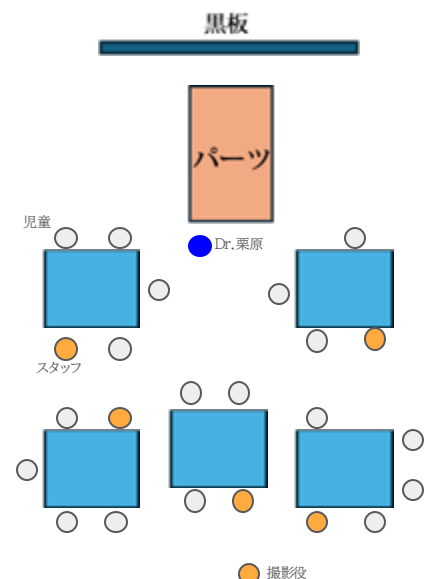


2. 開催概要

- タイトル : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画
栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
- 講師 : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ6名
- 開催日時 : 2024年12月23日(月)14:00-16:00
(子どもたちから要望が多かったため、16:30まで延長)
- 会場 : おゆみ野南小学校アフタースクール高学年用校舎2階フリースペース(千葉市緑区おゆみ野南4丁目26)
- 参加費 : 無料
- 参加方法 : アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ

3. タイムスケジュール

12:00	スタッフ集合(おゆみ野南小学校)
12:10	アフタースクール先生方と挨拶
12:15	荷物運び込み(栗原車は建物側に乗り入れ)
12:40	会場設営
13:00	道具をセッティング
14:00	開場(席誘導)
14:05	栗原さん自己紹介→スタッフ紹介
14:15	道具使い方、パーツ説明
14:30	ワークショップ開始(途中、ヒートカッター使用時の手袋など注意喚起)
15:45	終了時間事前告知
15:55	ワークショップ終了
16:00	記念撮影
16:30	作品を作り続けた子どもたちが残って、作品を作る
16:30	撤去作業
17:35	解散→お疲れ様でした！



4. 当日の流れ

導入

栗原氏によるワークショップの概要、道具の使い方と注意点を説明。



選択

栗原氏が事前に用意した発泡スチロール製のパーツを選ぶ



制作

子どもたちは模型の制作に夢中になった。



進行

発泡スチロール製の部材を貼り付けたり、色付けたりする作業を根気強く続ける参加者。



協力

スタッフは子どもを見守り、子どもたちの要望を聞いて、制作に協力した。



5. 評価/所感

冬休み直前の最終授業日に行われたアフタースクールでのワークショップには、定員18名を大きく超える25名の子どもたちから申込みがあった。子どもたちの高い関心と熱意を感じることができた。その要因のひとつとして、アフタースクールとの事前打合せの際に栗原氏が持参した参考作品を置いて行ったことが功を奏したと考えられる。実際の作品を目にした子ども達が「作ってみたい!」と創造意欲を掻き立てられたと当日アフタースクールの先生方からお話を伺った。このことは今後の参考になると捉えている。

今回のワークショップは月曜日に実施されたが、前週の金曜日に、アフタースクールの先生方が事前にレクチャーとして、子どもたちに千葉市について話をしたそう。その結果、ワークショップ当日には子どもたちの千葉市へのイメージがより具体的で、自分たちが生活している街への愛着を強く感じている様子が見受けられ、作品の制作にも反映されていた。

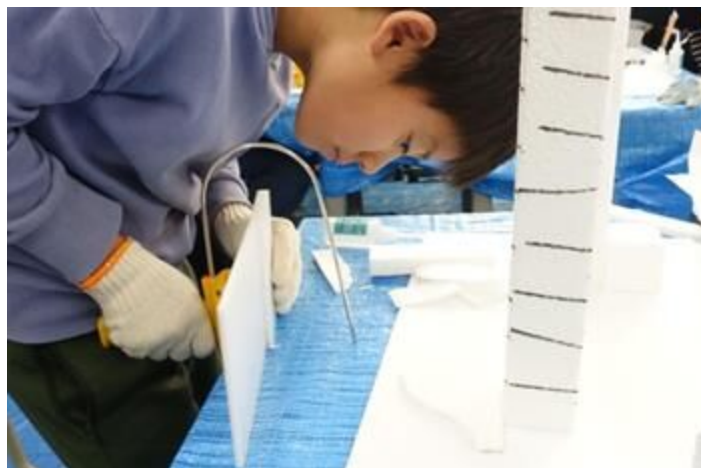
今回の参加者は全員、緑区在住だが、作品の多くにはポートタワーが制作され、中央区で実施した回と比べてモノレールの表現が少ないなど、地域性が作品に反映されていることがわかった。

先生方のご協力のおかげで、子どもたちへの丁寧な見守りが行き届いていると感じた。

6. 課題

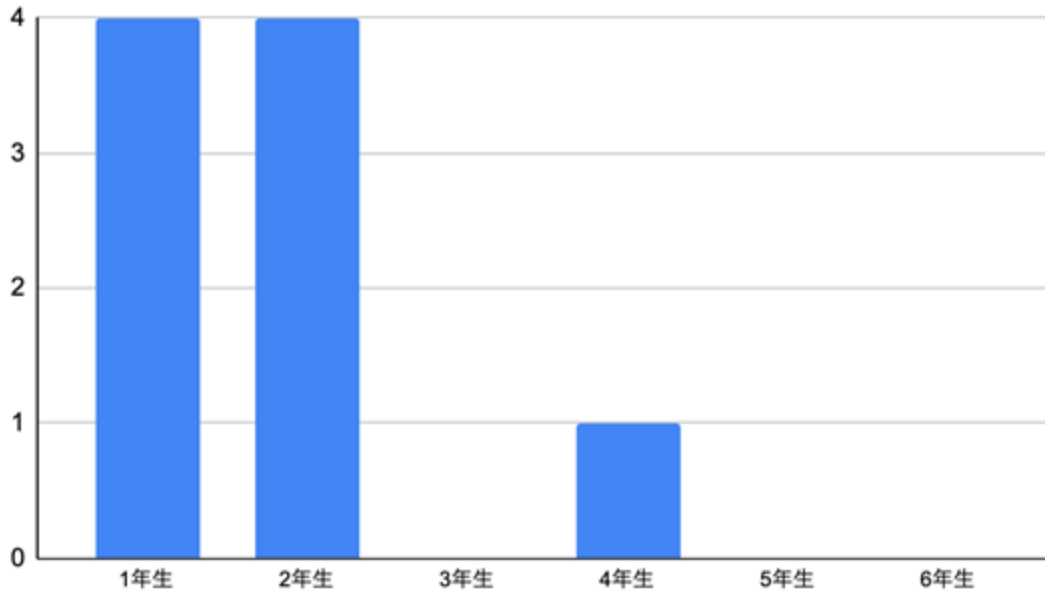
今回の参加者は主に1年生と2年生で、2時間のワークショップでは時間が足りず、2時間半に延長して対応した。子どもたちの制作に対する集中力は素晴らしいものであったが、会場の撤収期限なども事前に伺って、時間配分などの計画に活かしていきたいと思う。



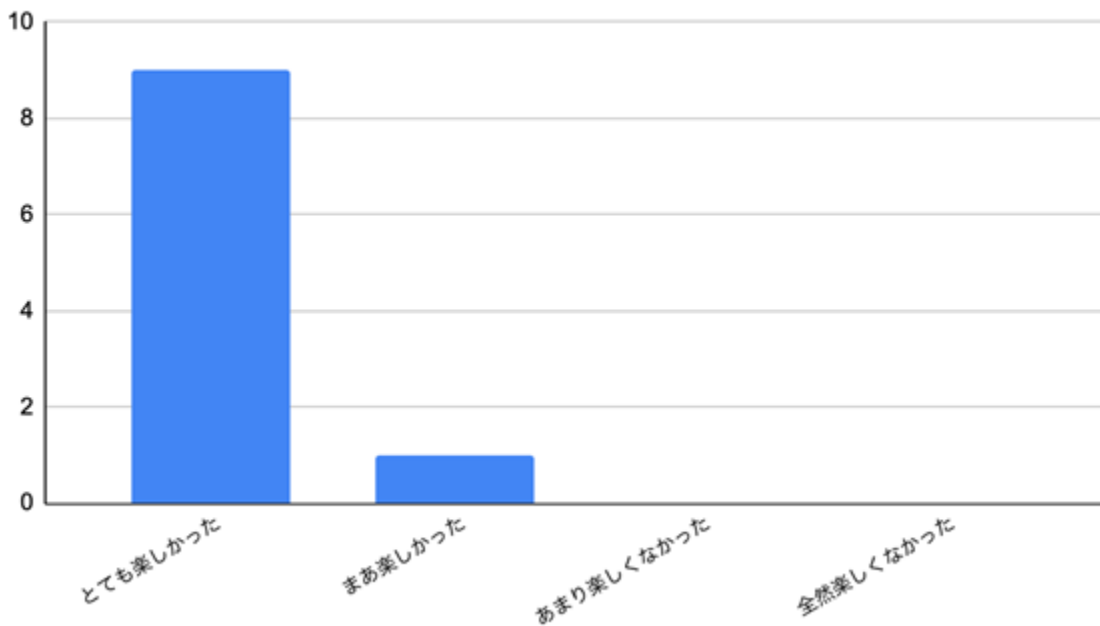


7. アンケート結果 ＊取得数10

参加者学年



「わたしの千葉市テーマパーク模型を作ろう！」に参加して、どう思いましたか。



◎設問

授業の中で、初めて知ったことや面白いと思ったこと、思い出に残ったことを教えてください。※文章は原文のママ

- ・発泡スチロールを切る道具が火を使っていて、怖かった。慣れてくると簡単になってきた。
- ・何とかノコギリ
- ・千葉城の中の場所が楽しかった
- ・こんな機械があるんかと思った
- ・発泡スチロールカッターの仕組みを最初はそのまま熱なしで切るのかと思ったけど、熱で切るのだとわかりました。初めてこのワークショップに参加できて楽しかったです！
- ・発泡スチロールが切れるのがすごかったです。
- ・ドクターが色々な機械を使いこなしていて、中でも穴を開ける時の声が面白かった。
- ・遊園地に行って観覧車に乗ったのです。

2025年1月19日(日)実施 栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」 (会場：イオンモール幕張新都心)

1. 実施概要

本芸術祭のプレ企画として、主に市内アフタースクールを会場に開催してきた栗原良彰氏によるワークショップシリーズを、今回初めてショッピングモールで開催した。

この企画では、市内最大の商業施設というオープンな会場で、不特定多数の方が参加できるようにプログラムをアレンジした内容とした。

これまでのワークショップとは異なり、個々に模型を制作するのではなく、参加者たちがひとつの作品を完成させる形式をとった。

制作された模型は栗原良彰氏の作品と共に、2025年秋頃本会期中千葉市内会場で展示する。



●参加人数：リスト97名見学者を含めた延べ人数約288名

2. 開催概要

プロジェクト名 : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画
栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

アーティスト : 栗原良彰(アーティスト)・スタッフ10名

開催日時 : 2025年1月19日(日)10:00-16:00

会場 : イオンモール幕張新都心 EKIMAE 1F エキマエコート

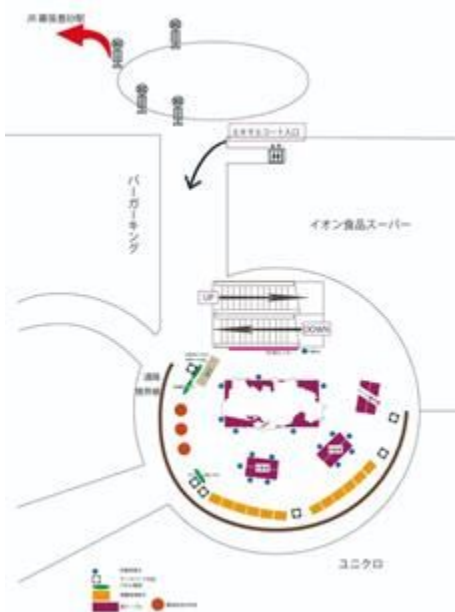
参加費 : 無料

参加方法 : 事前申し込み不要 当日会場にて受付

対象 : 小学生以上(随時入り替え制、最大同時参加人数は20名)

特別協力 : イオンモール幕張新都心

3. 会場設置



4. 当日の動き

・会場設営

スタッフは8:00に会場に集合し、荷物を荷捌き場から運び込んだ後、会場の準備を開始。今回の会場準備は、ワークショップの準備、藤浩志氏の作品展示、広報活動の3つのグループに分かれた。

広報活動では、会場内の大型モニターを使用して芸術祭のプロモーション映像と参加者の手元を小型カメラで撮影し、その場で編集したものを連続上映した。また、円形会場の特性を活かし、動線に沿う形でこれまでにアフタースクールなどで作られた子ども達の作品のうち、選ばれた5点の作品を配置した。

さらに、公式SNSフォロワーの増加を目指し、参加者や通行人の注目を引く施策として風船を用意した。フォローしてくれた方にステッカーと共に進呈。



アートプロジェクト「かえっこ」を手掛けるアーティスト藤浩志氏による作品「Anger Dog」3体が会場に出動し、円形会場内に展示を行った。(栗原氏からの提案→藤さんから大賛成をいただき実現した)



今までの実施回とは異なり、今回は千葉市の地図を基にした土台をあらかじめ用意。参加者の作品をその土台に集めることで、一つの大きなテーマパークを完成させることを目指した。

土台の下には、子どもの視線を考慮して設計された折りたたみ式の少し低めの支え台を栗原氏が用意した。また、作業機とパーツ機は千葉市地図模型の土台から放射状に配置されるようセッティングした。



10:00～

開店後、来場者を迎え入れ、会場内を案内した。スタッフがワークショップの内容を説明し、参加を促した。



参加者が作品制作に取り組む一方で、スタッフは千葉市の模型を土台として活用し、作品に高さを出すための段差を作る作業を進めた。



親子で参加した来場者は、お互いに協力しながら作品制作に取り組んでいた。



11:15～

神谷市長が視察に訪れ、本プロジェクトの概要を説明。



一番最初に完成した作品が、土台に貼り付けられた。
子どもとスタッフの間で、作品の置き場所について相談しながら進めていた。



参加者たちはそれぞれオリジナルの作品を千葉市の土台に飾り付け、共同制作の作品が次第に形を立ち上げてきた。

15:00 受付終了

15:30 参加希望者全員作業台に案内済み



アーティストの栗原氏が土台の上に新しいレイヤーを作成し、作品全体にさらなる立体感を加えていた。



16:00

ワークショップ終了後、集合写真や作品写真を撮影し、会場の片付けを始めた。作品は4つに分解し、備品は中央コミュニティセンターに搬入、作品はアーツうなぎ1階に運搬した。



・参加の流れ

参加者側



風船で飾ったプロジェクト紹介パネルに興味を惹かれて、参加を申し込む人も。



受付で、氏名を記入していただく。SNSをフォローして、風船とステッカーをもらった。



栗原氏の紹介を含めた制作の導入説明を受けた。



参加者は作品制作を始め、選んだパーツを貼り付けたり、自分の好きな形を切り取ったりしていた。

運営側



スタッフは興味のありそうな方にプロジェクトを簡単に説明。



参加者をテーブルに案内し、スタッフが本日の進行や道具の扱い方について説明。



発泡材を切るための道具である電熱カッターの使い方と注意事項をスタッフが子どもたちに説明。



子どもの制作を見守る栗原氏。

参加者側



夢中で制作に集中する参加者。



完成した作品をスタッフに渡して、作品の記念撮影を撮った。



時間のある参加者はスタッフと相談しながら、作品の置き場を決めた。



最後にはアンケートに回答して、制作を完了させた。

運営側



スタッフは参加者と話し合いながら、オリジナルのテーマパーク制作にアドバイスをし、制作をサポートした。



会場全体の状況把握。(空席や参加者の進行状況など)



作品の最終形を完成するために、土台を調整しながら、参加者の作品を設置した。



テーマパークのレイヤーを調整しながら、立体感を引き出した。

・市長視察



栗原さんが神谷市長にワークショップを紹介。



中村ディレクターは市長にプロジェクトを説明。



芸術祭のプロジェクトについての紹介パネルを見学。



藤浩志氏の作品を鑑賞。



子どもたちの作品を視察。



参加者たちと歓談。

5. 評価/所感

- ・何よりも、できあがった作品のスケールが大きく素晴らしかった。イオンモールの3フロア吹き抜けというスペースを最大限に活かし、参加者全員の気持ちが結集した作品となった。
- ・家族で一緒に参加した方が多く、制作中も和気藹々と楽しそうな雰囲気が伝わり、それが近くを通りかかった人々の「やってみたい！」という気持ちをさらに盛り上げたと思う。協力して作り上げたものは印象的なものとなり、作品が大きくなるごとに人々の目を引くものになっていった。
- ・ショッピングモールは朝から終始人が多くて途切れることがなく、これだけの方にワークショップを通じて千葉国際芸術祭の実施を告知できたことは、広報的にも効果があった。
- ・大型モニターには、千葉国際芸術祭のオリジナルアニメーション動画を流し、ワークショップ会場の雰囲気を盛り上げる役割を担っていた。また、色とりどりの芸術祭オリジナル風船が会場装飾として賑やかさを増し、非常に良いアクセントになった。
- ・イオンモール様の担当者からは「こんなに人気が出るなら、次回はグランドモールの大きなスペースでやってもらいたい」とのお言葉をいただいた。
- ・会場で展示していた児童作品の作者が複数名見に来てくれて、家族と一緒にワークショップに参加し、アーティストとも話をしていたことがとてもうれしい出来事だった。
- ・「かえっバザールinそごう千葉店」のカエルスタッフ親子もワークショップに参加しにきてくれた。確実に「かえっこ」が千葉市に浸透してきている事を感じる出来事だった。継続的に実施することが重要であることを再確認できた。
- ・事前の提出書類や注意事項が多かったが、特にクレームもなく、ワークショップを無事終えたことができたのは良かった。
- ・InstagramとLINEのフォロワーはそれぞれ35人増加した。

6. 課題

- ・ワークショップ後半、ウェーティングの人も増えたタイミングで、運営側の判断でテーブルを増設したことについて、栗原氏より「できれば避けてほしかった」とのコメントを頂戴した。今回のワークショップの主催者として、道具の準備や説明・指導するスタッフの配置などを総合的に考慮して実施していたが、やはり不特定多数の方が参加する場合に、どうしても参加者をお待たせしてしまう場面もあった。コンテンツのクオリティを保ちつつ、多くの方にご参加いただけるようなオペレーションを今後も検討していきたい。
- ・参加者1人1人に対して、今回のワークショップでは制作時間の制限を設けなかったため、待ちきれずに帰られる方もいた。参加者が待っている間の会場の修正や調整に対して、今後検討が必要である。
- ・受付の場所がわかりにくかったという声を頂いた。誘導役や空席の確認役まで人手が回らないという場面があった。インカムの導入も検討するなど一考である。
- ・アフタースクールや市役所での開催時は、栗原氏がコンセプトや道具の注意点を一斉に参加者に話していたが、今回はこれまでと異なる形式のため、毎回入れ替わる参加者へ、繰り返しスタッフから導入の方法について説明する時間が必要となり、スタッフ側の業務も増えることとなった。人数を増やすことは元より、オペレーションの見直しで解決できる部分もあったと思われる。
- ・混んできた時の対応方法としてプランを複数用意して、アーティストに選んでもらうなど、もう1歩踏み込んだ提案も今後は検討したい。

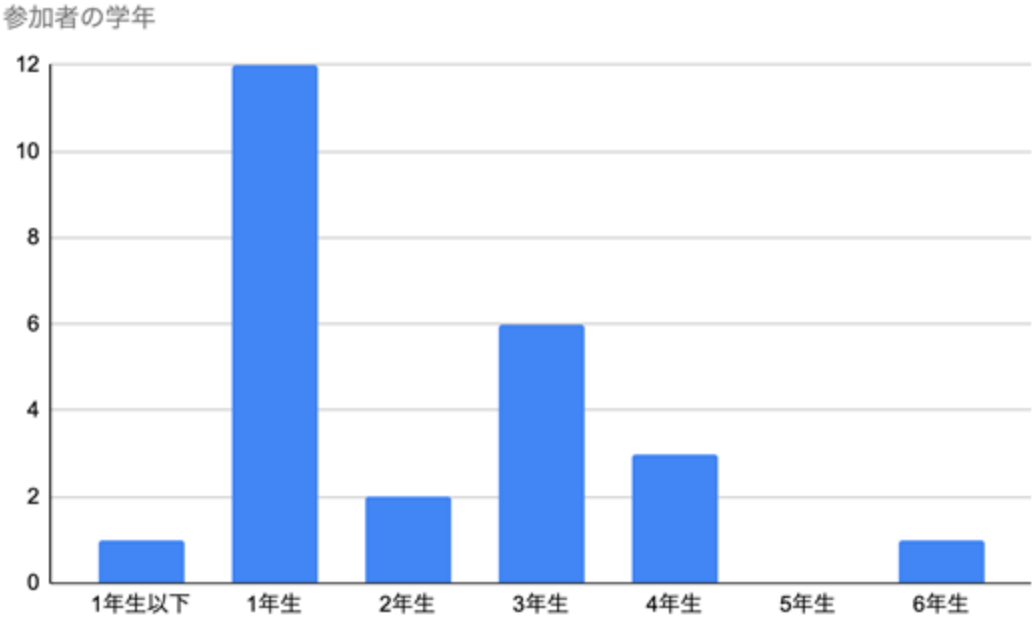
今回の実施は、今後、同形式でワークショップを行う際に大変大きな学びの機会となった。

7. 記録写真

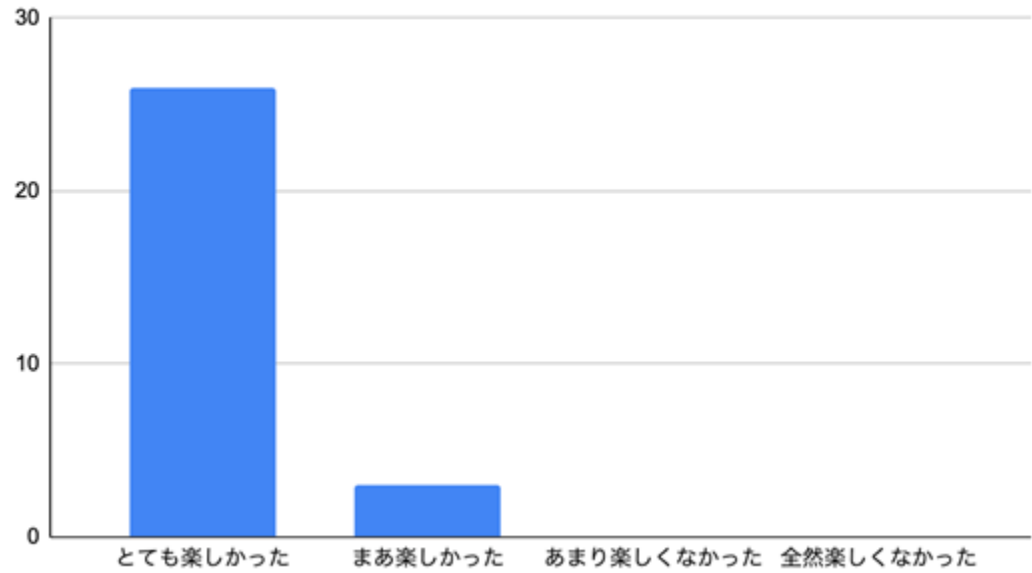


8. アンケート結果＊取得数59（子ども:29/大人:30）

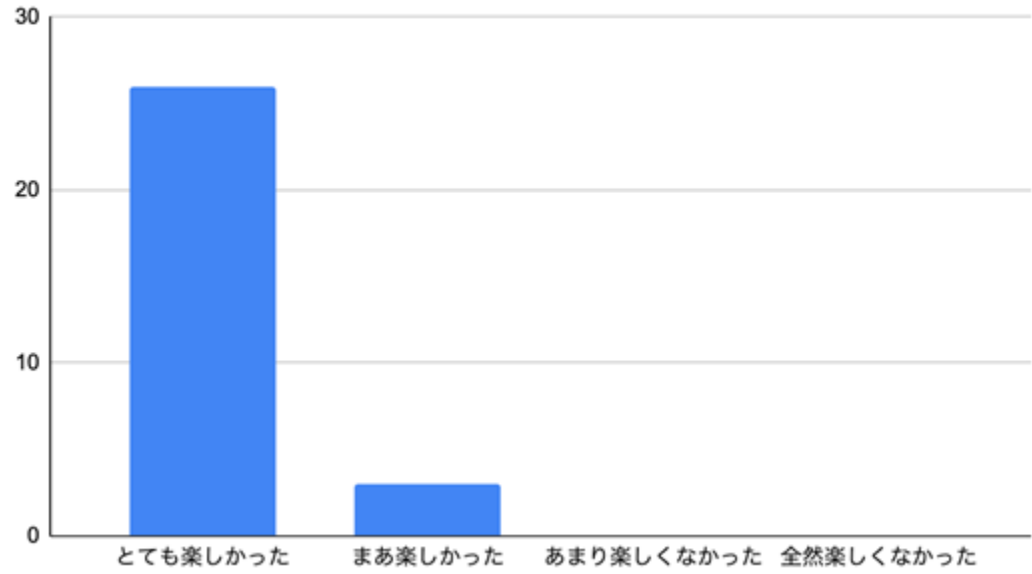
◎子ども向けのアンケート結果 ＊回答者:29



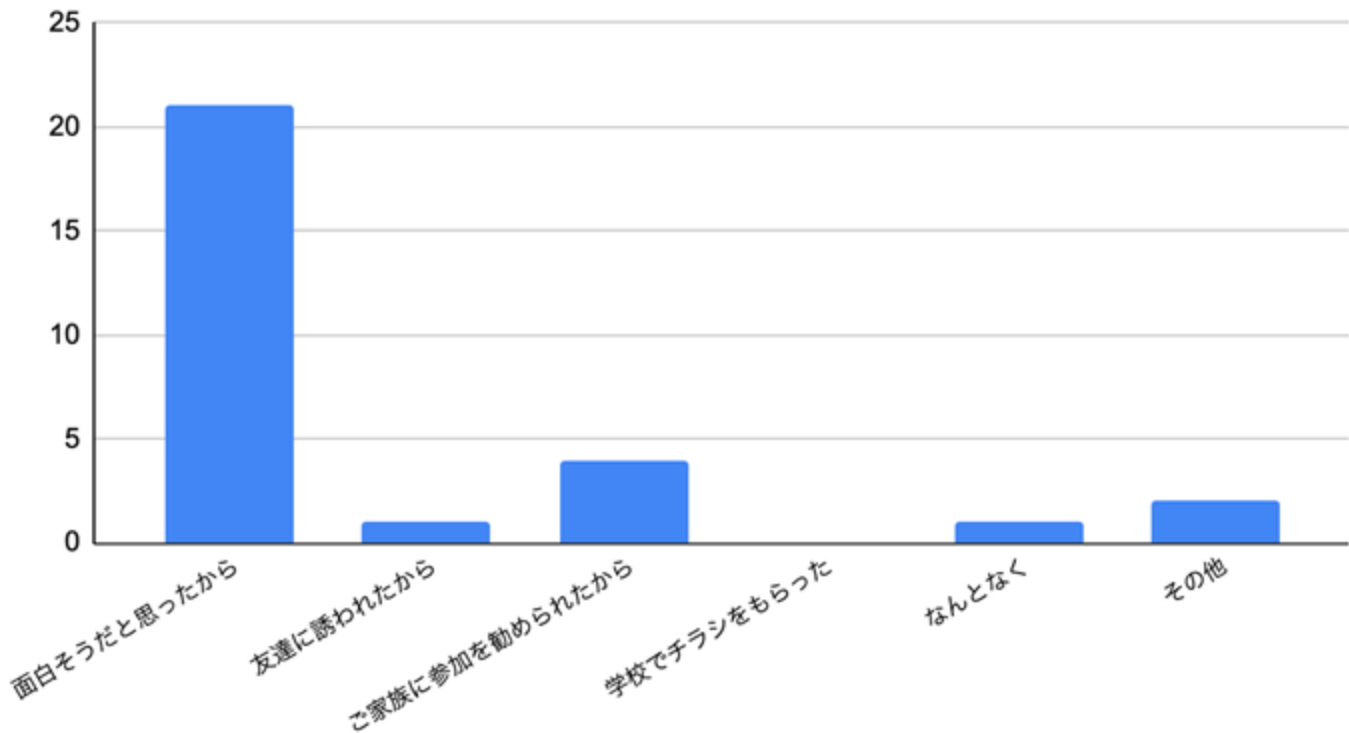
「わたしの千葉市テーマパーク模型を作ろう！」に参加して、どう思いましたか



「わたしの千葉市テーマパーク模型を作ろう！」に参加して、どう思いましたか



このワークショップになぜ参加しようと思いましたか



◎設問

ワークショップの中で、初めて知ったことや面白いと思ったこと、思い出に残ったことを教えてください。※文章は原文のママ

- ・熱ノコギリが面白かった 楽しかった、たくさん工夫して作れた
- ・いろんなものを作れて楽しかった 忘れていた千葉の名所を思い出した
- ・組み立てのが楽しかった 熱で切るカッターが初めてみた
- ・自分で千葉市の町を作れて楽しかった
- ・電気ノコギリを初めて使ってびっくりした
- ・発泡スチロールを切るのが面白かった
- ・ノリの付け方
- ・みんなで一つのものを作るのが面白かった
- ・発泡スチロールを切る機械が面白かったそうです
- ・素材を選ぶことが楽しかった。色んなものを使って作るのが楽しかった
- ・すごくでかい生き物を作れたからです
- ・自由に作れた、楽しかった
- ・みんなで作って楽しかった
- ・みんなで自分が作りたいのを存分に作っていた
- ・作るのが楽しかった
- ・色んな形を組み合わせて作るのが面白かったです
- ・おろしや花火をおいてどんどん思いつきがあってとても面白かった
- ・うすい板でもすてきな作品が作れる
- ・自分で作ったのすごいなと思った(自己満足)

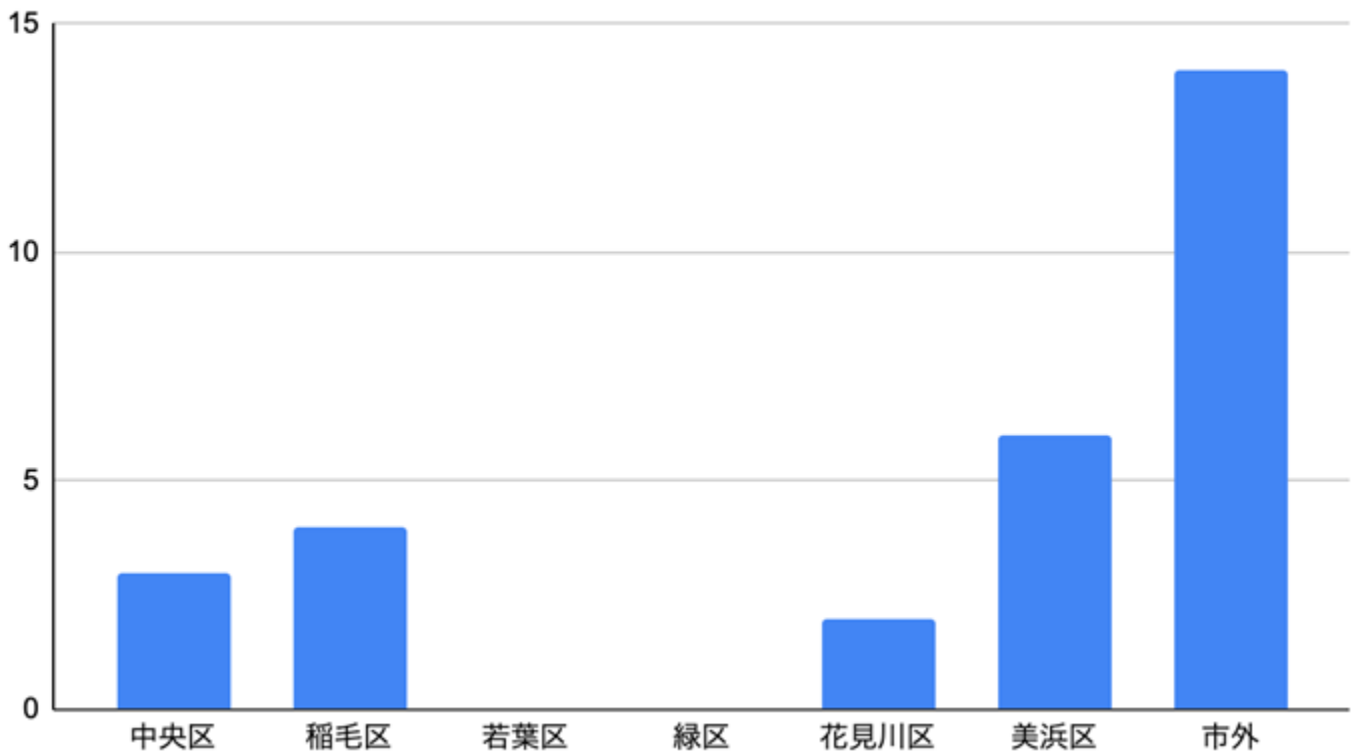
◎設問

次回のワークショップではどんなことを学びたい、やってみたいと思いますか。※文章は原文のママ

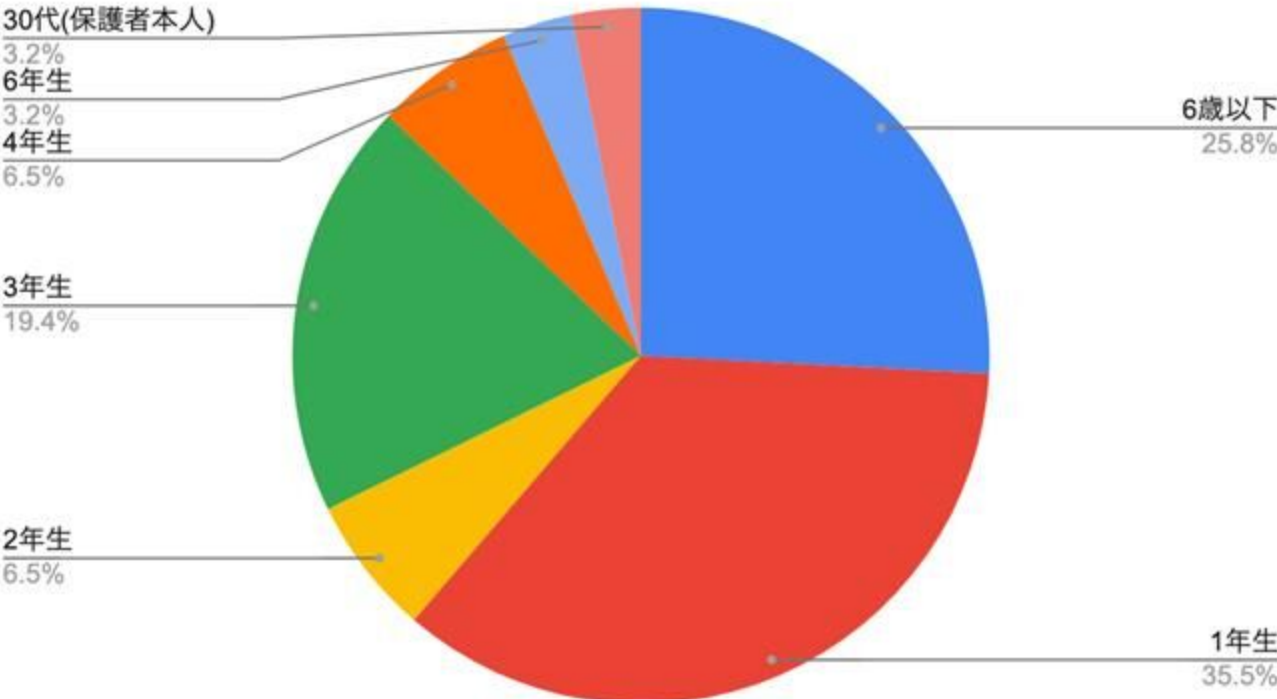
- ・また作成したいです
- ・千葉オリジナルの(または千葉をテーマにした)ボードゲーム。千葉オリジナルのピタゴラ装置を皆で作りたい
- ・工作(自由に作れるもの)
- ・いろんなことを学びたい
- ・もっと色んな形を使って遊びたい
- ・生き物を作ってみたいです
- ・また違うパーツを繋ぎ合わせて作ってみたいです
- ・次やる時観覧車など今回やった時と違うのをやってみたい
- ・お絵描きがしたい。工作がしたい。今日みたいなことがやりたい。
- ・家でも同じような作品を作りたいと思いました
- ・本当のお家を作りたい、そしてお友達と住みたいそうです
- ・またやりたい
- ・また目立つアートを作ってみたい
- ・もっと千葉市の魅力を作りたい

◎大人向けのアンケート結果 *回答者:30

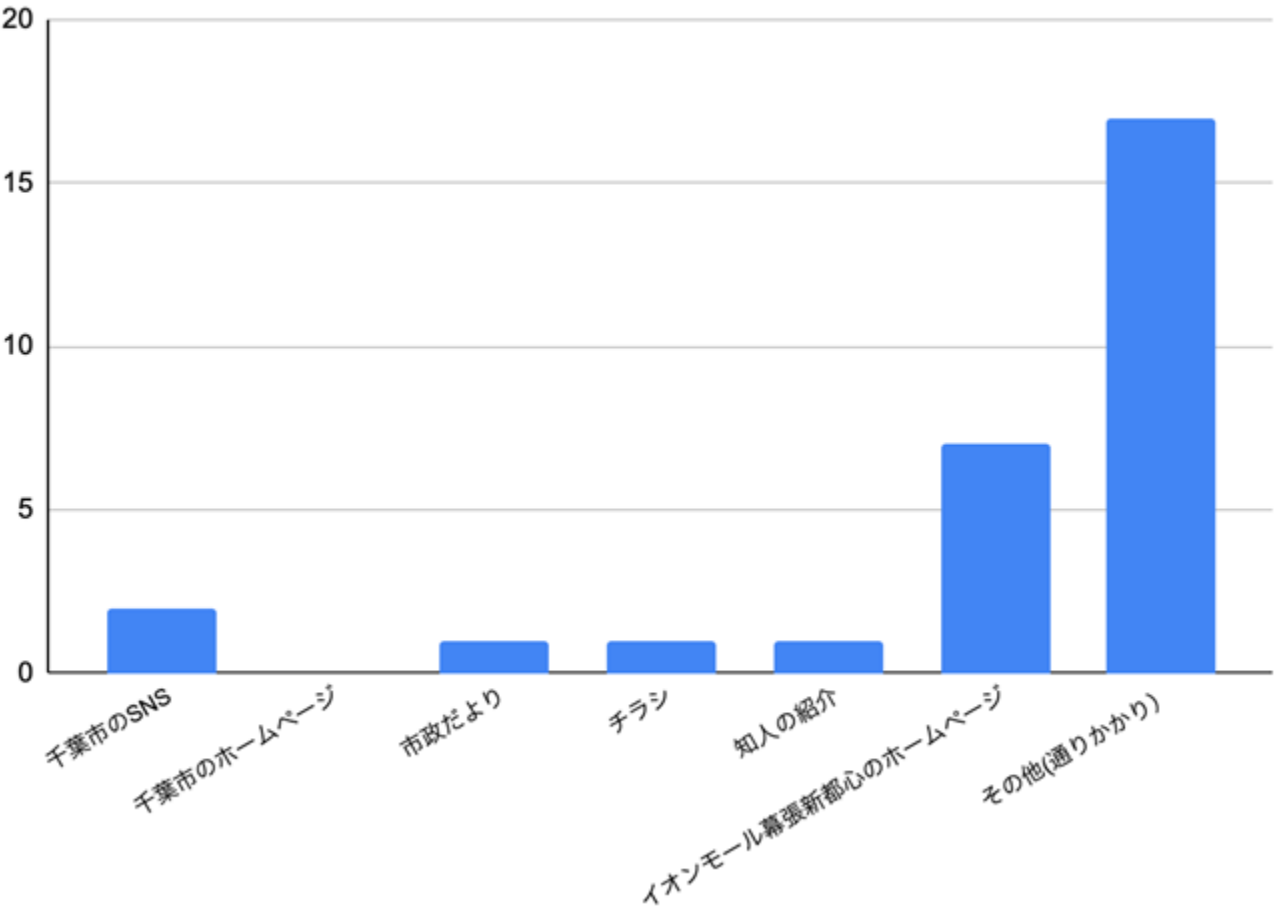
お住まいはどちらですか



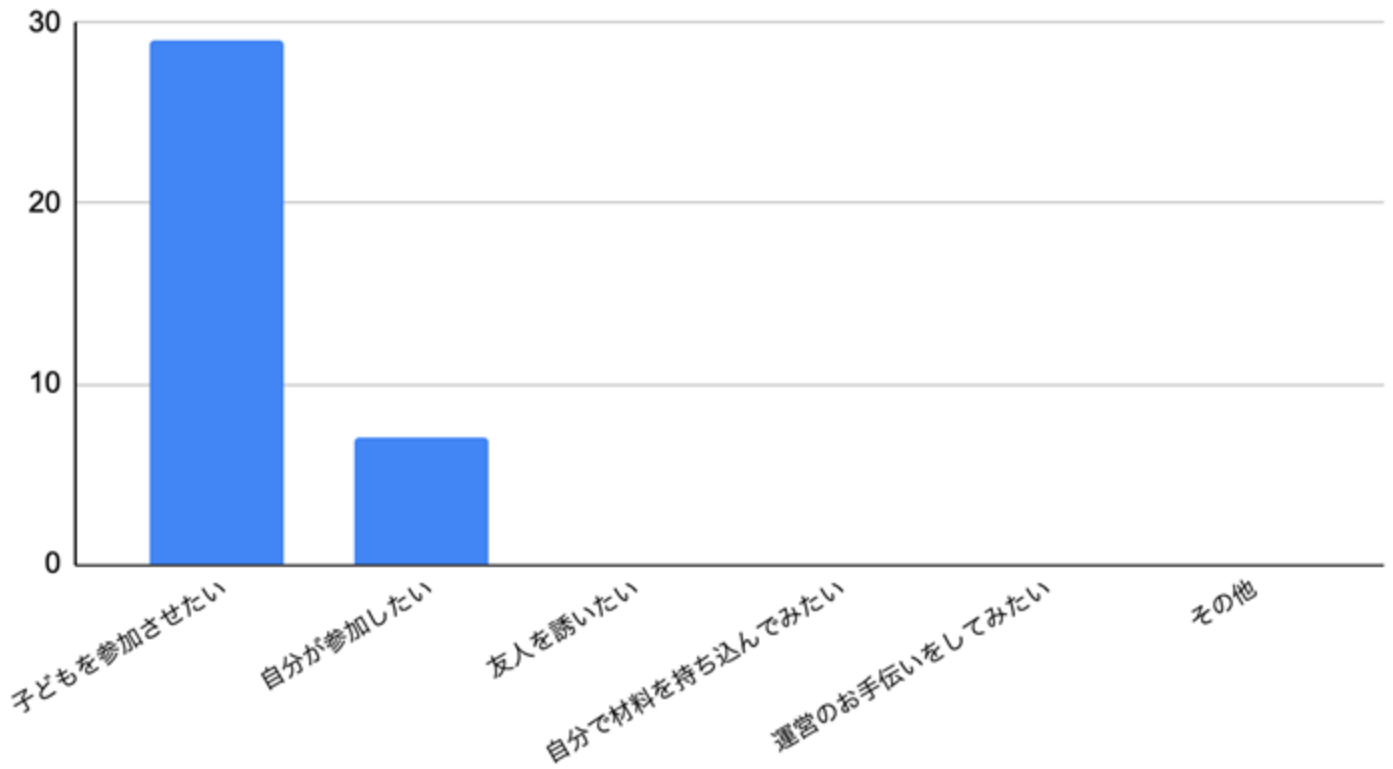
参加されたお子さんの年齢



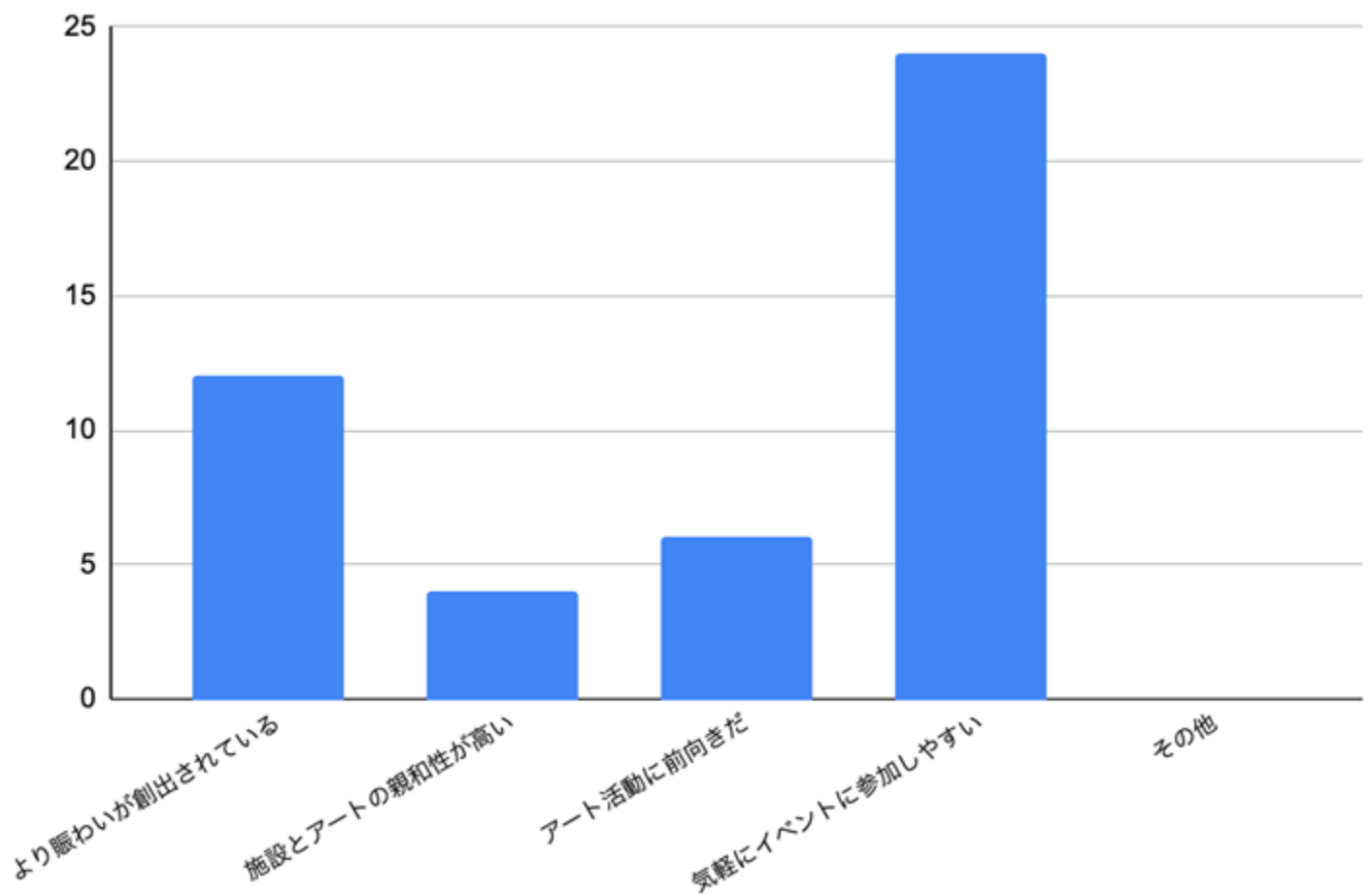
本ワークショップを何で知りましたか※複数回答可



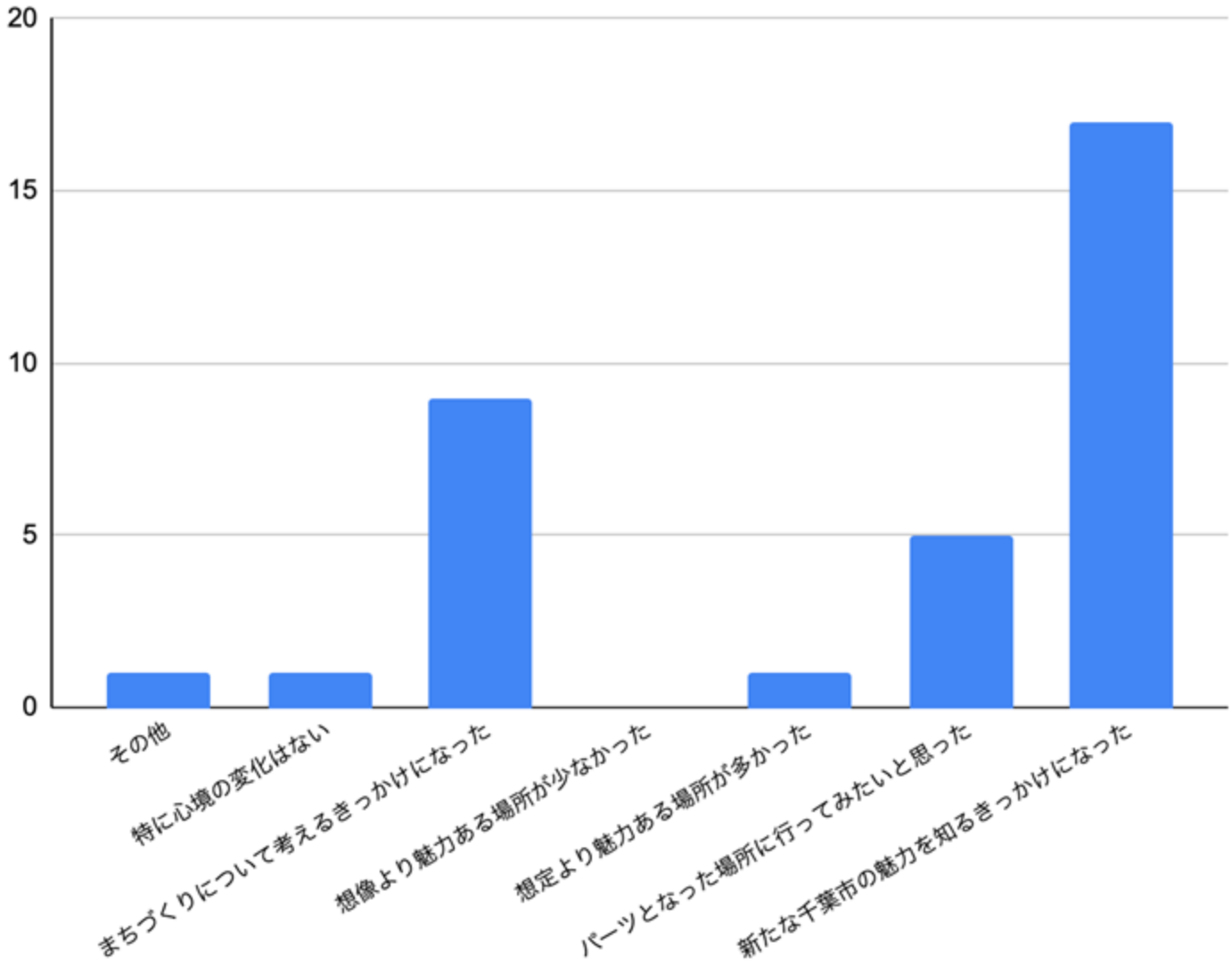
また本ワークショップが開催されたらどうしますか？※複数回答可



イオンモールでのアートイベントの開催についてどう感じましたか※複数回答可



本ワークショップに参加して千葉市への気持ちの変化はありましたか



◎設問

本会場以外で本ワークショップを開催してほしい場所がありますか？。※文章は原文のママ

- ・生涯学習センター(中央図書館)、きぼーる、千葉公園
- ・新浦安のアトレ
- ・アリオ蘇我
- ・佐倉市

感想及びアドバイス※文章は原文のママ

- ・子供(本人)が楽しんで創作できの良かったです。ありがとうございます。
- ・パーツがあったので子どもは作りやすく、そこから自分のイメージを広げると描いてきて良かった。ゼロからだとなんか難しかったので。
- ・イベントでは子ども向けを多く開催してほしい（音楽や身体表現などのジャンルも）
- ・インフォメーションでは、イベントの所要時間(時間枠も)や出入り自由の可否、整理券配布の有無や配布時間、方法等追記してほしいです。
- ・イベントの時間の告知があると有難いです。

実施概要



情報ステーションでの展示

イオンモールで完成した作品を現場にいなかった方々にお披露目すべく、市役所での展示に繋げることが出来た。施工日(2/11)には栗原さんも市役所に出向き、スタッフとともに運搬のために解体した作品を終日かけて再度組み立てなおした。

また会場にはイオンモールの当日の様子タイムラプス映像も挿入した動画を作成しモニターで放映。初見の鑑賞者にも理解を深めていただく工夫を施した。市役所を訪れる来場者の関心度も高いようで、2/11の作業中も何人もの方に質問を受けたり、感想をいただき市民の方とのコミュニケーションにも繋がった。

作品自体を移動して展示することによって別の鑑賞者に作品体験を届けるという試みは、本会期でも検討できるモデルになった。

開催概要

プロジェクト名 : 千葉国際芸術祭 2025プレ企画

栗原良彰「わたしの千葉市! テマパークの模型を作ろう!」みんなの作品発表会!

アーティスト : 栗原良彰(アーティスト)

開催日時 : 前期/2月12日(水)~2月20日(木)【会場A:1階 情報ステーション】

中期/2月21日(金)~2月27日(木)【会場B:踊り場】

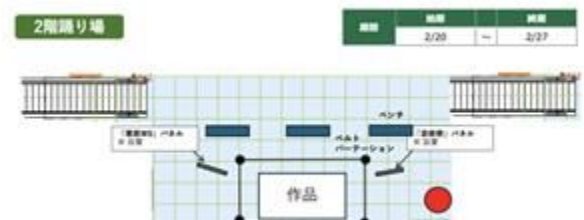
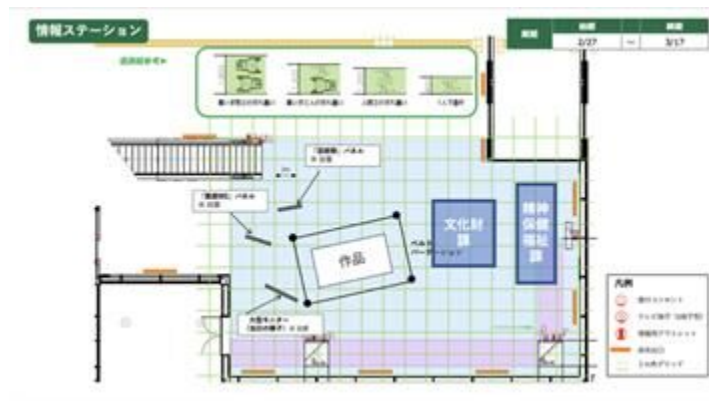
後期/2月28日(金)~3月14日(金)【会場A:1階 情報ステーション】

※土日祝除く8:30~17:30(*2/20と3/14は17:00まで)

会場 : 千葉市役所【A】1階情報ステーション【B】踊り場(1階イベントスペースから2階に上がる階段途中)

入場料 : 無料

会場設置



会場の都合上、期間半ばで2階踊り場に移動することとなった。通常は通路なので展示などを行う場所ではないのだが、市職員の中には1階を経由せず、そのままエレベーターに乗ってしまう人も多いため、市職員向けのアピールとしては功を奏したとも言える。

この展示はプロジェクトの成果発表でもあるが、元より市役所来庁者と職員向けに本芸術祭をアピールする機会ともなった。



市役所 モノレール出口からの導線上、踊り場での展示

2024年10月6日(日)実施 「かえっこバザールinそごう千葉店」(カエルスタッフ説明会を含む) 会場:そごう千葉店

1. 実施概要

千葉の玄関口であるJRと京成千葉駅に隣接するそごう千葉店で開催される千葉大学環境ISO学生委員会による「こどもエコまつり」に合わせて実施した。

「かえっこ」はこどもたちが主体となって地域のさまざまな場所に活動をつくるアートプロジェクト。こども通貨「カエルポイント」を使って、活動とこどもたちをつなぐのがかえっこである。遊ばなくなったおもちゃをカエルポイントに交換したり、そのポイントでおもちゃを持って帰ることもできる。おもちゃを持っていなくてもワークショップやお手伝いに参加することでポイントもらえるなど、こどもたちが自発的にさまざまな活動や体験をする「遊びの場」を作り出す仕組み。

今回はカエルスタッフを募集し、説明会や当日運営することもワークショップのひとつと位置付けている。

本プロジェクトは、来年度の本会期でアーティスト藤 浩志の作品展示に繋がるステップとなる。

◎参加人数:のべ約456人



2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭2025プレ企画「かえっこバザール in そごう千葉店」

ゲスト : 藤 容子(「かえっこ」事務局)・スタッフ 8名

開催日時 : 2024年10月6日(日)12:00~14:30 ※当初実施日の10月5日(土)は雨天の為順延した

会場 : そごう千葉店 地階=センシティガーデン(千葉市中央区新町1000)

参加方法 : 事前申し込み不要*参加無料

対象年齢 : こども~こどもの心を持ったおとな *未就学児は保護者同伴

持ち物 : 遊ばなくなったおもちゃ ※おもちゃを持ってこなくても参加可能

◎かえっこのしくみ

1. 参加者は家から遊ばなくなったおもちゃを会場にもってきます。
 2. 「かえっこバンク」で遊ばなくなったおもちゃを査定してもらい「カエルポイント」に替えます。
 3. たまった「カエルポイント」で会場にあるおもちゃを買います。
- *「かえっこレジ」で「カエルポイント」の分だけおもちゃを買うことができます。
- *「カエルポイント」を増やしたい時やおもちゃを持ってきていない時は、会場由来の出来事や遊びに参加することで「カエルポイント」がもらえます。

◎おもちゃ査定基準

[そこそこのもの]1ポイント [まあまあなもの]2ポイント [なかなかのもの]3ポイント

*他に[凄くいいもの=感動ポイント]も設定。感動ポイントは4ポイント以上付与。

*「カエルスタッフ」として参加するこどもがおもちゃを査定する。

3. 「かえっこ」事務局 藤 容子(ふじ ようこ)の紹介



奈良県橿原市出身。京都市立芸術大学工芸科 染織専攻卒業。福岡県糸島市在住。

アーティスト藤 浩志の妻であり、20年以上前より全国各地で広がる「かえっこ」の管理者として作品やおもちゃの発着やWebサイト(各地の開催の予告など)の管理を行う。また「かえっこ」の実施に際してに要請があれば、全国の会場に赴き、作品展示やかえっこの運営に携わる。

4.「カエルスタッフ」説明会



今回のかえっこについては「カエルスタッフ」を事前に市政だよりや市のホームページで募集し、応募のあったメンバーに説明会を行った。

開催日時：2024年9月21日(土)14:00～16:00

会場：そごう千葉店 本館11階 研修室
(千葉市中央区新町1000)

参加方法：事前申し込み ※無料

対象年齢：小学生とその保護者 定員10名
(スタッフ:こども4名 おとな2名参加)

持ち物：遊ばなくなったおもちゃ

その他：そごう様1名、コマンドA 6名



ミニかえっこを体験



会場を視察



会場で記念撮影

5. 当日の動き

①作品展示

藤 容子氏の指示のもと、滝上ステージに作品とその周りにおもちゃを並べる



②カエルスタッフ準備

バンダナも巻いて最終打ち合わせ



③〔当日〕会場に広げられた交換対象のおもちゃを整える藤氏



④続々と使わなくなったおもちゃを持って集まる参加者にとこやかに対応するカエルスタッフ



⑤かえっこの周りでは千葉大生による「こどもエコまつり」のワークショップが実施され、体験した人にはカエルポイント引換券が渡された



⑥ 交換するおもちゃを探すこどもたち



⑦ 芸術祭スタッフによる手作り看板



6. その他取り組み(おもちゃ交換以外のポイント取得方法の設定やオークションなど)

◎ こどもエコまつり(千葉大学環境ISO学生委員会)との連携

・エコまつりの中の「SDGsボウリング」「牛乳パックのぶんぶんゴマ作り」「トイレットペーパーの芯でペン立て作り」「魚釣りゲーム」などのワークショップを体験するとカエルポイント1ポイントと交換できる引換券を渡して頂いた。



カエルポイント引換券



◎ かえっこ会場での取り組み

- ・アンケートに答えると、カエルポイント1ポイントと交換。
- ・飛び入りでカエルスタッフをした人には1時間程度で7ポイント(カード1列分)付与。

◎ オークションの実施

14時頃よりかえっこ会場内で藤 容子氏の司会でオークションを実施。人気のあるおもちゃを、欲しい人が挙手をして自分が出せる分のポイントを声を出して発言(ビットする)し、最も多いポイントを伝えた人が欲しいおもちゃと交換するという、大人の世界のオークションと基本的ルールは同じ方式。



かえっこオークションの様子



◎ カエルスタッフ反省会

- ・かえっこバザール終了後、カエルスタッフが集合し、その日の活動を振り返る反省会を行った。こどももおとも感想を述べ合うことで次回に活かせることやスタッフとしての役割をお互いに認め合う大切な時間となった。

〈スタッフの感想〉

- ・自分で決める(値付けなど)のが難しかったけど、そこが面白かった。
- ・普段教員をしているが、規則が決められていないゆるいルールが新鮮で楽しかった。



7. 評価／所感

・前日の5日(土)が雨となり、翌日6日(日)に順延されて開催したためカエルスタッフも欠席者が複数おり心配されたが、6日になったからこそ説明会には出席していないが参加できるようになった人や、会場で飛び込みでスタッフをやってみたいと申し出る子どもなどがおり、当日途中からは予定していたスタッフの人数以上がかえっこを運営することになった。

・そごう様のこの場所では初めての開催ではあったが、百貨店へ来る人、駅へ向かう人など人通りの多い恵まれた場所であるため、子どもたちを中心としたこの賑わいに誰もが一度は足を止めて微笑ましく眺めている姿が印象的であった。会場の雰囲気合った音楽がBGMとしてかかっていたのも効果的で合ったと思われる。

・初めての開催にも関わらず、おもちゃを持ってくる人が数多く見受けられた。これは市政だよりやチラシ配布、ホームページなど事前告知の効果と思われる。

・かえっこのルールはシンプルなので誰にでもわかりやすく、例えおもちゃを持っていなくても周りの「こどもエコまつり」でワークショップに参加することでカエルポイントを得られるので多くのこどもが参加できた。

・カエルスタッフの成長は目を見張るものがあった。説明会に参加していない人でも、スタッフから簡単な説明をした後、持ち場に入ると説明会に参加した子どもや大人が積極的に教えてどんどんと仕事を吸収し、短時間ですっかりベテラン店員となり、張り切って立ち働く姿は頼もしくもあり、かえっこの本質であると感じた。

・「次はいつこの場所でやりますか？」と何人もの人に聞かれた。この来場者の声は、次も必ず参加したいという意志であり、既にこの場で人々の意識変容・行動変容が起きているということである。

8. 課題

・かえっこは同じ場所で継続して行い、大人もこどももコミュニティが醸成されていくことが目的のひとつである。今回初めての開催であったそごう千葉店でのスペースで今後も継続開催するためには、そごう様との連携やご協力が不可欠であり、次年度も連携・ご協力賜れると幸いです。

・かえっこ自体は大盛況であったが、これが来年度の「千葉国際芸術祭2025」と関連していることや芸術祭そのものの告知についてはロゴなど発表前だったため、やや弱かったという反省点がある。10月21日(月)の記者会見が済んだ後は正式にロゴと共にプレゼンテーションできるので、今後は芸術祭自体の認知率向上にも努めたい。

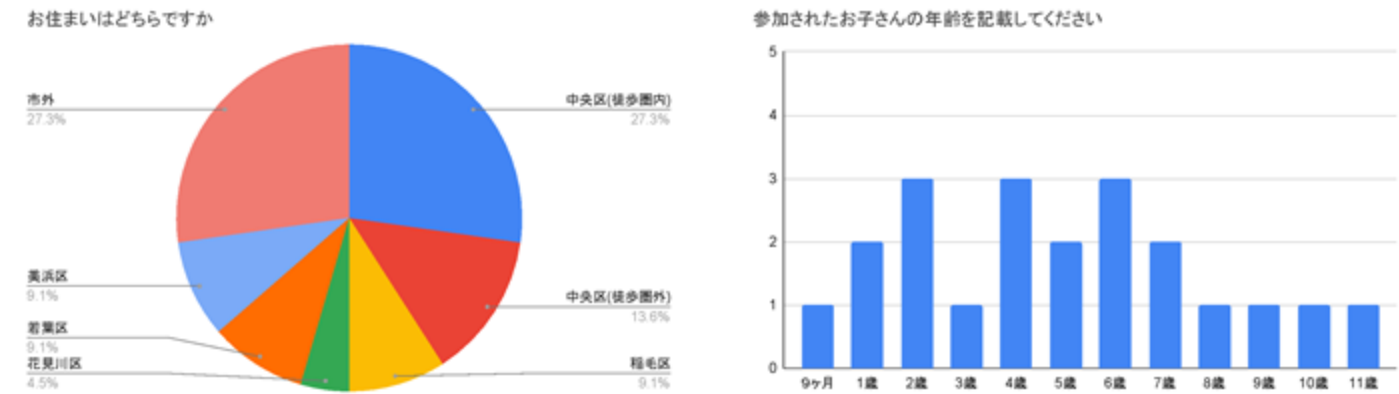


9. 記録写真

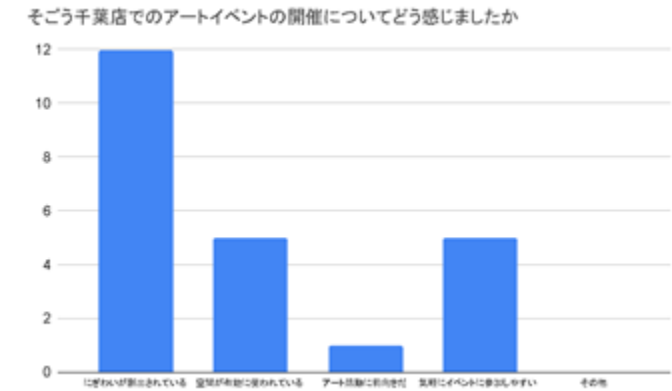
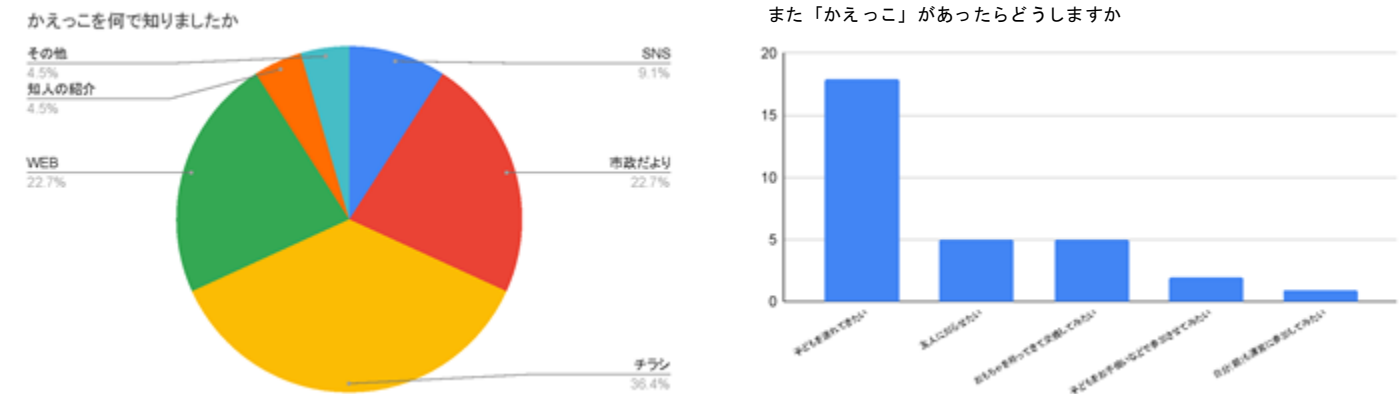


※撮影：ゆかい（ただ）

10. アンケート結果＊取得数22



市外の場合は、お住まいはどちらですか？
松戸市：1人、習志野市：2人、我孫子市：1人、佐倉市：2人



◎設問
かえっこについて感想を教えてください※文章は原文のママ

- ・楽しそう
- ・交換するの楽しみにしている様子でした
- ・子どもが喜んでいて良かった
- ・前に参加して楽しかった
- ・幼児が楽しめるものがもう少しあると嬉しい
- ・かえっこバンクに時間がかかりすぎるので改善してほしい
- ・服はサイズ別に分かりやすく置いてほしい
- ・だれかに使ってほしい
- ・すてるにはもったいない使わなくなったおもちゃを再利用してもらえるよい機会だと思います。
- ・リサイクルが素晴らしい
- ・自分のおもちゃを持って帰ってもらえて嬉しい
- ・犬オブジェが良いと思った

●設問

他に、かえっこを開催してほしい場所がありましたら、ご記載ください

- ・近所であるといい——（稲毛区の参加者）
- ・マリンピアでやってほしい
- ・真砂コミュニティーセンター
- ・回数増やしてほしい
- ・公園など
- ・もっと増やして
- ・回数増やして、色んなところで

2024年11月9日(土)実施

「かえっこバザール in 花見川団地 02」 会場:団地テーブル(花見川団地)

1. 実施概要

千葉国際芸術祭2025のプレ企画として開催された「かえっこバザールin花見川団地」の2回目。団地の商店街の中で場所を変えての実施となる。今回は、かえっこを柿落としとして商店街の中に新しくオープンした「団地テーブル」を会場とした。本会場は「シェアハウス以上シェア団地構想 第1弾」として、株式会社絆人が運営するスペース。日替わり食堂に自分のお店が出店できるシステムもあり、「ご近所以上、家族未満」のコミュニティを愉しむ暮らしをモットーとする複合交流拠点である。開催に当たって、アーティストの藤 浩志氏も秋田から駆けつけ、かえっこの見せ場でもあるオークションも実施した。



「団地テーブル」での実施の様子

◎参加人数:のべ約159人

2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭2025プレ企画「かえっこバザール in 花見川団地」
 アーティスト : 藤 浩志
 開催日時 : 2024年11月9日(土)10:00~14:00
 会場 : 花見川団地商店街「団地テーブル」(千葉市花見川区花見川2-42-105)
 参加方法 : 事前申し込み不要 *参加無料
 対象年齢 : こども~こどもの心を持ったおとな *未就学児は保護者同伴
 持ち物 : 遊ばなくなったおもちゃ ※おもちゃを持ってこなくても参加可能
 同時開催 : 100円商店街

◎かえっこのしくみ

- 参加者は家から遊ばなくなったおもちゃを会場にもってきます。
 - 「かえっこバンク」で遊ばなくなったおもちゃを査定してもらい「カエルポイント」に替えます。
 - たまった「カエルポイント」で会場にあるおもちゃを買います。
- *「かえっこレジ」で「カエルポイント」の分だけおもちゃを買うことができます。
 *「カエルポイント」を増やしたい時やおもちゃを持ってきていない時は、会場由来の出来事や遊びに参加することで「カエルポイント」がもらえます。

◎おもちゃ査定基準

[そこそこのもの]1ポイント [まあまあのもの]2ポイント [なかなかのもの]3ポイント
 *他に[凄いいいもの=感動ポイント]も設定。感動ポイントは4ポイント以上付与。
 *通常は「カエルスタッフ」として参加することもがおもちゃを査定する。今回は大人が対応したが、途中から前回そごう千葉店でのかえっこでスタッフをした子ども2名が飛入り参加。

3. アーティスト紹介 藤 浩志(ふじ ひろし)



1960年鹿児島生まれ。奄美大島出身の両親の影響で大島紬周辺で遊ぶ。京都市立芸術大学在学中に演劇に没頭した後、地域をフィールドとした表現を模索。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と文化人類学に出会う。バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用した美術表現を志向し、全国各地でプロジェクトを試みる。取り壊された家の柱素材の「101匹のヤセ犬の散歩」。一ヶ月分の給料からの「お米のカエル物語」。家庭廃材を利用した「Vinyl Plastics Connection」「Kaekko」「Polyplanet Company」「Jurassic Plastic」。架空のキーパーソンをつくる「藤島八十郎」等。NPO法人プラスアーツ副理事長。十和田市現代美術館館長を経て秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科・アーツ&ルーツ専攻教授。NPO法人アーツセンターあきた理事長。

4. 事前準備

◎チラシ配り

2024年10月6日に実施したそごう千葉店という立地とは異なり、団地内の住民が徒歩もしくは自転車で来ることを想定していた。団地内の小学校や公共施設は市のルートで配架したが、かえっこのメインターゲットは未就学児となるので、団地内の幼稚園、保育所を芸術祭スタッフが人海戦術で回って、チラシを預かっていただいた。花見川団地商店街振興組合様も100円商店街のチラシとかえっこのチラシも一緒に近隣に配架していただくという有難いご協力を得ることができた。心から感謝したい。



チラシ



◎会場音楽

前回そごう千葉店での実施感想を踏まえて、カセットラジオを会場に持って行き、会場の雰囲気には調和する音楽をBGMとして使用し、参加者がよりリラックスしながらイベントを楽しめる空間を演出した。

◎会場設置

動線の設計:参加者がスムーズに移動できるよう、会場空間に合わせて動線を設計した。団地のテーブル空間を活かし、食堂のテーブルとリビングルームのソファでおもちゃとぬいぐるみを見やすく陳列して、くつろいだ雰囲気を演出した。また、店内にチェック担当のスタッフを配置し、常におもちゃの補充と整理を行い、参加者の体験を支えた。

レジとバンクの設置:会場入口の両側にレジとバンクを配置し、おもちゃの預かりと交換を効率よく行えるようにした。これにより、参加者は持参したおもちゃをポイントに交換し、会場内で新しいおもちゃを選び、レジでスムーズにポイント交換ができる仕組みを整えた。



会場プラン(イメージ)



看板の設置:芸術祭と本プロジェクトの看板をバンクの隣に設置し、来年の芸術祭との関連性を示し、プロモーションの場を作った。これにより、プロジェクトの意図や長期的な目標が来場者に伝わりやすく、プロジェクトの価値を強調できた。

5. 団地内の協力連携と展示

◎「100円商店街」との連携

・当日商店街では花見川団地商店街振興組合が「100円商店街」を開催していた。加盟店で買い物されたお客様はスタンプラリーに押印され、条件を満たすとビンゴカードと商品券を獲得できるということだった。その100円商店街と連携し、協力していただける店舗で買い物をしたお客様に「カエルポイント引換券」を渡していただくこととした。こちらからもおもちゃを持ってこなくても参加できる方法として案内した。

◎ かえっこ会場での取り組み

- ・アンケートに答えると、カエルポイント1ポイントと交換。
- ・飛入りでカエルスタッフをした人には1時間程度で7ポイント(カード1列分)付与。



花見川団地のカエルポイント引換券

◎ オークションの実施

・13:30頃より会場内でアーティスト藤 浩志氏ご本人の司会でオークションを実施。人気のあるおもちゃを、欲しい人が挙手をして自分が出せる分のポイントを声を出して発言(ビットする)し、最も多いポイントを伝えた人が欲しいおもちゃと交換するという、大人の世界のオークションと基本的ルールは同じ。



◎ 作品展示

・この「かえっこ」がアートプロジェクトであることを来場者に理解していただくことや、来年度開催される千葉国際芸術祭2025の告知を目的として、会場内に藤さんのかえっこに由来する作品を展示した。

会場前のベンチ付近に「Anger Dog」を3体展示することで、自然と賑わいが生まれ、団地の住民の方々が作品に触れあう光景が印象的だった。



Anger Dog



Happy Ring

6. 当日の動き

① 作品展示

藤浩志氏の作品を会場となる「団地テーブル」店内や商店街通路に展示した。



② スタッフ準備とおもちゃ並べ

朝スタッフがおもちゃを会場内に並べたが、藤さんが到着後並べ直すと、場の雰囲気が一変し、楽しくて賑やかな空間へと変貌した。

左：交換対象のおもちゃを整理する藤浩志氏



③ 子どもたちが遊ばなくなったおもちゃを持ってくると、カエルスタッフが査定してスタンプを付与した。



④ 交換するおもちゃを探すこどもたち



⑤ 車のおもちゃを並べながら、子どもたちと会話する藤 浩志氏。



⑥ おもちゃの値付け
子どもたちが持ってきたおもちゃを査定して、ポイントシールを貼り付ける。



⑦ ポイントでおもちゃを交換
好きなおもちゃを見つけたら、レジでポイントを消して、新たなおもちゃを入手する。
前回そごう千葉店でも飛び入りで参加した子どもスタッフが手伝いに来てくれた。前回はとても楽しかったとのことで、兄弟を連れて来場。レジ係としてしっかり役目を果たしてくれた。



⑧ 遊び場の形成
交換したおもちゃですぐ遊び始めた子どもたち。



7. 令和5年度実施時(2024年3月9日)との違いと試み

◎ 公共スペースでの作品展示

- ・「かえっこ」に参加しなくても、公共スペースでアートを楽しめる場を提供することで、地域住民が気軽にアートに触れる機会が増えた。商店街通路の公共ベンチ付近の作品展示により、普段見過ごされがちな場所が特別な意味を持ち、住民がアートを身近に感じられるようになった。
- ・「かえっこ」に参加した子どもたちは、作品の近くで遊び始め、親子や子ども同士の交流が自然に促進されていた。
- ・公共スペースでの作品展示を通じて、世代を超えた共通の話題が生まれ、年齢を問わず多くの住民が同じ空間でアートを楽しみ、共感し合う場が生まれている。これにより、地域全体が共通の関心を持ち、アートを通じて多世代が交流する機会が増え、コミュニティのつながりが深められた。



◎ ジャンケンでオークションを落札する

今回は高額になり過ぎるのを防ぐためにも最後はジャンケンを試した回もあった。ジャンケンは一瞬的な決断が求められるため、オークションの進行にスピード感と緊張感も与えた。



オークションのおもちゃ



オークションの様子

8. 評価／所感

- ・会場の雰囲気に合わせて作品展示やおもちゃの配置方法を調整することは重要である。今回は、作品展示があったので、通行の妨げにならないベンチ付近に設置。誰もがみられる商店街内通路に日常の風景に新鮮な風を吹き込むことで、より多くの人々に魅力を感じていただけた。
- ・近隣の「お休み処えがお」でイベントを運営していた20代の男性は自分が5歳頃にかえっこに参加したことを覚えており、その時の思い出を藤さんと語り合っていた。長年続けているからこそその「再会」に周りのスタッフも温かい気持ちになった。今日の実施を記憶に留めて成長していく子どもたちが沢山生まれることを祈念する。
- ・バンクを担当しておもちゃを査定する仕事は、どれくらいのポイントを与えるかの判断が大人でも難しい。それを子どもたちが自由な価値観で値付け(判断)していく姿がかえっこの醍醐味のひとつであると再認識した。
- ・会場となる花見川団地ではさまざまなイベントが同時に開催されており、コミュニティの活性化や住民の熱意を感じることができた。一部の参加者はかえっこのスタンプを集めて、次回のかえっこオークションに参加しようと考えているとの声も聞かれた。

9. 課題

- ・本イベントと千葉国際芸術祭との関連性の説明が、まだ十分ではないと考えている。一部の参加者は、今後の展望について関心を示していたが、多くの参加者は芸術祭自体を認識していないという印象があった。かえっこバザールだけではなく、今後の他のイベントでも、本芸術祭との関係性をより明確に示し、プロモーションを地道に行うことが重要である。
- ・かえっこは主に子ども向けのプロジェクトだが、会場ごとに異なる地域住民の特性をより考慮することが重要だと思う。今回のように団地内で開催する場合、多くのお年寄りが興味を持ち、参加したい気持ちを抱いているが、参加方法がわからなく、参加しにくいと感じたり、自分は年を取っているからと遠慮したりすることがあった。そのような方々に向けての丁寧な説明と、おもちゃを持っていなくても参加できる仕組みづくりは、かえっこ開催ごとに独自に計画する必要がある。

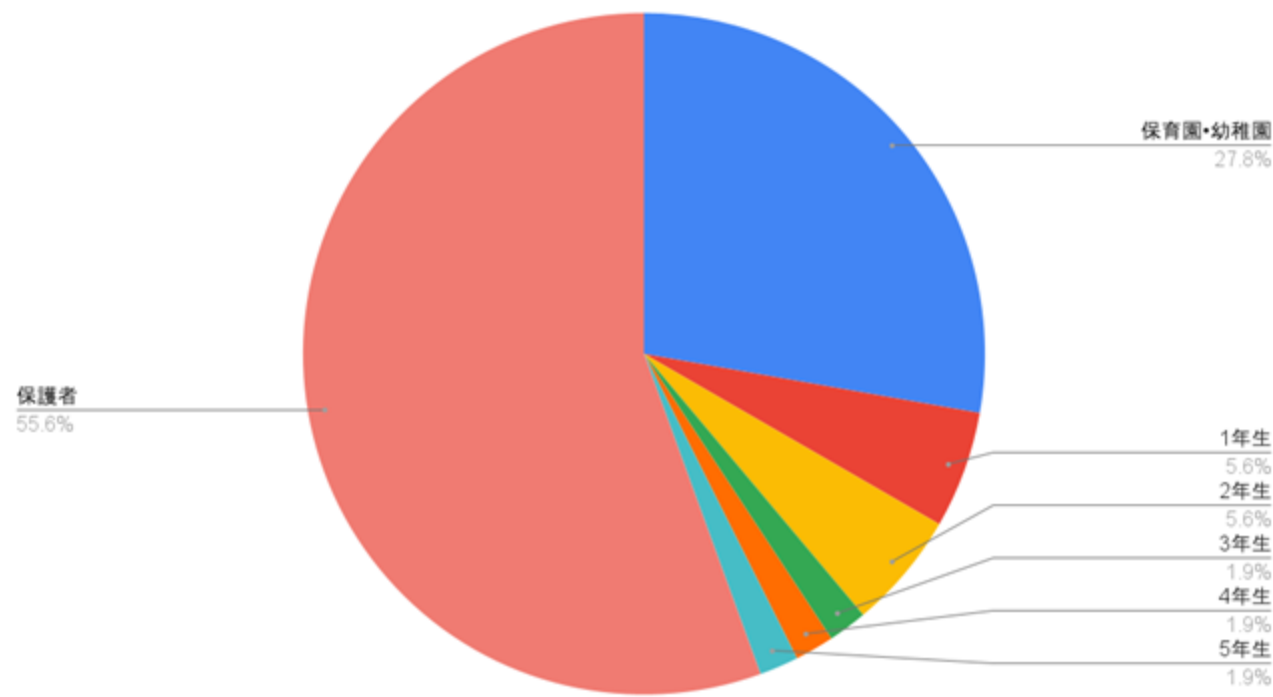
10. 記録写真





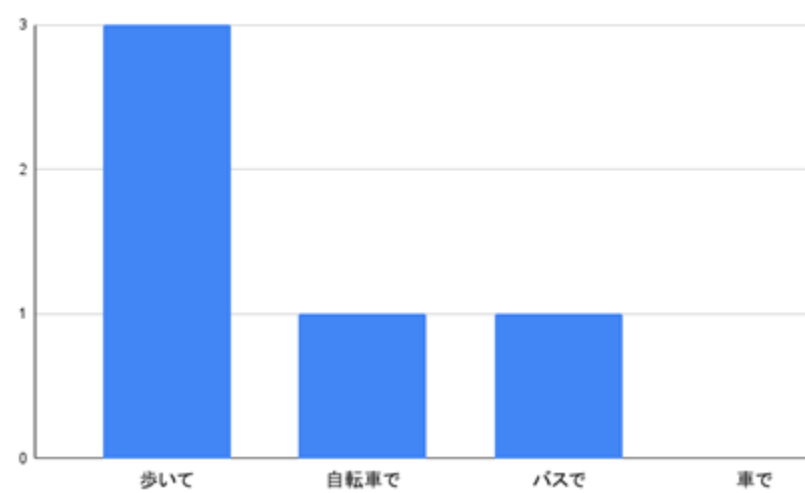
11. アンケート結果 *取得数34 (子ども:4/大人:30)

参加者構成

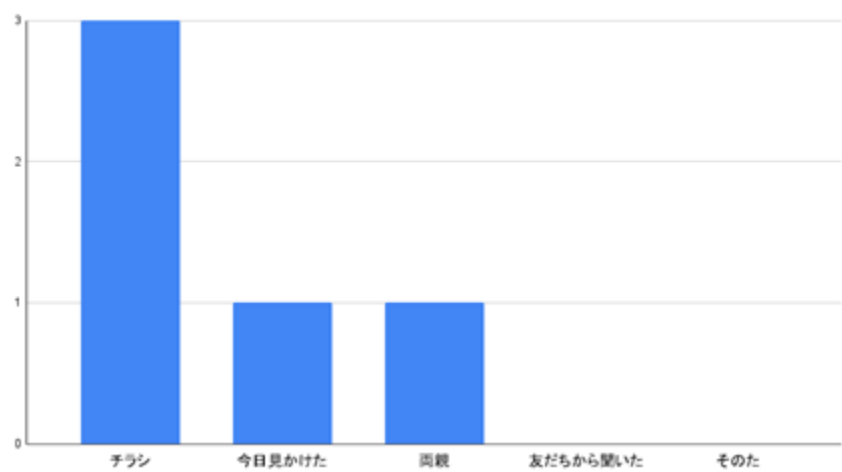


◎子ども向けのアンケート結果 *回答者:4

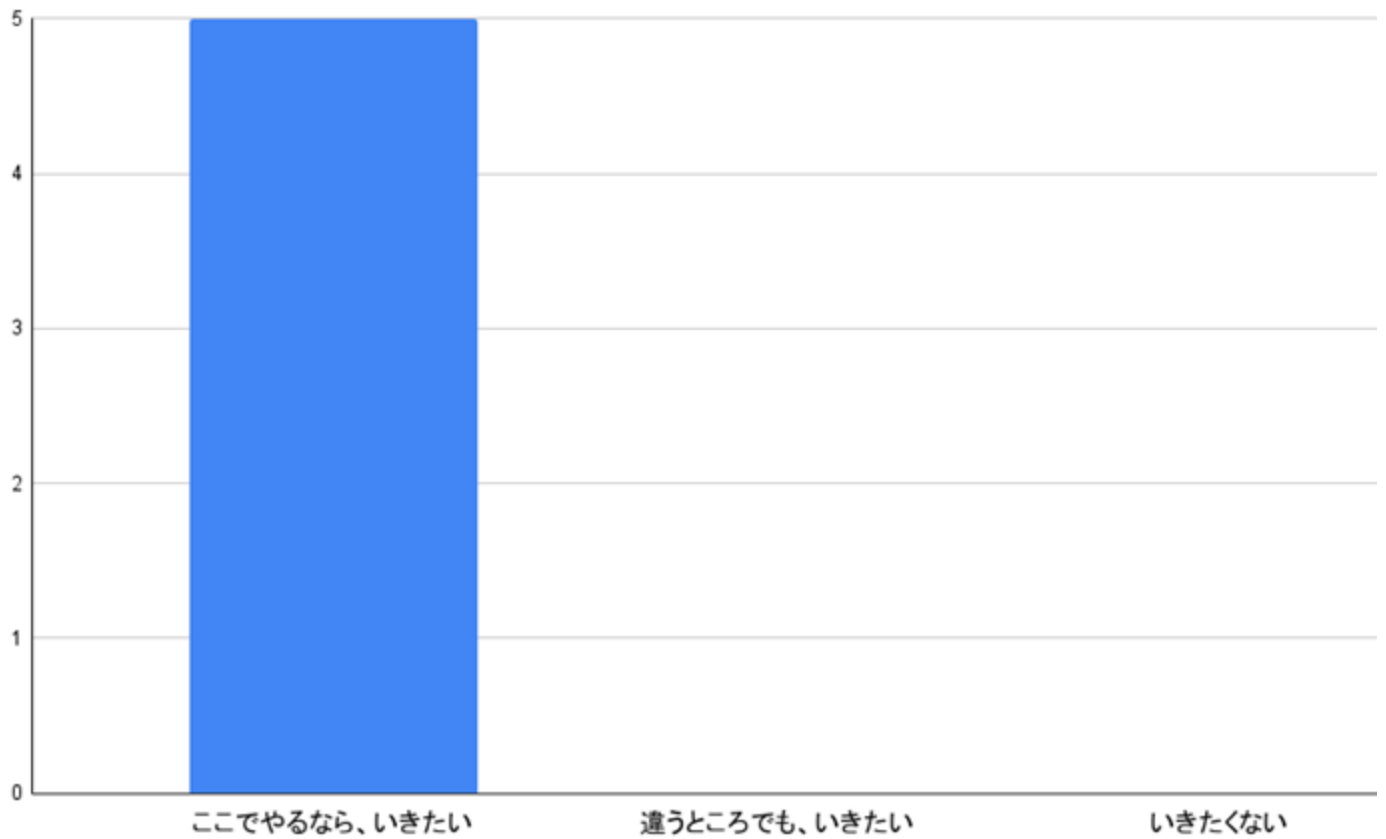
どうやって来ましたか？



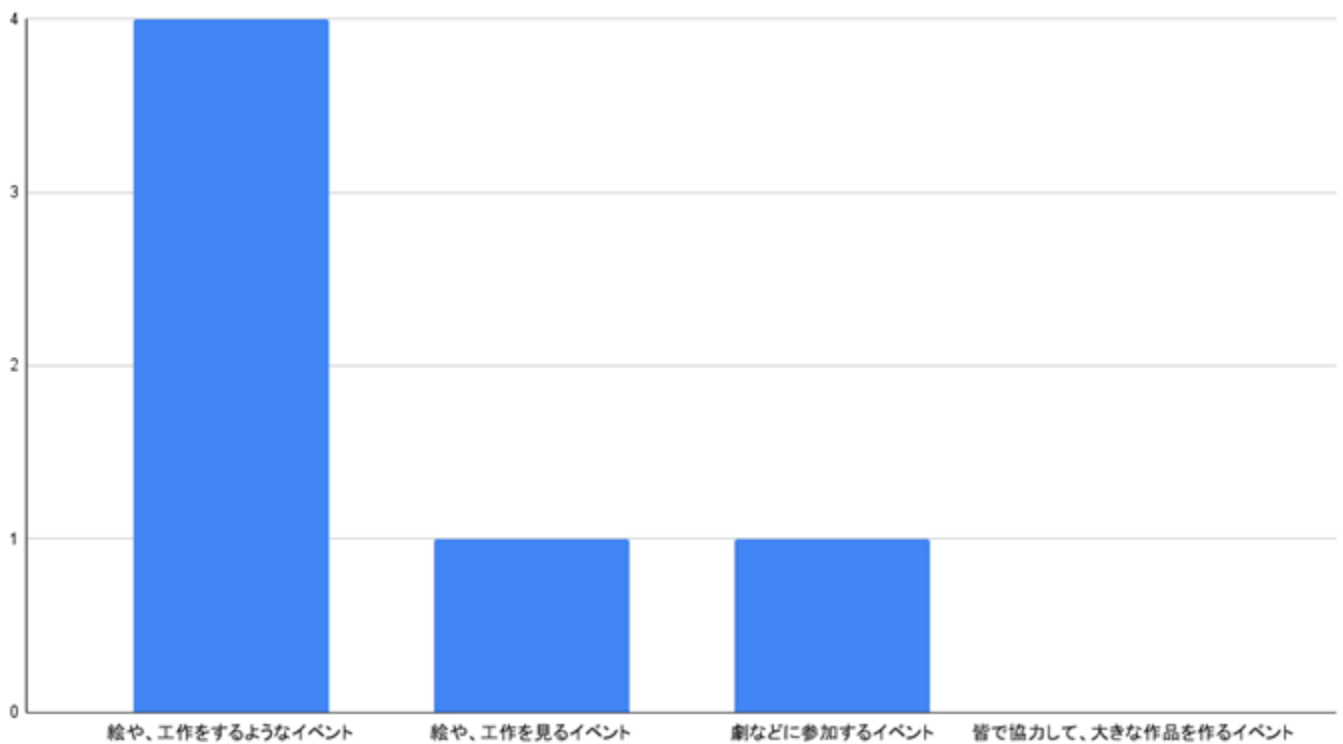
どこで(誰から)今日の「かえっこ」を知りましたか？



また「かえっこ」があったら、いきたいですか？



どのようなイベントに参加してみたいですか？

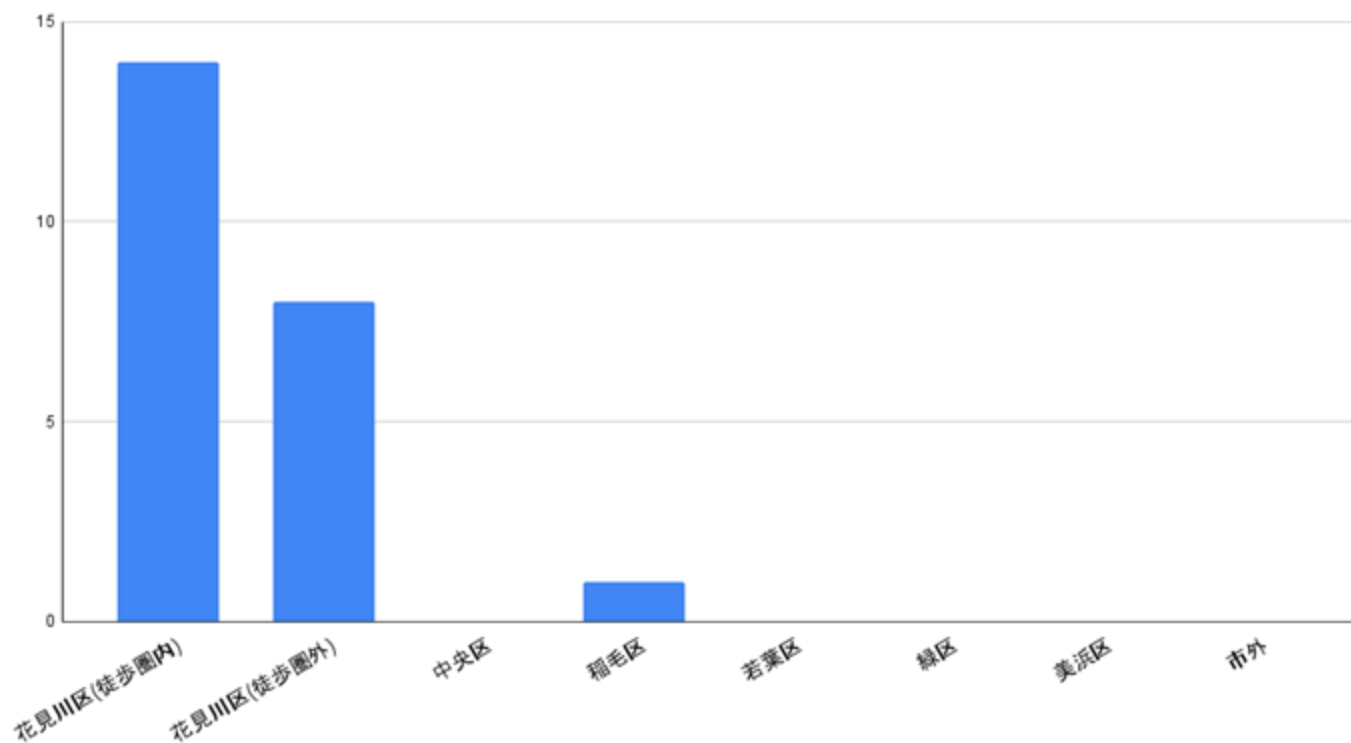


「かえっこ」に参加してどうでしたか？※文章は原文のママ

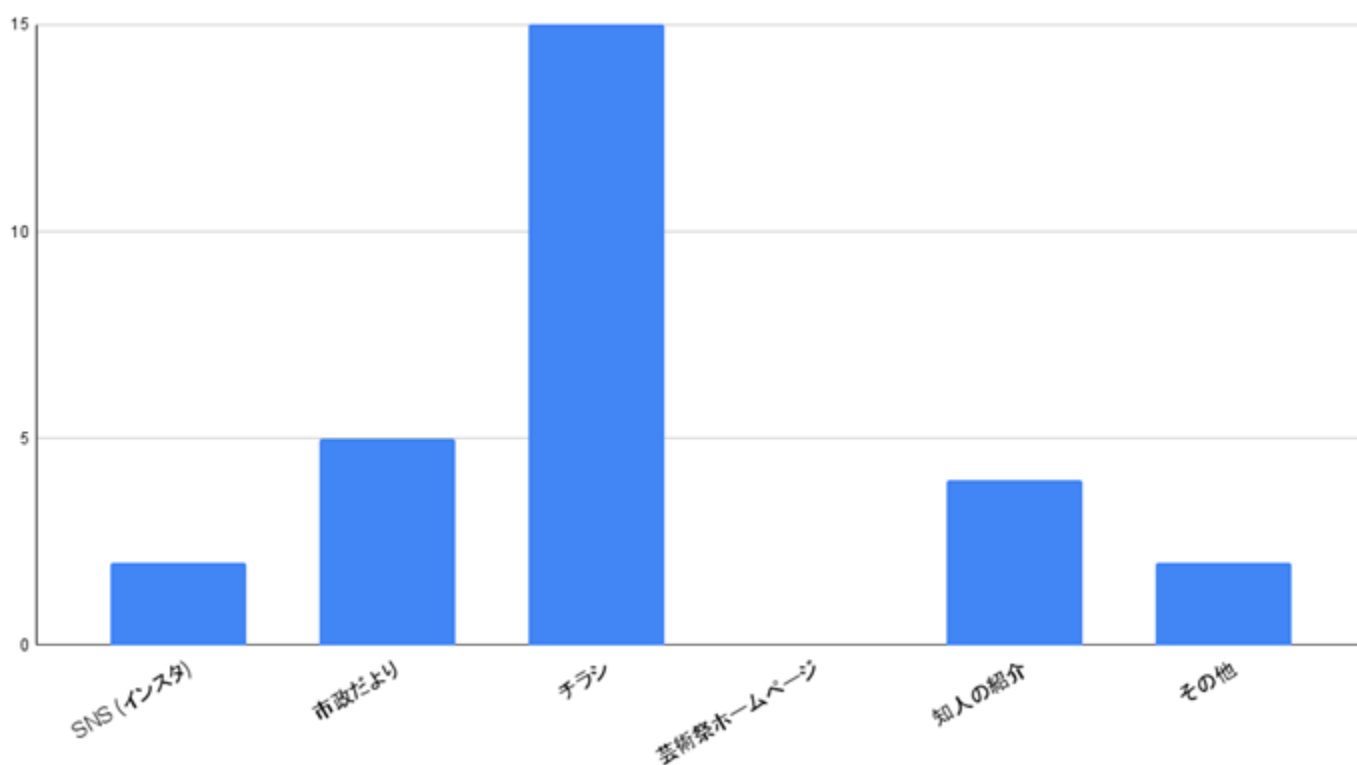
- ・楽しかった(同じ回答3つ省略)
- ・お手伝いでポイントがもらえるのはうれしい

◎大人向けのアンケート結果 *回答者:30

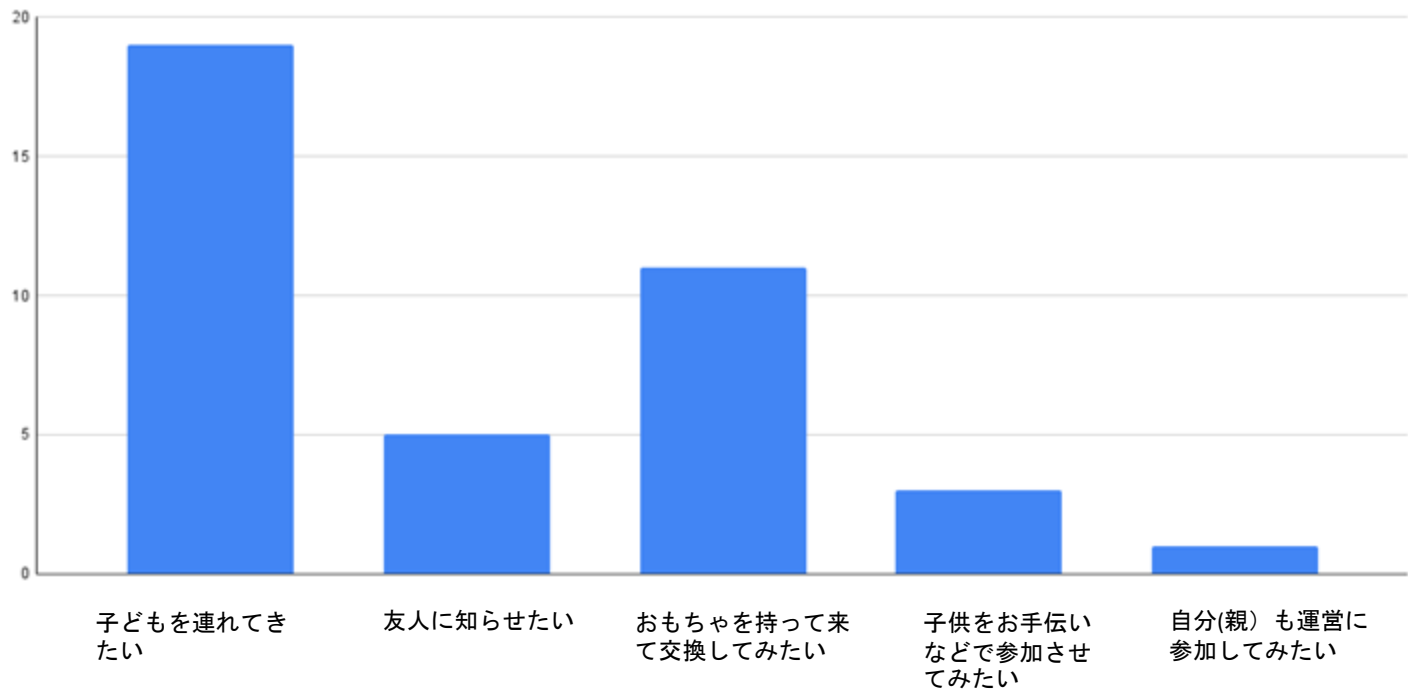
お住いはどちらですか？



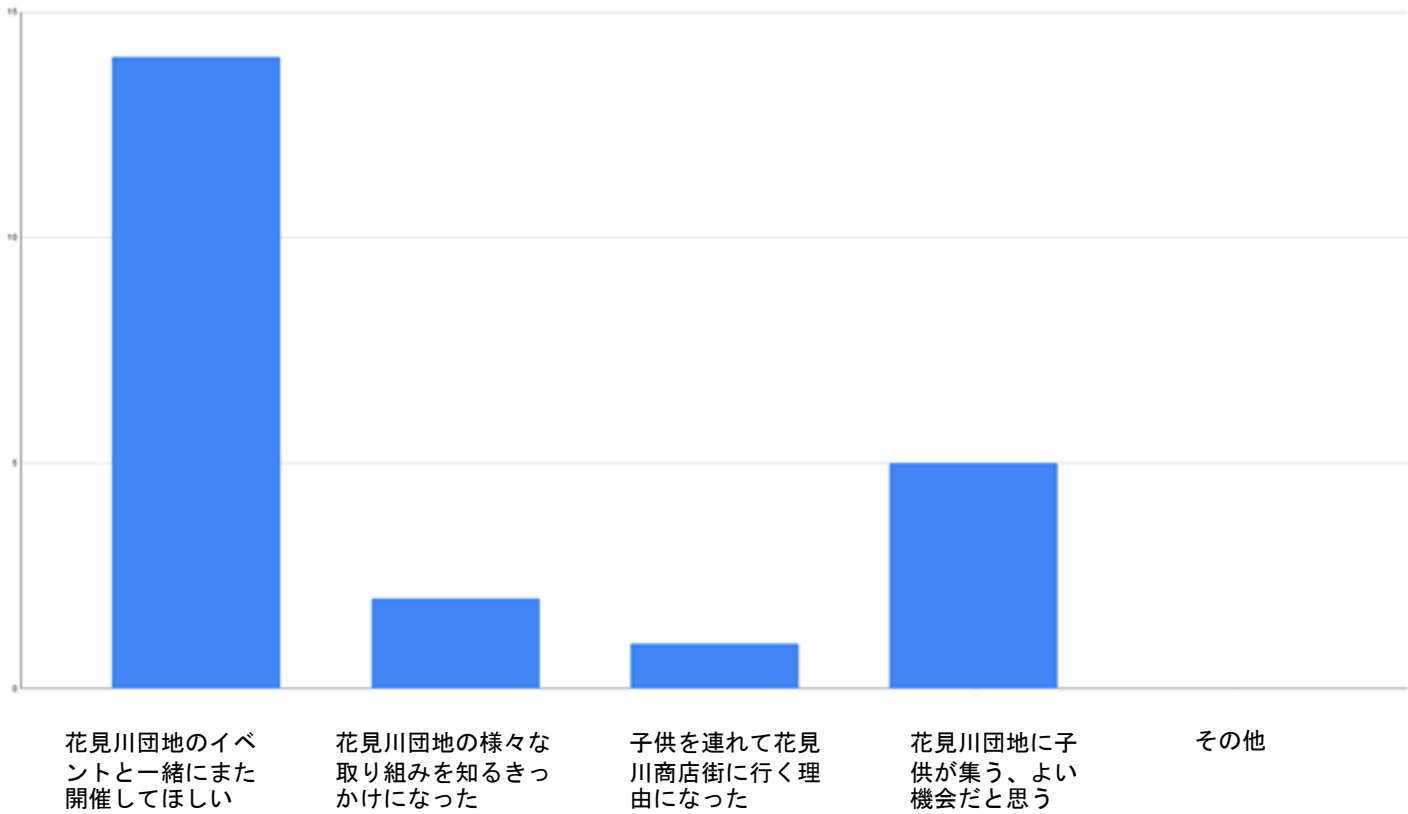
「かえっこ」を何で知りましたか？



また「かえっこ」があったらどうしますか？【複数回答可】



花見川団地でのかえっこの開催についてどう感じましたか？【複数回答可】



◎設問

「かえっこ」について感想を教えてください？※文章は原文のママ

- ・子どもが楽しそうでした。
- ・不要なもの新しいものが交換できてありがたい！でも小学生が欲しがるおもちゃはほぼなかった。
- ・いろんなおもちゃを見れたりできて、子供もたのしそうです。
- ・色々選べて楽しそう。
- ・リアルな感じ(売るにしても送料かかる)
- ・楽しそう。選ぶ楽しさ。(遊べなくなったおもちゃ)
- ・前回子どもが楽しんで参加していたので、今回もやってくれてうれしい。
- ・もったいないと思っていたおもちゃを交換できて、その上楽しめてよかったです！
- ・“捨てる”ではなく“かえっこ”するという選択があることを子どもが体験できるのはあるがたい。
- ・おもちゃが幼児向けのものがほとんどなので、小学一年生にはちょっともの足りなかったようです。
- ・50代の知人が20代の子どもが幼い時にかえっこに参加した楽しい思い出を話していました。未だにポイントを大事にとっておいているとのこと。自然な形でSDGsの考えが子どもに教えられてステキな取り組みだと思います。
- ・楽しそう。お子さんに好きなおもちゃがあれば。
- ・見たことないおもちゃ多い。楽しそう。

◎設問

花見川団地以外で、かえっこを開催してほしい場所がありましたら、ご記載ください。

※文章は原文のママ

- ・とくになし(近くが良いので)
- ・花見川団地のほか、ユアエルム
- ・花見川区内の他のイベントとも連携して実施してほしい。
- ・幕張cc
- ・継続的にあれば参加したい
- ・団地が良い(近所なので)

市内外の人に伝えたい、観光名所以外の千葉市の魅力的な場所や、良い取り組みがありましたらご記載ください。

※文章は原文のママ

- ・花しま公園
- ・きぼーとか
- ・モノレール(懸垂式)
- ・子どもが増える街になると良い。
- ・海岸

2024年10月21日(月)実施 「千葉国際芸術祭2025」記者発表会

会場:千葉市役所1F 市民ヴォイド

1. 実施概要



千葉国際芸術祭実行委員会委員長の神谷俊一(千葉市長)および総合ディレクターの中村政人が登壇し、「千葉国際芸術祭2025」の開催概要、ロゴ、VI、プレ会期の主要プログラムについて、メディア記者に向けて詳細に説明を行った。

「市民参加型の芸術祭」という新しいスタイルでトリエンナーレ形式を採用した「千葉国際芸術祭」は、この記者会見を通じて社会に向けた発信を始め、地域との良好な関係構築の第一歩を踏み出した。

また、同日にオープンした公式サイトでは、詳細情報を公開し、Instagram、X(旧Twitter)、Facebookなど各種SNSを活用した情報発信も開始。記者会見を契機に、千葉国際芸術祭の創造性を強調する広報体制の構築に注力することが可能となった。

2. 開催概要

- プロジェクト名 : 「千葉国際芸術祭2025」記者発表会
 登壇者 : 神谷俊一(千葉市長／千葉国際芸術祭実行委員会委員長)
 中村政人(千葉国際芸術祭総合ディレクター)
 司 会 : 西山芽衣
 (千葉国際芸術祭プロデューサー兼コミュニケーションディレクター)
 開催日時 : 2024年10月21日(月)9:30-10:30
 会 場 : 千葉市役所1F 市民ヴォイド
 千葉市中央区千葉港1-1
 参加者 : メディア関係者、芸術祭関係者 ※事前申し込み制・招待形式
 参加方法 : リアル会場での実施／YouTube限定配信



記者会見会場の様子

3. 発表内容と流れ

- 1.開会
- 2.実行委員長ご挨拶
- 3.芸術祭コンセプトおよび特徴のご紹介
- 4.ロゴマークの発表およびご説明
- 5.事業スケジュールのご紹介
- 6.公募型プロジェクトのご紹介
7. ティザーサイト・SNS開設のご案内
- 8.事業推進体制のご説明
- 9.今後の予定についてのご案内
- 10.質疑応答
- 11.写真撮影(実行委員長・総合ディレクター／集合写真)
- 12.閉会



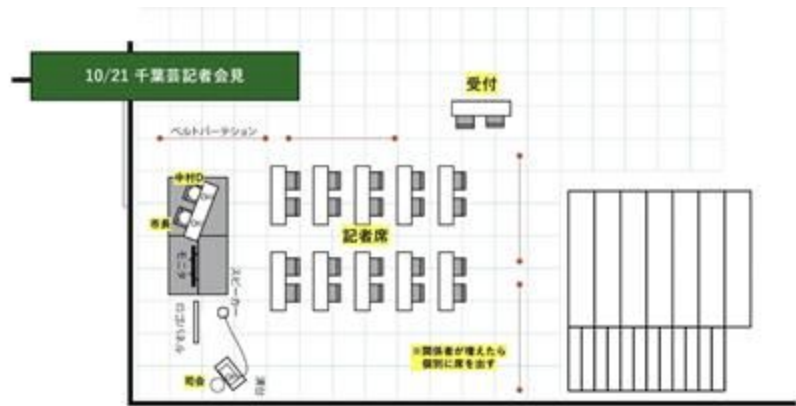
参会者への配布資料



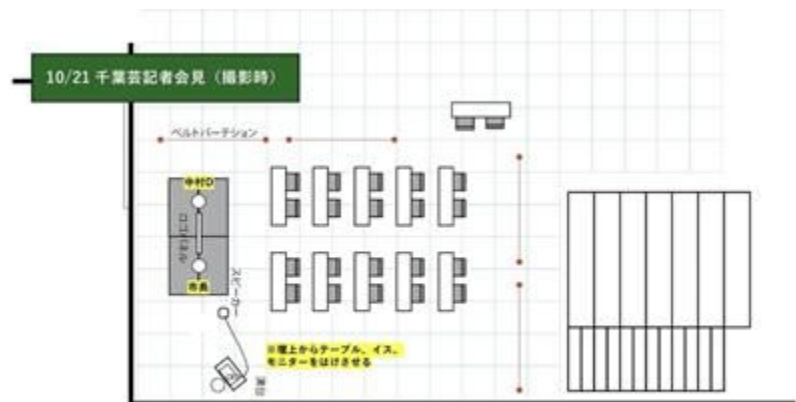
手作りのロゴグッズ

4. 会場配置図

・プレゼンテーションの際の机と椅子の配置



・写真撮影(千葉市長・総合ディレクター/集合写真)を行った際のステージの配置



5. 当日の動き

8:00～

- ・事前打合せ
- ・会場準備、配信準備



9:20～

- ・受付誘導開始
- ・メディア各社入場



9:30～
・実行委員会委員長、市長挨拶



9:35～
・総合ディレクター挨拶



9:40～
・コンセプト説明



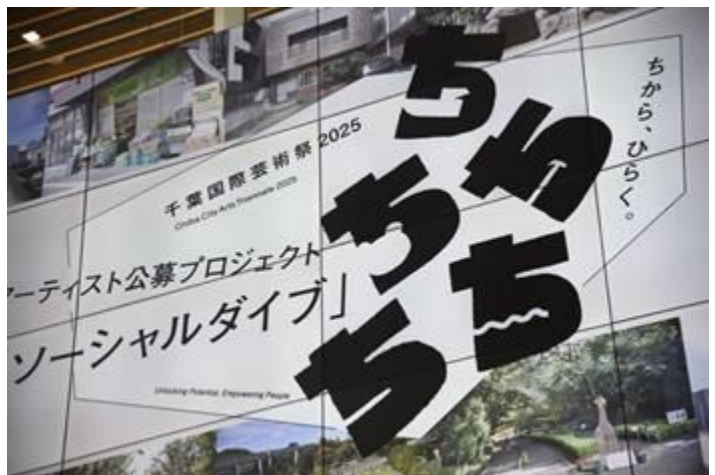
9:42～
・ロゴマーク除幕及び発表



9:50～
・事業体制について説明



10:00～
・公募型プロジェクトについて説明



10:10～
・質問応答



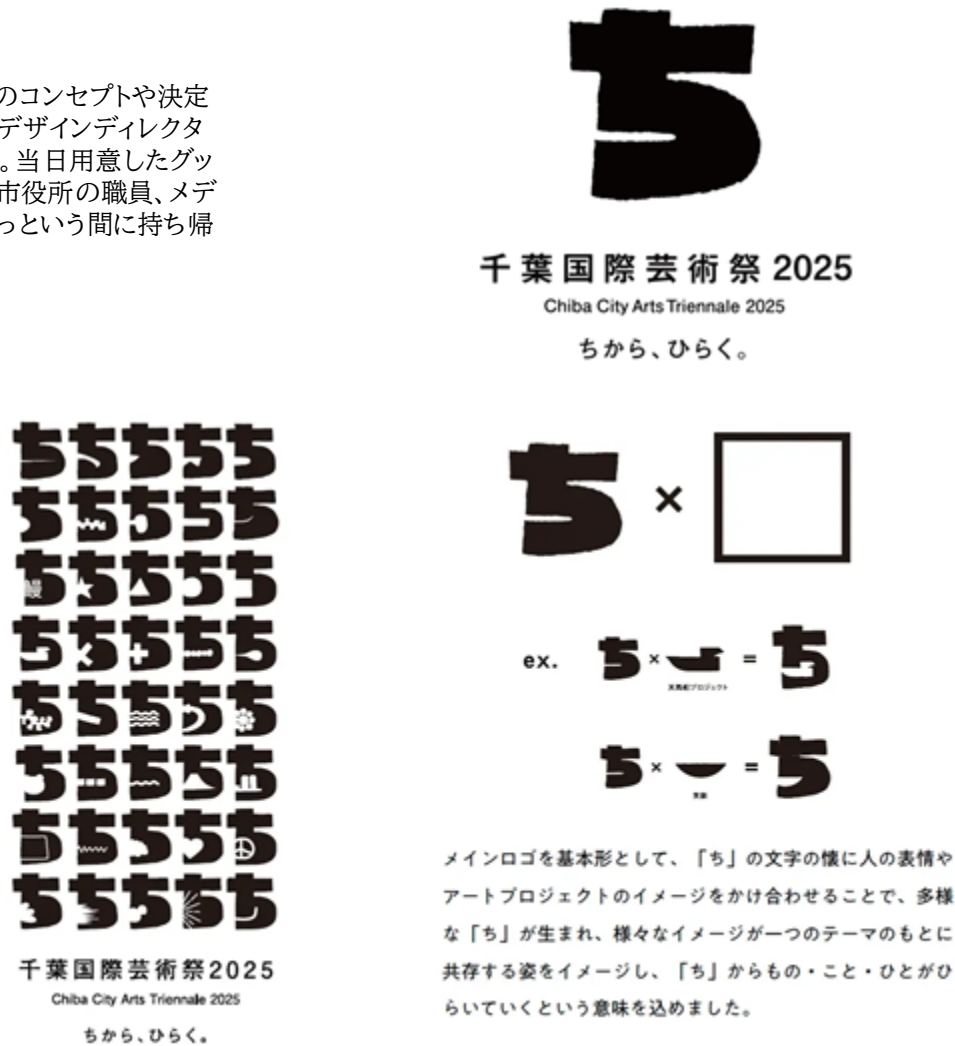
10:20～
・写真撮影



6.記者会見でのプレス内容

①ロゴデザイン発信

今回のロゴデザインのコンセプトや決定に至るまでの経緯をデザインディレクターの佐藤氏より説明。当日用意したグッズは非常に好評で、市役所の職員、メディア各社の方々にあっという間に持ち帰られた。



②事業スケジュール



③プレ企画(令和5年度～令和6年度)



西尾美也ワークショップ「くふうく」



藤 浩志ワークショップ「かえっこバザール」



栗原 良彰ワークショップ「わたしの千葉市！
テーマパークの模型を作ろう！」

④アーティスト公募プロジェクト募集開始



本芸術祭では出展作家の一部を公募で選考する。

【部門1】日本国外に在住する外国籍アーティスト

【部門2】千葉市にゆかりのある若手アーティスト(40歳以下)

選出されたアーティストは「千葉国際芸術祭2025」の出展アーティストの1人として、会期中に千葉市を舞台にプロジェクトを発表。

「ソーシャルダイブ」とは千葉市のまちなかにアーティストが滞在し、作品制作を通して、地域の魅力や新しい価値を発見すること。そのために各アーティストはアーツフィールドとして提供された市内の拠点を中心に活動を行うこととなる。

地域に根付く歴史や文化、多様な価値観に光をあてるには、コミュニティアート、ソーシャルエンゲージドアートなど、他者との関係性を創造するアートの発想力と方法論をもったアーティストの力が求められる。千葉国際芸術祭はその活動を様々な形でサポートする。

募集期間:2024年10月21日～2025年1月5日(後に27日に延長)

⑤先生たちのアンデパンダン展募集開始



「アンデパンダン展」とは、審査がなく、誰でも作品を発表できる展覧会。参加する上での出品・発表ジャンルは不問で音楽、パフォーマンスも含む。本会期では全市民を対象に行う予定だが、その前に市内の先生方を対象としたアンデパンダン展を実施する。

プレ期間に「先生」を対象にする意義は、先生が表現者としての姿をみせることで、生徒をはじめとした周りの人々の創造性を刺激し、そこから先の未来にまた新たな活動が始まっていくことを期待。

教科や現役、OB,OGや国籍は問わず、授業の枠組みを超えた活動のひとつとして子どもたちやかつての教え子たちに「こういうことを一緒にやってみようよ!」と声をかけたりする場としてアンデパンダン展を活用していただきたい。

募集期間:2024年9月2日～12月23日
(後に2025年1月27日に延長)

⑥SNS情報公開

・ティザーサイトURL: <https://artstriennale.city.chiba.jp/>

・X(旧Twitter): https://x.com/ccat_2025

・Instagram: https://www.instagram.com/chibacity_art_triennale2025

・Facebook: <https://www.facebook.com/chibacity.art.triennale2025>

7.評価/所感

●評価できるポイント

- ・22件以上のメディア掲載につながり、広報効果が高かった。個別のメディアへの声掛けやコマンドAのネットワーク活用が有効だった。
- ・チームワークが良好で、カジュアルな雰囲気が演出され、参加者の期待度が上がる場を提供できた。
- ・除幕式、転換、配信といったテクニカル面もスムーズに進行することができた。
- ・本記者会見に向けて手作りで制作したグッズが高評価を得た。
- ・市民ヴォイドでの開催が写真撮影の効果を高め、イベントの魅力を高めた。(白い明るい背景)
- ・中継の実施がスムーズだったほか、市民対応の担当者の活躍が評価された。

●本会期で挑戦してみるポイント

- ・参加者がオンラインで参加できる仕組みを整備する。
- ・用途別に画像などを事前に用意し、取材者が利用しやすい素材を提供する。
- ・事前スケジュールを早めに立て、運営の余裕を確保する。
- ・2025年4月の総会後に記者会見を実施し、より効果的な発表を目指す。

8.課題

- ・実行委員会内の一部メディアが参加できなかったため、次回発表時には必ず参加を促す対策が必要であった。
- ・10/3に総会を実施した際に、記者会見を周知すべきであった。
- ・市長と総合ディレクターの話す時間をもっと確保すると、プロジェクトのビジョンをより効果的に宣伝できると反省した
- ・文化振興課との事前会議が未実施だったため、次回は開催を検討する。



2024年10月26日(土)実施

ラウンドテーブル02「ちくわ部、はじめます。～ちばしで／くわだて／わになって～」

1. 実施概要



千葉国際芸術祭は、市民が主体的に参加し、制作プロセスを共に創り上げる「アートプロジェクト型」の新しい芸術祭として企画が進められている。この芸術祭をきっかけに、千葉市での暮らしがより豊かで楽しくなるような、新しい発想を生み出す機会を創出することを目指している。

その一環として、芸術祭の企画運営に関わる千葉市在住メンバーで発案した「ちくわ部(ちばしで／くわだて／わになって話す部)」という対話型のワークショップイベントが開催された。芸術祭そのものや「芸術」や「祭」、「場」とは何かを問い直し、芸術祭をきっかけに市民同士が自由に出会い、話し合い、アイデアを共有する場を提供する。

千葉市にゆかりのある人々が、所属や肩書にとらわれずに参加することによって、新しい繋がりを生み出し、地域の創造性やコミュニティの活性化を掘り出すことを期待している。

2. 開催概要

プロジェクト名 : ラウンドテーブル02「ちくわ部、はじめます。～ちばしで／くわだて／わになって～」
 参加者 : 地域リーダー、市民のみなさま
 開催日時 : 2024年10月26日(土)16:00～17:30(15:30開場)
 会場 : アーツうなぎ(旧・うなぎの安田)(千葉市中央区市場町9-14)
 参加費 : 無料
 定員 : 15名(先着順・事前申込み制／定員に余裕がある場合は当日参加可)→21名参加
 参加方法 : 現場参加もしくはオンライン配信視聴

3. プログラム

- ・千葉国際芸術祭2025って、何？
- ・ちくわ部の紹介
- ・本日のテーマの発表
- ・グループワーク
- ・まとめ

4. 参加者について

・千葉国際芸術祭2025 地域リーダーズ

アート・デザイン・広報など、それぞれが持つ専門性を活かして芸術祭の企画運営に関わるチーム。千葉国際芸術祭2025の開催のために発足。千葉市内や近郊在住者が参画し、現在12名が活動中。

・アーティスト

高嶺 格さん、沼田 佑香さん、四方 謙一さん



5. 会場について

「千葉国際芸術祭2025」の地域拠点のひとつ「アーツうなぎ」は元々約10年前に閉店した老舗のうなぎ割烹料理店「安田」。今回の芸術祭をきっかけにさまざまな人の手で整備され、新たな役割を持つ場に生まれ変わろうとしている。

「アーツうなぎ」は単なる芸術祭の運営拠点ではなく、市民とアーティストが共に創り上げる、地域文化の新たな可能性を探るための実験的な場としての役割も担っている。

約140年の歴史を持って、地域に深く馴染む存在とした老舗を通じて、千葉市の日常に溶け込みながらも、非日常的な創造の刺激を提供し、芸術祭の理念を浸透させていく。



5. 当日のスケジュール



案内パネルの貼り付け



会場の受付



オンライン配信準備



千葉国際芸術祭2025とちくわ部の紹介



地域リーダーズから
本日のお題の発表とグループ分け



グループごとにディスカッション



発表と振り返り



全体集合写真を撮影

7. グループワーク

全体を3つのチームに分けて、それぞれの課題に対してディスカッションし、アイデア出しを行い、発表した。参加者が安心して話せる場を一緒に作り出せるよう、いくつかの心得を提示した。

- ・「意見」よりも、「質問」することがだいじ
- ・考えが変わってもいいし、分からなくなってもいい
- ・聞いているだけでもOK、沈黙もOK
- ・話している人の話を最後まで聞く、さえずらない

【地域開発チーム】

お題:どんな場所を芸術祭の会場にしたら面白い？

- ・いつも閉まっている幕張のイトーヨーカドーの立体駐車場の上。
- ・公民館



【広報チーム】

お題:千葉市外の人に千葉市にきてもらうには？

- ・地理的な面白いく。(モノレールなど)
- ・歴史的に重要な建築物



【クリエイティブチーム】

お題:「ち」のロゴマークを覚えてもらうには？

- ・自分が好きな「ち」を作る。
- ・チケットに「ち」を使う。
- ・チーバくんのように、「ち」の認知度を向上させる。



8. 記録写真



9. 評価/所感

- ・千葉という都市の文化が市民の心に根付いていることを感じられた。参加者の多くが地元の文化や歴史に対して深い愛着を持っており、それを共有することで改めて地域の魅力を再発見する可能性が高いと思った。
 - ・千葉市に住んでいる参加者たちが自分たちの町に対して強い愛情を抱いていることが印象的だった。
 - ・チームでディスカッションした際に、千葉市に住む人だけが知る豆知識が多く共有された。これにより、参加者間で新しい発見が生まれ、地元への理解がより深まった。
 - ・千葉市の住民同士が顔を合わせ、直接会話を交わすことで、地域の一体感が感じられた。
 - ・自分が住んでいる町のことをそれぞれが話し、地元の地理や文化などを話題にしたことで、参加者の間に新しいアイデアや発想が芽生えてきた。これらの発想を今後の芸術祭の企画に反映する機会があれば、面白くなると思う。
 - ・地域住民が肩書きや立場を超えてフラットに対話できる場を提供することで、千葉市のコミュニティを活性化することができる。
 - ・市民の多様な声を直接聞き、地域の魅力を掘り出す場となるとともに、コミュニティの新たな繋がりを生むきっかけにもなると評価できる。
 - ・今回のラウンドテーブルの「心得」を参加者に共有し、スタートさせたことがよかった。今後も継続したい。
- 聞いているだけでもOK、沈黙もOK
 - 「意見」よりも、「質問」することがだいじ
 - 話している人の話を最後まで聞く、さえぎらない
 - 考えが変わってもいいし、分からなくなってもいい
 - みんなが安心して話せる場を一緒につくりましょう！

10. 課題

本開催は、広報チームが主体となって当日の内容を組み立てた。今後ラウンドテーブルはテーマを変えつつ展開していく予定。「ちくわ部」は、単に「ラウンドテーブル(トークイベント)」という属性だけでなく、芸術祭に対しての市民の「関わりしろ」を増やす役割もあり、今後柔軟に多様な「活動」に変化できる可能性を持っている。本会期に向けて「ちくわ部」の設計にも注力していきたい。

2024年11月3日(日)実施

「国道357号上部空間プロジェクト・沼田侑香 × Skaters「タイムラグ・パーク」

1. 実施概要



スケートボードは1970年代にアメリカで生まれ、同時期に日本にも上陸した。千葉市内のスケートパークや公園がその文化の発展に寄与し、1993年には千葉パルコのMURASAKIPARKがオープン。近年では2022年に「X-GAMES」に合わせて「BLOCK PARTY」が千葉市で開催され、スポンサーの支援を受けて盛り上がりを見せた。スケートボードカルチャーは協調性に富んでおり、年代を超えたコミュニケーションが自然に生まれる文化として、地域の重要な因子とされている。

この度、国道357号上部の空間を舞台に、スケートボードとアートを融合させたユニークな空間【沼田侑香 × Skaters「タイムラグ・パーク」】を展開。本プロジェクトでは、沼田さんが記憶する国道357号付近の風景と現在の風景とのギャップをモチーフにしたインスタレーション作品を設置した。インスタレーション内の構成物はスケートボードのセクションとして機能し、アーティストとスケーター双方の創造性が融合する空間を創出した。
 ◎参加人数: のべ約262人

2. 開催概要

プロジェクト名 : 国道357号上部空間プロジェクト・沼田侑香 × Skaters「タイムラグ・パーク」

アーティスト : 沼田侑香 × Skaters「タイムラグ・パーク」

開催日時 : 2024年11月2日(土)10:00-16:00 ※雨天のため、11月3日(日)に延期して実施

会場 : 国道357号上部空間(千葉市中央区千葉港1-1)

参加費 : いずれも無料

参加方法 : ①壁画ワークショップ: 当日自由参加②アイロンビーズワークショップ: 事前申込③スケボー体験: 事前申込

対象 : ①どなたでも②どなたでも小学3年生以下は保護者同伴③満5歳以上で小学生まで

定員 : ①壁画ワークショップは定員なし②アイロンビーズワークショップ③スケボー体験は定員各8人

同時開催 : STAY STREETイベント

協力 : 長岡産業株式会社

◎当日の活動構成



建屋壁面に来場者が一緒に壁画を描くワークショップ



アイロンビーズを用いて、「ち」のロゴを作るワークショップ



スケートボードパフォーマンス
 ＊天候の影響により、スケボー体験は中止となった。

3. アーティスト紹介 沼田侑香(ぬまた ゆか)

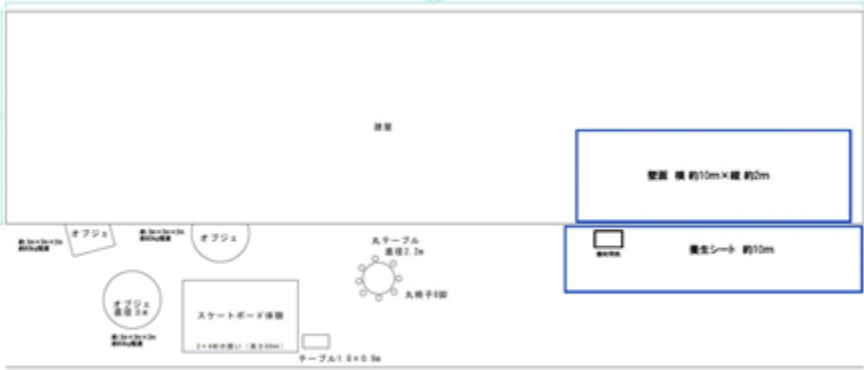


1992年千葉県千葉市出身。2022年東京藝術大学大学院油画専攻修了。アイロンビーズ等の素材を用いてコンピューターバッグをモチーフとした作品を展開している。主な展示として「百年後芸術祭」(千葉県市原市、2024)、「クオテリウム100 沼田侑香」(水戸芸術館現代アートギャラリー、水戸市、2024) など。その他に、NIKE Jordan Brandでのコミッションワーク作品が渋谷の店舗『World of Flight Tokyo Shibuya』に展示されている。

4. 企画経緯

- 9月27日 ● ストリートカルチャー企画の進行MTG。
ストリートカルチャー企画で進行することを確認。
- 10月2日 ● スケーターメンバーとMTG、企画合意。
- 10月5日 ● Slack立ち上げ、文化振興課との調整(プラン未定)。
- 10月6日 ● アーティスト沼田さんと企画合意。
- 10月11日 ● 沼田さんが現地視察(現場とインスタント千葉ストア)し、プラン作成開始。
- 10月16日 ● 沼田さんが1stドラフト3D図面納品、法的確認後、意見すり合わせ。
- 10月18日 ● オンラインMTG、企画概要、予算、スケジュールについて確認。
- 10月22日 ● 対面MTG、制作物の内容・強度、WSについて確認、広報が始まる。
- 10月25日 ● 実制作開始(9:00-21:00) - 11月2日まで。
長岡産業株式会社からの著作物利用許諾を得る。
- 10月26日 ● ちくわ部後、広報打ち合わせ。
- 11月1日 ● 雨天のため2日の実施を見送ることを決定。
- 11月2日 ● 翌3日の実施が確定、オブジェの制作。
- 11月3日 ● 企画実現
*天候の影響により、スケボー体験は中止となった。

5. 会場レイアウト



左上: 正面図
右上: 俯瞰図
左下: 芸術祭の紹介看板とプロジェクトの紹介看板
右下: プロジェクトの紹介看板

6. 当日の動き

壁画ワークショップの会場を設営。
壁面には下絵が印刷された透明シートを貼付
(2枚で構成)。地面にもしっかりと養生を行った。
塗料や道具を並べ、準備を整えた。

(下絵は沼田さんのオブジェをモチーフにした
もの)

*写真は設営完了後の会場風景



【壁画ワークショップ】

10時開始。壁画ワークショップに参加した子どもたちは、当初は下絵通りに塗り絵をしていたが、やがて下絵の線をはみ出し、思い思いの線や絵を描き始めた。



準備された絵の具だけでは色が足りず、自ら色を混ぜて独自の色を調合し、こどもたちは壁画制作に取り組んだ。



【アイロンビーズワークショップ】

14時よりアイロンビーズのワークショップが開始。講師の沼田さんが制作セットを配布した。(セット内容:「ち」のロゴがプリントされた紙、透明プレート、ビーズ、ピンセット)

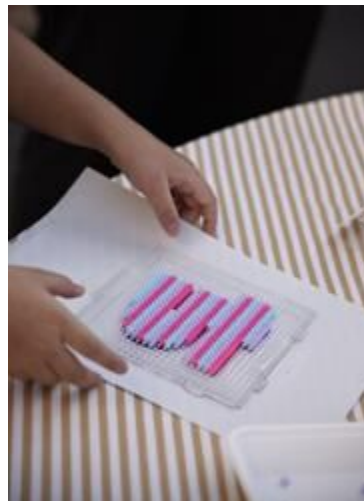
子どもたちは好みの色を選び、図案に沿ってピンセットを使いながらアイロンビーズを並べていた。



オリジナルのイメージを作りあげた子ども。



沼田さんが、完成した1人1人のアイロンビーズ作品にアイロンをかける。



子どもたちは壁画の前でアイロンビーズ作品と一緒に記念撮影を行い、ワークショップは終了した。



【スケートボード体験】

前日の雨の影響でこの日の体験は行われなかったが、スケーターによるデモンストレーションが実施された。

※写真はスケートボードを練習している子どもたち



会場にはDJを招き、ビートの効いた音楽が流れる空間演出を行った。



スケーターがハードなパフォーマンスに挑戦する一方で、お父さんの指導を受けながら一生懸命頑張る小さな子ども。



スケーターたちがスケートボード初心者をサポートしながら指導している様子。



インスタレーション作品を楽しむスケーターたち。
16時に展示が終了し、その後会場の撤去作業を行った。



7. 評価/所感

◎ 企画について

- ・ストリートカルチャーとアートを掛け合わせる企画として、法的に道路と扱われる場所にフィットした内容だった。
- ・スケボー体験は実施されなかったが、スケーターが空間に入ったことで企画が成立したと感じた。
- ・ビーズや壁画ワークショップでは多くの子どもたちが参加し、一定の結果を得られた。職員の方々からも好評をいただき、ストリートカルチャーの教育的側面を提示し、次回に向けてブラッシュアップする話をした。

◎ 広報について

- ・広報チームからの指示を受け、当時の写真や記録映像を順次アップロードしながら、インスタの更新を行った。しかし、広報活動全体において、情報発信のタイミングや内容の工夫が不足していると感じた。今後は、より効果的な情報発信を行うため、広報チーム全体で意識を共有し、計画的な広報戦略を構築する必要があると考える。

◎ その他

- ・屋外広告物の取扱いについて、対応と進展を市役所の方に相談した結果、規則改正を含め関係各部への掛け合いについて、検討していただけることになった。
- ・芸術祭を契機に、法制度や街の在り方を改善する良いモデルになる可能性がある。引き続き、市役所の方々とコミュニケーションを図りながら進めていきたい。

8. 課題

- ・企画実現のため、アーティストとスケーターで構成する制作チームを結成できたが、それを運用するための千葉国際芸術祭内のチームビルドは不十分だったと反省した。
- ・タイトなスケジュールの中で広報についての十分な対応ができなかった。チームビルドの問題とも関連している大きな反省点である。
- ・鑑賞者が鑑賞時に深掘りできるようにするための前提知識(千葉のカルチャーやメンバーのバックグラウンド等)の紹介が後手に回った。
- ・天候の影響で実施できなかったスケボー体験については、来年度の本会期に向けて、どのように実現可能とすることを検討する必要がある。

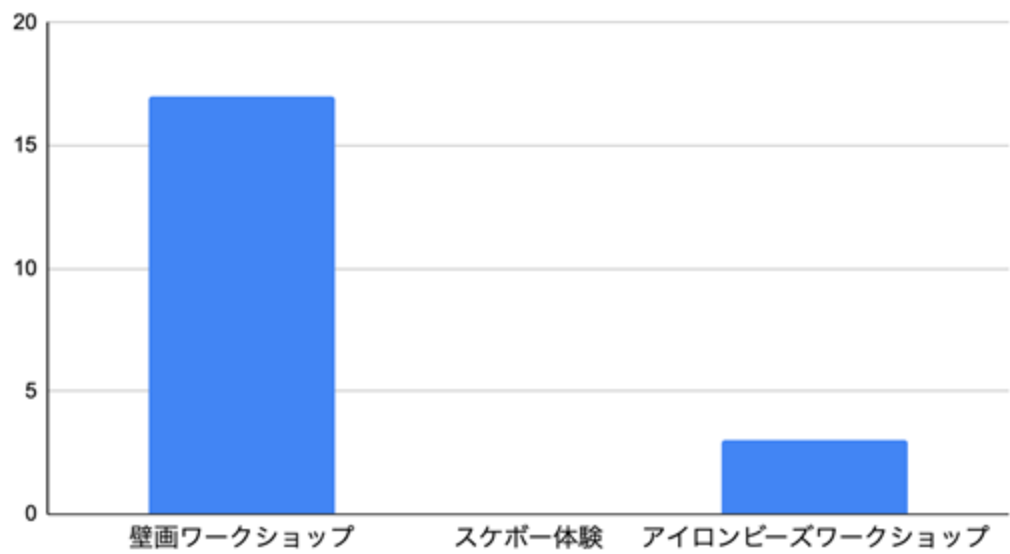
9. 記録写真



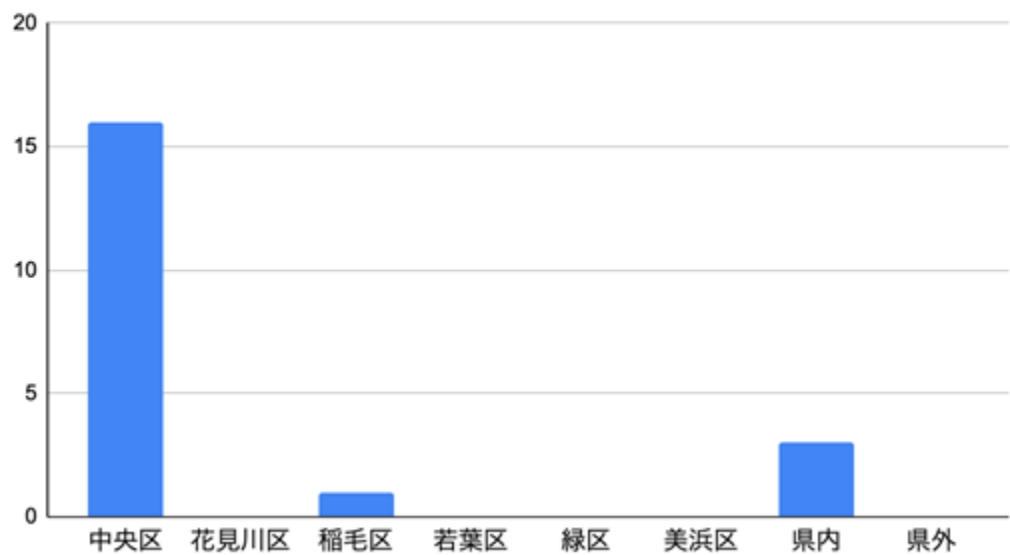


10. アンケート

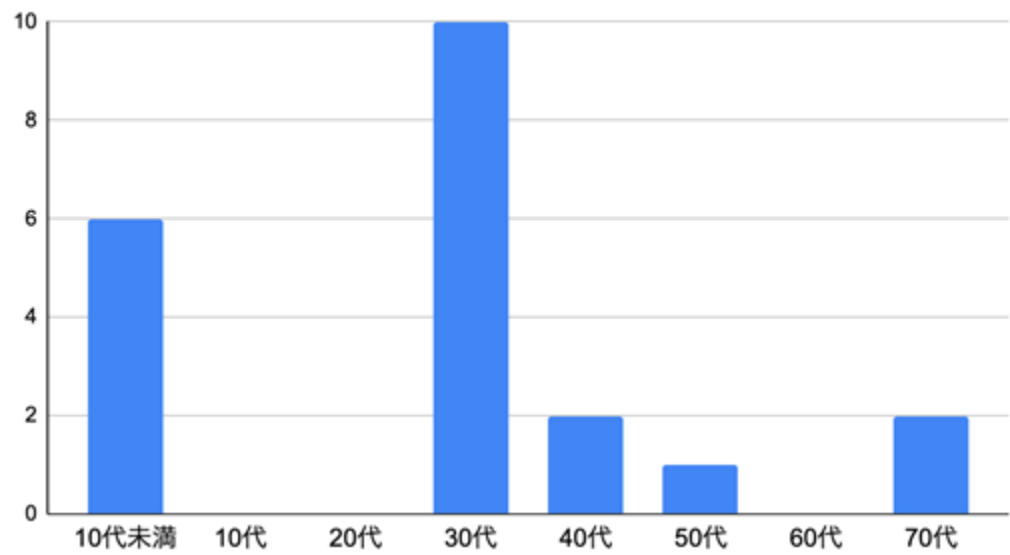
参加したワークショップを教えてください



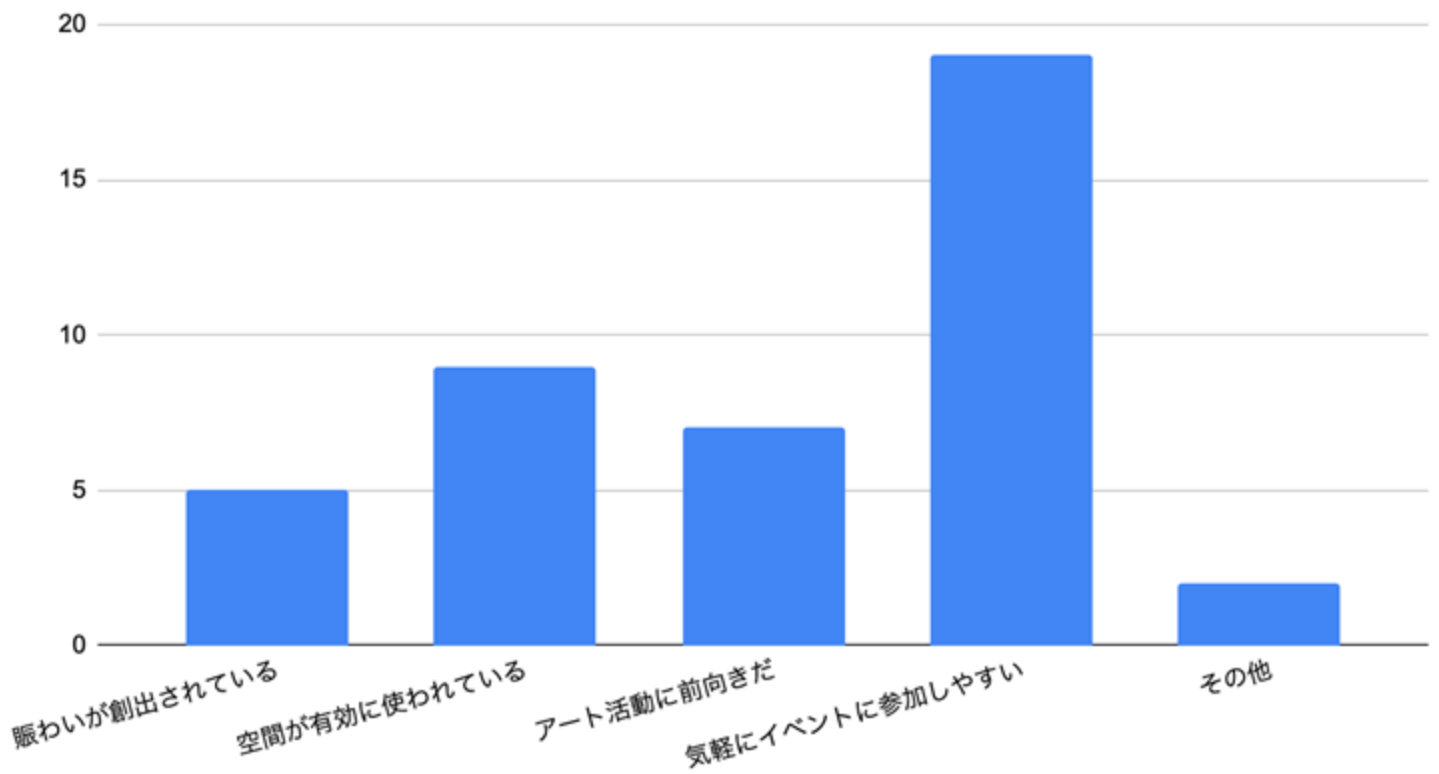
市内在住・在勤・在学または市外か教えてください



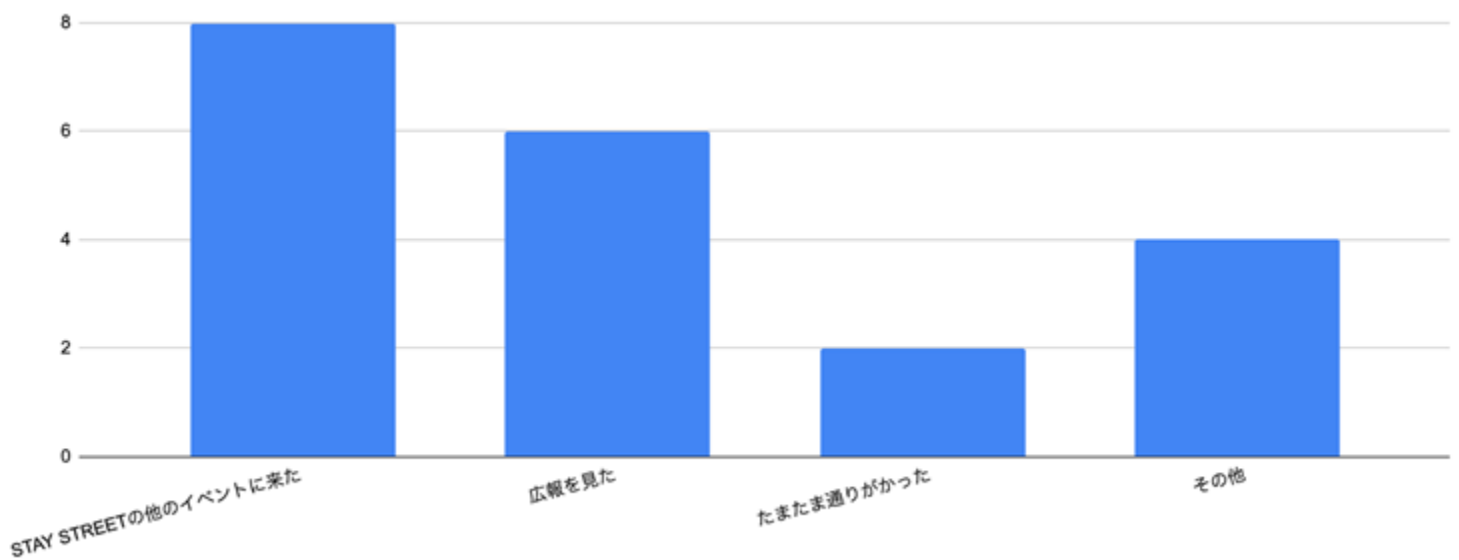
年代を教えてください



この場所で、アートイベントが開催されることについてどう感じましたか



今日ここに来られたきっかけを教えてください



2025年3月8日(土)実施 国道357号上部空間プロジェクト・沼田侑香 × Skaters 「タイムラグ・パーク02」

1. 実施概要



2024年11月に開催した「タイムラグ・パーク」の2回目を実施。今回は「STAY STREET」との同時開催ではなく単独開催となった。広いスペースを有効に使うべく、展開場所にもこだわり、上部空間中央の三角の構造物の上を滑走できるように、バンクも追加で制作し、同じ国道357号の上部空間でも、さらにレベルアップした内容となり、スケーターに向けてチャレンジングな場を提供した。

当日は最高気温が2桁に届かない曇りで寒さの厳しい日となったが、それにも関わらず午前中からスケボーを持った親子や若者が集まり、DJによる音楽や解説も流れ、いつもは人気の少ない「上部空間」に賑わいを創出した。小さなお子さん向けの「壁画ワークショップ」も予想以上に親子連れが訪れ、大きな壁面への自由な表現を思う存分楽しんでいた。保護者へのアンケートからは市政だよりや市や芸術祭のアカウントのSNSを見て、足を運んだ方がほとんどで、やはり事前告知の大切さを痛感した。

1回目の開催時は天候の影響で実施できなかった「スケボー体験会」には熱心な受講者が集まり、開催時間が過ぎて滑走する子ども達の熱い気持ちが伝わってきた。

●参加人数:のべ約208人(スケボー:143人 壁画:65人)

2. 開催概要

プロジェクト名 :国道357号上部空間プロジェクト・沼田侑香 × Skaters「タイムラグ・パーク02」

アーティスト :沼田侑香 × Skaters「タイムラグ・パーク」

開催日時 :2025年3月8日(土)11:00-16:00

会場 :国道357号上部空間(千葉市中央区千葉港1-1)

参加費 :いずれも無料

参加方法 :①壁画ワークショップ:当日自由参加②スケボー体験:事前申込

対象 :①どなたでも②小学生以上

定員 :①壁画ワークショップは定員なし②スケボー体験は定員各8人

協力 :長岡産業株式会社、Instant千葉ストア

●当日の活動構成



壁画ワークショップ



スケボー体験会



プロスケーターデモンストレーション

3. アーティスト紹介 沼田侑香(ぬまた ゆか)



1992年千葉県千葉市出身。2022年東京藝術大学大学院油画専攻修了。アイロンビーズ等の素材を用いてコンピューターバグをモチーフとした作品を展開している。

主な展示として「百年後芸術祭」(千葉県市原市、2024)、「クリテリウム100 沼田侑香」(水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城県水戸市、2024)など。その他に、NIKE Jordan Brandでのコミッションワーク作品が渋谷の店舗『World of Flight Tokyo Shibuya』に展示されている。



5. 当日タイムスケジュール

- 8:30～11:00 メンバー集合。展開内容を確認した後それぞれの担当会場を設営。
- 11:00～12:00 スケーター体験会。千葉のスケーターによる初心者向け体験会。道具・防具の貸し出し有。定員8名。30分2回開催。壁画は11:00より随時受付。
- 12:00～13:30 フリータイム。スケーターが監視のもと、年齢・技量を問わず自由に滑れる。
- 13:30～15:00 プロスケーターによるデモンストレーション形式で、ジャッジ3名による審査を行う。
- 15:00～16:00 フリータイム(壁画は早めに撤収した)
- 16:00～17:30 撤収→清掃→解散



6. ワークショップ等

【壁画ワークショップ】

9:00頃より壁画ワークショップの会場を設営。線画がプリントされたシート(W15×H2m)が壁面に貼り付けられた。下絵は沼田さんが長岡産業株式会社の飛び出し看板などをモチーフに制作した画像。



11時開始。曇りがちで寒さの厳しい日だったので、参加者が本当に集まるのか心配されたが、徐々に親子連れや若い女性グループなどが集まった。



下絵の他にも参加者が自由に描いたものが数々見られた。今回はスペースに余裕があったため、お子さんのみならず保護者の方々も夢中で描き始めた。



【スケボー体験会】

千葉市在住のスケーターのサポートのもと、エリア内でスケートボードの試乗ができる体験会。「初心者だけどスケボーに乗ってみたい！」という気持ちに応えるワークショップ。今回は天候の影響で実施できなかったため、スタッフにも熱がこもった。

①11:00～11:30(各回30分前より受付)

②11:30～12:00

対象：小学生以上のスケボー未経験者
プッシュ・チクタクが出来ない人

定員：各回8名

参加方法：事前申込制(専用フォーム)

講師：G.I.F.T



【プロスケーターデモンストレーション】

アーティストの沼田さんが制作したオブジェの中をプロスケーターが本気で滑るデモンストレーションには多くの観客が集まった。会場はDJによる音楽やMCによる技の解説が行われ、スケボーの奥深さや親しみを演出した。

ゲストスケーター

Kaito Murai(STUNPBOYS)
Kyonosuke Yamashita(STUNPBOYS)
Gakuto Asano(STUNPBOYS)
Onabu(STUNPBOYS)
Tatsuma Masuda (STUNPBOYS)

ジャッジスケーター

Hideki Yakushido

DJ

popingood17(POPCORN RECORDS)
KENTA
OhMyGod(G.I.F.T)
SUSHIDAS
RINTARO

スケーターMC

Daisuke Ishii(instant)



7. 評価/所感

- ・2024年11月の1回目の開催時には天候の影響で実施できなかった「スケボー体験」を実施でき、ようやく当初の目的を果たすことができた。プロのスケートボーダーのパフォーマンスの鑑賞とともに、スケートボード初心者巻き込んで、より市民の参加度を向上できた。
- ・DJの音楽と、スケートボードのカジュアルな解説が雰囲気盛り上げ、普段は人の少ない「上部空間」に賑わいを生み出したのは、場所のポテンシャルを引き出す試みとして成功したといえる。
- ・難易度が高い三角構造物の上を滑走するというアイデアは、スケーターにとって挑戦的で魅力的な場となり、既にある「場」をスケートボード(ストリートカルチャー)の力で変容させ、アーツフィールドを生み出す原動力となった。
- ・2回目を実施するにあたり、アーティストが制作する構造物(バンク)を追加制作したことで、前回よりも更に滑走の自由度を高め、スケーターにとっての魅力が増した。
- ・市政だよりやSNSを見て訪れた人が多かったことから、告知の影響力の大きさが確認できた。
- ・広報担当者を現場にアサインしたことで、会場の雰囲気が即時にSNSへ反映され、情報拡散の効果を高めることができた。
- ・上部空間の広い場所を活用し、スケートボードと並行して壁画ワークショップも同時進行で展開することで、親子連れが多く訪れ、新しい体験を提供した。

8. 課題

- ・広い空間を贅沢に利用できた反面、壁画ワークショップ、スケボー体験、プロスケーターデモストレーションは安全性などの理由により物理的に近づけることができなかったため、イベント全体としての一体感が若干欠けるように思えた。視覚的、聴覚的な繋がりを持たせるための会場構成の工夫は継続して検討していきたい。
- ・壁画ワークショップの養生対策を強化(養生シートを広範囲に敷く、水性塗料を使うなど)すること。
- ・イベント終了後の清掃計画を事前に作成し、スタッフを確保するなど、撤去作業の効率化。
- ・前回同様に、子どもたちが大胆な筆づかいで、下絵の描線に捕らわれずのびのびと壁画ワークショップに取り組めたことは良かったが、次回はワークショップの導入時に、もっと下絵の意図を明確に説明して、1枚の絵として、壁画の完成度を上げる取り組みを行ってきたい。

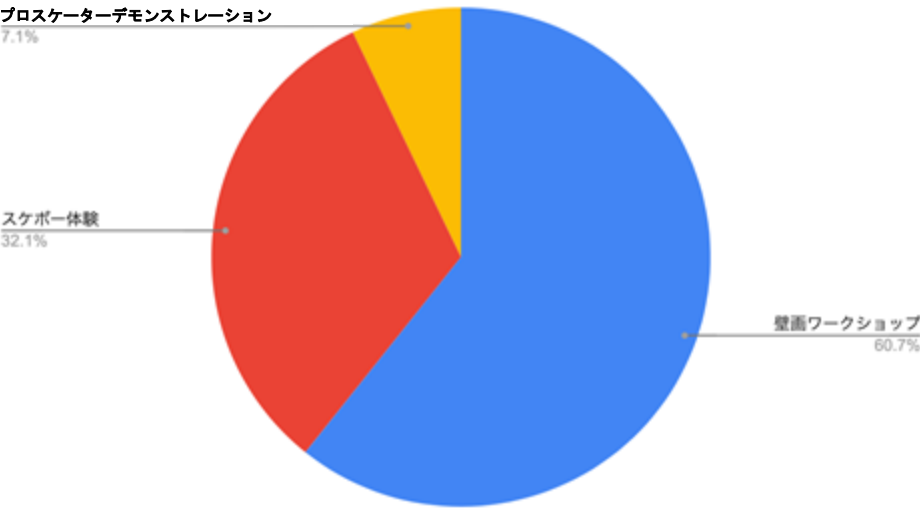


9. 記録写真

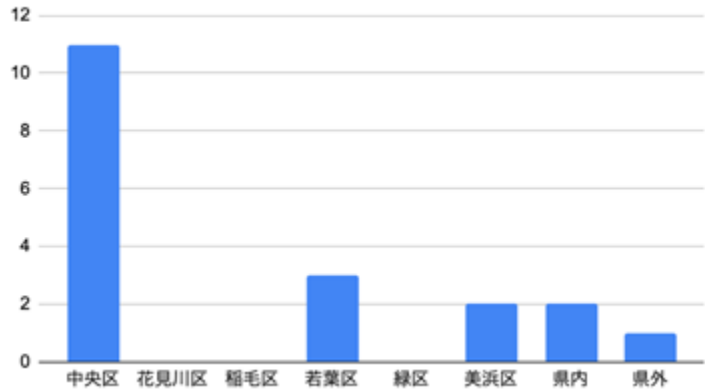


10. アンケート

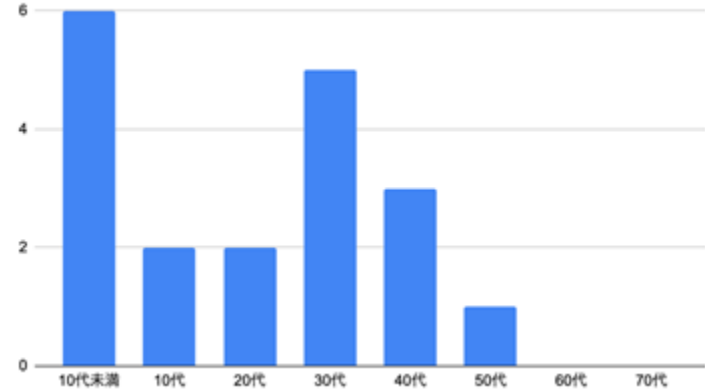
参加した企画を教えてください



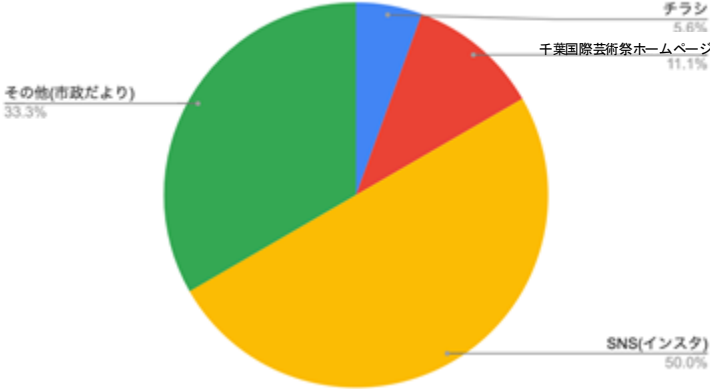
市内在住・在勤・在学または市外か教えてください



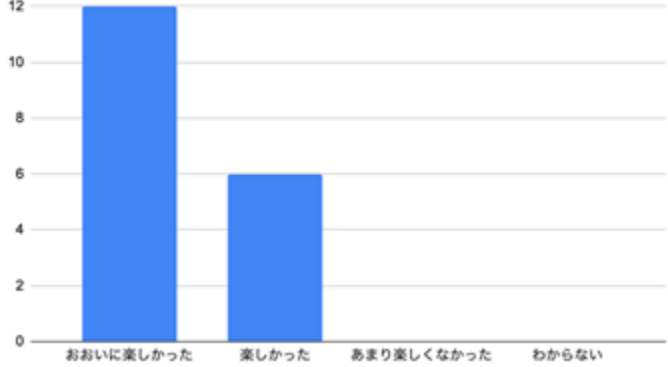
年代を教えてください



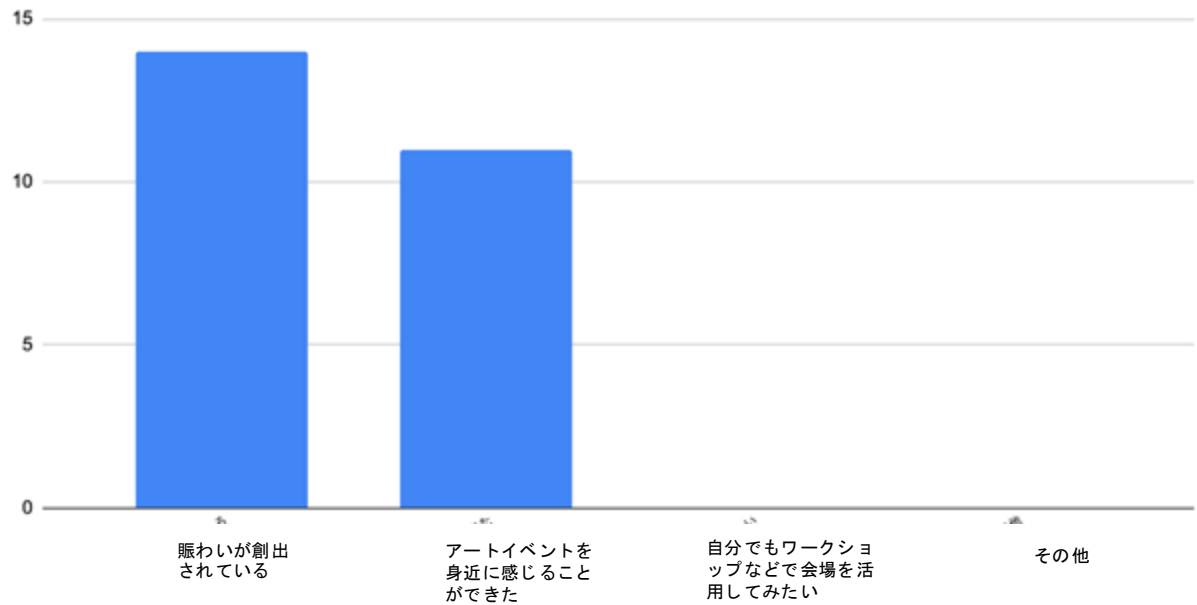
今日ここに来られたきっかけを教えてください



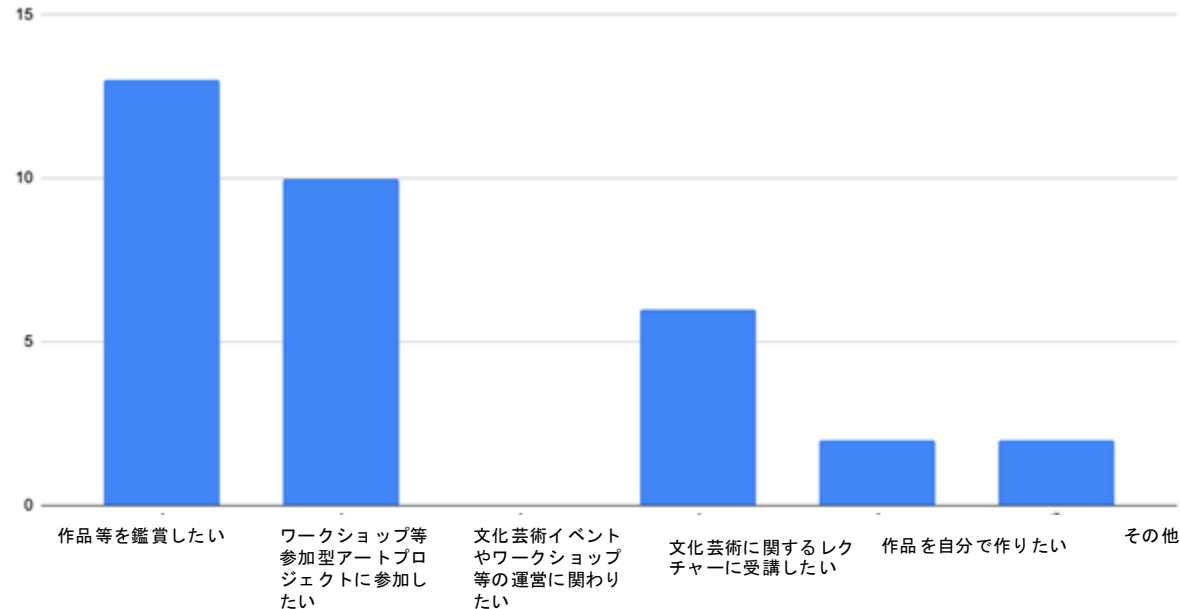
この企画にはお楽しみいただけましたか



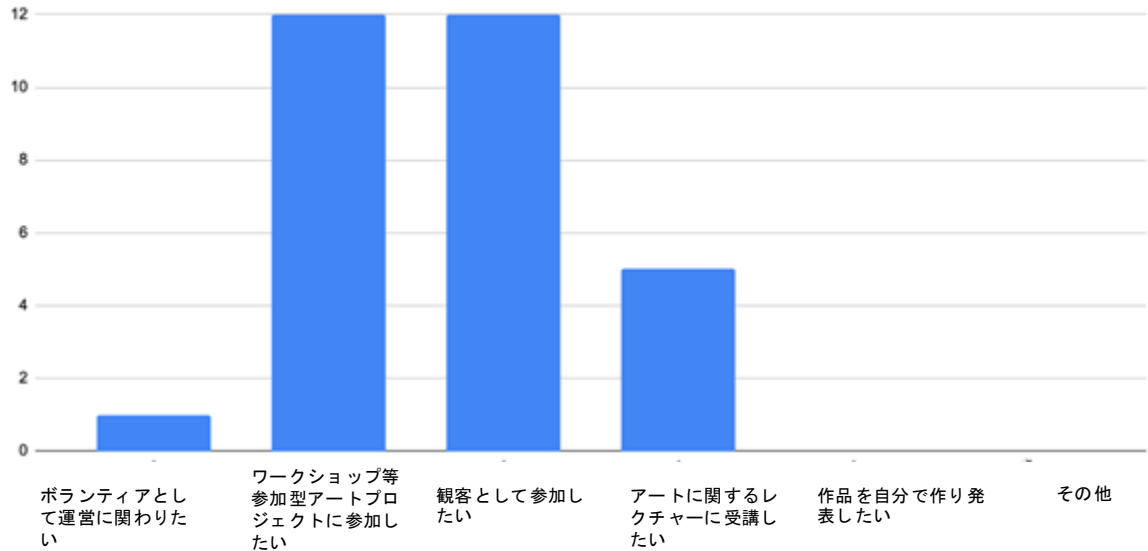
この場所でアートイベントが開催されることについてどう感じましたか(複数回答可)



文化芸術にどのように関わりたいですか(千葉国際芸術祭以外も含む)(複数回答可)



千葉国際芸術祭にどのように参加してみたいですか(複数回答可)



◎設問

その他、千葉国際芸術祭について感想やご意見などございましたらご記載ください

※文章は原文のまま

- ・様々な企画たのしみしています
- ・楽しかったです！もっと宣伝した方が良いかも。
- ・普段できない体験(スケボー、壁画アート)ができ、新鮮でワクワクすることができました。ありがとうございました。
- ・スケボー初めてですが、楽しかったです。

2024年11月8日(金)実施 公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」第1回説明会

千葉国際芸術祭2025令和6年度プレ企画事業実施報告書

1. 実施概要



千葉国際芸術祭2025に向け、2024年10月21日よりアーティスト公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」が開始した。この企画では、[部門1]海外アーティスト、[部門2]千葉市にゆかりのある若手アーティストを対象に2部門で募集を行った。募集開始に合わせ、総合ディレクターである中村政人氏による説明会を実施。説明会は千葉市中央区市場町に新たに誕生したアート拠点「アーツうなぎ」で行われ、本実施では[部門2]千葉市ゆかりの若手アーティストを対象に応募詳細が説明された。また、説明会終了後には総合ディレクターを含む参加者同士の懇親会が開催され、交流の場を設けた。本イベントはリアル参加とYouTubeライブ配信を並行して実施し、参加者がオンライン・オフラインを問わず参加した。

2. 開催概要

プロジェクト名 : 公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」説明会
登壇者 : 総合ディレクター 中村政人
プロジェクトディレクター 彦根延代
開催日時 : 2024年11月8日(金)18:30-19:30(18:00開場)
会場 : アーツうなぎ(旧・うなぎの安田)
千葉市中央区市場町9-14
参加対象 : 千葉市ゆかりの若手アーティストおよびその関係者
参加費用 : 無料

3. プログラム

千葉国際芸術祭2025の説明
公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」概要案内
応募方法および審査の流れの説明
質疑応答
懇親会(現地参加者のみ)



4. 参加人数

現地参加: 8人(7人が千葉市ゆかり、1人が佐倉市)
オンライン閲覧数: 338回(2025年1月末時点)

5. 当日のスケジュール

17:00～
パネル準備、各紙面資料
受付開始
一階で参加者を案内した。



18:30～
説明会開始。
開会挨拶、登壇者紹介
千葉国際芸術祭について
「ソーシャルダイブ」についてWebを
見せながら簡単説明
※Webでの導線も説明



18:45～
中村氏による説明。
「ソーシャルダイブ」についての概要
(全体の話)
千葉国際芸術祭での本公募の特徴に
ついて説明



18:50～

中村氏、彦根氏による拠点について説明
【中村】「拠点資料」を見せながらの個別説明

動物公園→千葉駅周辺ビルから3カ所→
美術館前の旧診療所

【彦根】今後拠点がが増えていく過程
で資料を更新することを案内



19:00～

彦根氏による応募要項の説明
応募要項のWeb上の場所を説明



19:15～

質問応答

現地参加の全員に感想と質問を伺い、
YouTubeチャットでも受付



19:30～

閉会。配信設備撤去

現地での参加者と一緒に懇親会を行っ
た。



7. 効果

・プロジェクト趣旨の周知

千葉国際芸術祭プロジェクトおよび公募テーマ「ソーシャルダイブ」の趣旨や目的を、千葉市ゆかりの若手アーティストに直接広く周知する機会となった。

・芸術祭への注目喚起

総合ディレクターからの直接の言葉で、千葉国際芸術祭2025のビジョンや取り組みを紹介することで、芸術祭そのもののへの注目度や期待度が高まった。

・地域の魅力発信

千葉市内における作品発表の拠点となる場所を提示し、千葉市の持つ多様な魅力を参加者に伝えることができた。

・多様な応募者への期待

説明会の参加者数や研究分野、質問・感想の内容から、今後の応募者層の多様性がさらに広がることが期待される。

2025年1月13日(月・祝)実施 公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」第2回説明会—まち歩き

1. 実施概要



千葉国際芸術祭2025のアーティスト公募企画「ソーシャルダイブ」に関連して、千葉市にゆかりのある若手アーティストや関係者を対象とした説明会の2回目を実施した。本説明会は、1回目の開催とは異なり、総合ディレクターとともに、拠点候補地を含めた千葉市内の街を歩く試みが実施された。参加者とともに街歩きをしながらアイデアを交換し、「ソーシャルダイブ」のコンセプトを体感する機会を提供。まち歩き終了後は、千葉市の歴史的建造物である文化堂に集合し、当日の感想やコメントを共有するディスカッションが行われた。

2. 開催概要

プロジェクト名：公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」第2回説明会—まち歩き
 アーティスト：総合ディレクター 中村 政人
 開催日時：2025年1月13日(月・祝)14:00～16:00
 集合会場：文化堂ビル(千葉市中央区富士見2丁目23-7)
 参加方法：事前申し込み
 参加費：無料
 定員：10名→12名参加
 参加対象：千葉市ゆかりの若手アーティスト
 およびその関係者

3. プログラム

- ・千葉国際芸術祭2025の説明
- ・公募プロジェクト「ソーシャルダイブ」概要および最新情報案内
- ・まち歩き
- ・質疑応答、感想発表



4. 開催準備

集合—文化堂ビル

千葉中央にある文化堂ビルは、昭和35年(1960年)に文房具店のショールームとオフィスを兼ねた3階建ての建物として建設された。千葉市に現存する数少ない歴史的な商業施設の一つであり、独特な洋風デザインが特徴である。1990年代に文房具店が撤退した後は、テナントビルとして長年利用されていた。

2024年6月から改修工事が始まり、同年11月末に竣工し、2025年に再開される予定がある。改修後は、地域の歴史を感じられる空間として保存されるとともに、アートイベントやワークショップ、展示会など、多様な活動の場として活用されることが期待されている。



まち歩きのルート

文化堂をスタート地点とし、2kmのルートで8つのランドマークを巡り、再び文化堂に戻るコース。



公園



空き地



古い建物



屋外に貼り付けられた詩



千葉市の風景の象徴であるモノレール



無人24時間居酒屋



立体駐車場



仮社務所工事中の千葉神社

4. 当日の動き

13:50

参加者が文化堂に集合し、受付で資料を配布。



14:00

スタート。

開催の挨拶とともに、中村総合ディレクターより千葉国際芸術祭について説明した後、文化堂ビルを管理するサステナデザイン株式会社代表取締役の山中氏も事前説明に参加。総合ディレクターとの対話を通じて、ソーシャルダイブの特性について説明を行った。



参加者とスタッフ全員の自己紹介。



14:25

まち歩きスタート。

普段素通りするような所が、総合ディレクターの話を受けて地域資源として魅力的な場所であることに気づく参加者。メモをとりながら熱心に耳を傾けた。



15:20
千葉神社前にて休憩



15:55
まち歩き終了。再び文化堂ビルに集合。

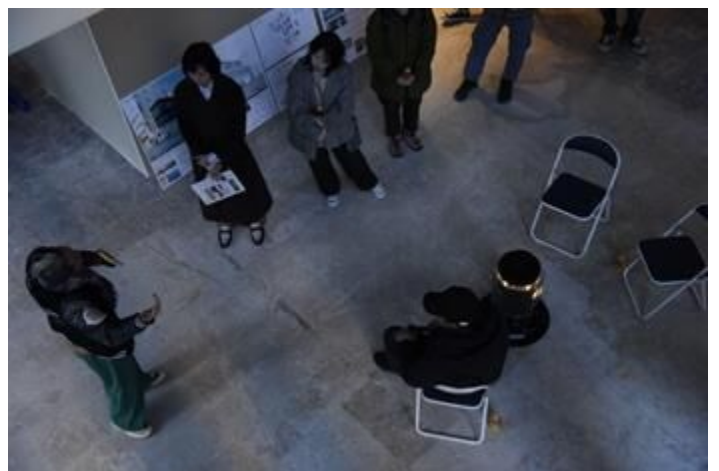


16:00
あたたかい飲み物を飲みながら、ストーブを囲んでマイクを回しながら参加者がそれぞれ感想を述べる。

16:35
終了。



5. 記録写真



7. 評価/所感

【参加者より】

- ・「とても楽しかった」というコメントが一番多かった。
- ・このようなまち歩きに参加したことで、ソーシャルダイブについて理解が深まり良かったと思う。
- ・千葉からアートカルチャーをもっと発信していけたらいいなと感じた。(10年程前はもっとカルチャーを感じるが多かったように思う。再開発で街が変わってしまった。)
- ・個人ではなくチームで取り組むというアイデアもあった。
- ・想像していたことと違って、緑は東京の方が多いと感じた。
- ・歩いたことのない場所だったが、人情味があり可愛い場所も見つけられて良かった。
- ・「そこにそれがある理由」や「以前は何だったのか」「地面の下には何があるのか」などを想像しながら参加できた。
- ・地元であるが、行く機会がなかったエリアに行き、新鮮だった。
- ・子どもの頃怖いと思った地域は、実際に歩いてイメージが変わった
- ・今日歩いたことで、作品プランをより深く考えられるようになった。
- ・以前はあったストリート系の要素が少なくなったように感じた。
- ・アートの環境は整いつつあるが、美術への関わりが地元の人には薄いと感じた。地元の人が興味を持てる内容にしたい。

【運営側より】

- ・「ソーシャルダイブ」に関する2回目の説明会であるため、前回の内容はYouTubeで公開されていることもあり、今回の開催は趣向を変えて、総合ディレクターとともにまち歩きをする企画とした。
- ・「まちに飛び込む」という行為が「ソーシャルダイブ」で選ばれるプロジェクトの醍醐味であるため、本まち歩きによって参加者に、よりリアリティを感じていただく機会となった。
- ・総合ディレクターの声が参加者に聞こえるように、ポータブルのマイクとスピーカーを導入。長く伸びるまち歩きの列にディレクターの声を届けることができた。
- ・まち歩きというフィールドワーク型の取り組みは、参加者が最も端的に千葉市の地域資源に気づく機会となるため、本会期でも積極的に取り組んでいきたい。

8. 課題

- ・プロジェクトの中で「野焼き」を予定しているチームは今回のまち歩きのルート内では候補地を見つけることは出来なかった。引き続き実現に向けて調整をつづけたい。



千葉国際芸術祭2025 アーティスト公募プロジェクト
「ソーシャルダイブ」[部門1]海外在住の外国籍アーティスト

応募者統計データ

応募者数	数	国・地域名(外務省)	数	性別	数	年齢(2025年1月27日時点)	数	ジャンル	数
全体	620	中国	57	男性	256	10歳未満	1	2D イラストレーション	53
重複数	23	アメリカ	50	女性	304	10代	3	2D ドローイング	124
有効数	597	ドイツ	49	答えたくない	14	20代	121	2D マンガ	12
		英国	37	トランス女性	1	30代	255	2D 絵画	138
		台湾	33	パンバイナリー	11	40代	118	2D 写真	149
		フランス	30	グループ	10	50代	66	2D 日本画・浮世絵	6
		スペイン	19	反ジェンダー	1	60代	27	2D 版画	44
		インドネシア	18		597	70代	4	3D インスタレーション	303
		オランダ	18			80代	1	3D 彫刻	136
		ポーランド	17			90歳以上	2	クラフト 手芸	50
		ロシア	17			不明	1	クラフト 伝統工芸・民芸	25
		オーストラリア	14				597	クラフト 陶芸・漆芸	29
		オーストリア	12					デザイン グラフィックデザイン	44
		カナダ	12					デザイン ファッション・テキスタイル	29
		香港	11					デザイン プロダクトデザイン	20
		イタリア	10					デザイン 建築	41
		タイ	10					ビデオ アニメーション	45
		ブラジル	10					ビデオ ビデオ・映画	175
		韓国	9					その他 アートプロジェクト	214
		インド	8					その他 パフォーマンス	190
		南アフリカ	8					その他 メディアアート	148
		ベルギー	7					その他 ワークショップ	134
		メキシコ	7					その他 音楽	77
		ウクライナ	6					その他	153
		シンガポール	6						
		ボツワナ	6						
		アルゼンチン	5						
		スイス	5						
		フィリピン	5						
		スウェーデン	4						
		セルビア	4						
		トルコ	4						
		ニュージーランド	4						
		フィンランド	4						
		ベトナム	4						
		ウガンダ	3						
		エチオピア	3						
		コロンビア	3						
		チェコ	3						
		デンマーク	3						
		ブルガリア	3						
		日本	3						
		イスラエル	2						
		イラン	2						
		エストニア	2						
		ギリシャ	2						
		クロアチア	2						
		ジョージア	2						
		ナイジェリア	2						
		バングラデシュ	2						
		マカオ	2						
		ラトビア	2						
		リトアニア	2						
		アゼルバイジャン	1						
		エジプト	1						
		カザフスタン	1						
		カンボジア	1						
		ケニア	1						
		コートジボワール	1						
		コンゴ民主共和国	1						
		スロバキア	1						
		セネガル	1						
		チュニジア	1						
		ナリ	1						
		ニカラグア	1						
		モルウェー	1						
		パキスタン	1						
		パレスチナ	1						
		ハンガリー	1						
		ブルキナファソ	1						
		ペルー	1						
		ボツワナ	1						
		マケドニア	1						
		マルタ	1						
		マレーシア	1						
		ミャンマー	1						
		ミザンブーク	1						
		モンテネグロ	1						
		ルーマニア	1						
		ルワンダ	1						
		レバノン	1						
		不明	6						
			81						
			597						

2024年11月22日(金)実施 天馬船プロジェクトチーム「天馬船プロジェクト テスト航行」

1. 実施概要



本企画は千葉市内を流れる花見川で間伐材で作った小舟を流すことで周辺住民の河川への関心を高めたり、環境について考えるきっかけを作ったり、その準備や後片付けを通じて地域のコミュニティ形成の一助となるアートプロジェクトである。来年の本会期ではこの花見川に10,000艘の天馬船を流す予定。1艘1,000円でドネーションし、集まった資金を河川の環境整備に寄与できる取り組みに活用したいと考えている。

今回のテスト航行では天馬船の運搬、水流の確認、テストに使用した小舟の洗浄などを行い、本会期に向けてのチーム編成や、関係機関への許可取り、実施当日のイベントとしてのプランを検討。本プロジェクトが年齢や立場、国籍も超えて市民の多様性と連帯を表す文化活動となるよう、本会期中の計画立案につなげることを目的として実施した。

2. 開催概要

- プロジェクト名 : 天馬船プロジェクト テスト航行
アーティスト : 天馬船プロジェクトチーム
(本プロジェクトに特化したチーム)
開催日時 : 2024年11月22日(金) 9:00-13:00
会場 : 花見川(花見川区役所付近～浪花橋 約800m)
参加方法 : 告知なし→実施後、報告としてSNSに掲載
定員 : なし
参加メンバー : 天馬船プロジェクトチーム(ミズベリング小島様)
芸術祭メンバー他8名

●テスト航行のタイムテーブル

- 2024年11月22日(金)
- 09:00 花見川区役所駐車場集合
 - 09:30 天馬船に旗を付けて、3色のマーカーで番号を記載。
 - 10:30 スタート地点(河川の左右幅)を変えて天馬船を配置。
 - 10:39 先頭の天馬船が瑞穂橋の下を通過
 - 11:18 第1位がゴール(浪花橋)を通過
 - 11:45 全数回収(9艘ゴール後回収、10艘途中回収)
 - 11:50 瑞穂橋付近の水道で天馬船洗浄→天日干し
 - 12:30 昼食休憩
 - 13:30 振り返りミーティング



3. 事前準備物

●河川敷一時使用許可(文化振興課より申請) ●準備物: 天馬船:19艘、木箱:1箱、洗浄用スポンジ:30個、ハサミ:1本、雑巾:20枚、ゴミ袋:10枚、養生シート・テープ:各1個、ボールペン:5本、サインペン:5本、使い捨てプラスチック手袋100枚、台車:1台、運営計画詳細版:10枚、ビデオカメラ・三脚、ウェットティッシュ:1個、撮影者腕章:4枚 ※文房具以外はコミュニティセンターに保管	●雨の場合の候補日の選出(小島さんと確認) →12月7日(土)潮流が近い日 ●周りの環境確認、駐車場、トイレ、水道の場所 ●弁当・飲み物の手配
---	---



9時集合の打合せ

4. 当日の動き

9:30 旗つけ

天馬船を木箱から出して、養生テープで旗を作って、番号を書き、養生シート上に並べた。

*番号の色を3種類分けて、スタート地点を川幅の左側、真中と右側と変えて実験した。



10:00 川両岸の状況確認

スタート前の準備として、川沿いの階段と両岸のサイクリングロードの車通行可否を確認した。



10:30 航行スタート

当日10:30分満潮の時点で、航行開始。小島さんがカヤックからあらかじめ決めていた色ごとに天馬船を順次水面においた。

風の影響:なし、前日の雨の影響:なし



10:39 瑞穂橋通過

先頭の天馬船が瑞穂橋を通過した。



11:04 途中のカヤックと天馬船

*川沿いの撮影スポットが少なく、散歩道から写真撮影。



ゴール近くにある、水面に突き出した止水塔の柱の影響で複数の天馬船が止まってしまった。(来年はこの場所にかヤック等での対応が必要であることを確認)



飛び出した建築物の柱

11:18 ゴール到着

先頭为天馬船がゴールに到着。

11:45まで合計9艘为天馬船がゴールに着いた。



11:45ー12:30回収、洗浄

ゴールした船以外にゴールに到達できなかった10艘を回収。瑞穂橋付近の水道で洗浄した。



洗浄準備



◎現場環境報告

- ・当日の水の流れ:浪花橋に向かう左側の水流が弱い。
- ・天馬船はスタートすると段々右側に寄ってくる傾向が強い。
- ・スタート地点が同じのラインであれば、左右幅を変えてもゴールまでの通過時間はほぼ変わらない。

◎観客の立ち位置

スタート(瑞穂橋):歩道、車道が分かれているため、観客や参加者の立つ場所には余裕がある。
 ゴール(浪花橋):全体的に狭いので観客が船に夢中になると、車や自転車とぶつかる可能性がある。
 (本会期では通行誘導スタッフの配置が必要。)
 河川の両岸:サイクリングロードなので歩行者と自転車のみ

◎中継スポットの検討(本会期では中継を予定)

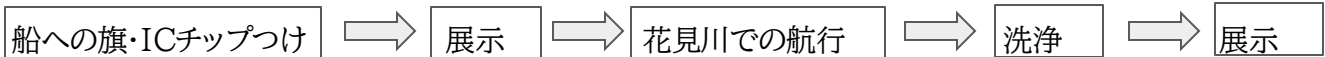
- ・河川に面した建物である保健福祉センターからはスタートの瑞穂橋や水面との距離が離れているため利用は難しい。
- ・川沿いに水面そばまで降りられるいくつかの釣りスポットがあり、そちらのスペースを活かして、中継、撮影に利用したい。(テントを張るなど)



瑞穂橋の歩道と車道

6. 検討中課題

【天馬船基本構想】8,9月頃から旗付けを開始したい



●事前準備

- ・ドネーション申し込みフォームは「東京ビエンナーレ」を契機に制作したECサイトを再利用
- ・ドネーションの企業協賛を営業
- ・ボランティアの募集(事前の旗付けや展示は3箇所ほどの拠点が必要)
- [事前]①旗/ICチップ付け②展示
- [実施]③運搬④当日運営⑤交通誘導⑥洗浄→30人程度
- [事後]⑦展示
- ・ボランティアが作業可能な会場、倉庫、天馬船展示会場の確保

●航行

- ・2tトラック両河岸のサイクリングロードに駐車し、船をネットなどに入れて河岸まで降ろし、カヤックに載せて水面に放つ。
- ・スタート付近ではセーフティーネットを両岸から張り、竹竿などで結界を作る→両岸の2tトラックに固定する
- ※この竹竿の結界とセーフティーネットはゴールでも再利用するので船が出発したら、ゴール付近へ2tトラックに乗せて運ぶ
- ・センサーの吊り下げ方法(スタート:瑞穂橋の欄干から吊り下げて水面から30cm離れた場所/ゴール:浪花橋)
- ※スタートとゴールでセンサーを設置すると、カヤックが通れない可能性があるため、方法を検討。
- ・スタート前、途中、ゴール後の回収によって川をエリア分けし、カヤックを担当分けすることを検討。航行中に障害物で動けなくなった天馬船を回収するか、カヤックなどで軌道修正し、引き続き航行させるかなど。
- ・ゴール後の船をカヤックで回収し、JR高架下のスペースに一時保管→台車に乗せて浪花橋を渡り、橋付近の水色の公衆トイレの水道を1台使用させて頂き、分岐してケルヒャー2台で洗浄(旗も水圧で外れる)雑巾でふき、木箱へ収納→2tトラックへ運搬

●撮影

- ・水面と歩道の高さの差や距離があり、旗に書いてある内容がほぼ見えないという現実。
- ・中継や動画配信がないと参加者の当事者意識が呼びかけるのは難しいが、電波状況やカメラ技術など協力が必要
- ・実況中継の場所候補→釣りスポットなどの水辺でテントを設置する。(現場で利用可能な面積を測る必要あり)
- ・撮影ポイントとして水面に突き出した止水塔を使用できないか？

●関連イベント

- ・観客の駐車場が不足している問題について(航行コースも含め、花島公園を検討)
- ・航行スタート時に現場を盛り上げるため、ファンファーレなど吹奏楽部と協力する？(小島さん)
- ・スターターの選定(芸術祭実行委員長、近隣の学校保育園のこどもなど)
- ・タイムレース結果発表(13:00頃)とトークイベント→千本桜緑地内東屋付近でパネル展示や簡易ステージを作る ※水辺の専門家などに語っていただく
- ・キッチンカーは小島さんにつてがあるので依頼していただく。
- ・航行前展示の会場について選定→交渉(会期)候補/花見川区役所
- ・航行後展示の会場について選定→交渉(会期)

●開催予定日(候補)

- ・2025年10月12日(日)、13日(月)、11月9日(日)、23日(日)24日(月)のいずれか1日。潮流との関係と、寒さなど考慮すると10月か11月早めの開催の方がいいか、小島さんよりアドバイスあり。継続検討する。



テスト航行では、荷物を区役所の駐車場から水辺まで移動した。



中継候補スペース



瑞穂橋から河口に向かう風景



以前の天馬船展示

7. 交渉及び許可取り

●地域連携交渉

- ・町会、UR、商店街振興組合へのご挨拶回り
- ・近隣住民に告知するためのポスティング(ボランティア募集・タイムレース開催時)
- ・ボランティア募集の協力(準備段階のボランティア、現場のボランティア、セキュリティ誘導)
- ・事前準備のための会場選定→申請
- ・近隣の小学校・幼稚園・保育園の子ども達には無料で自分の船を用意したい→そのためのスポンサー
- ・一番近い瑞穂小学校では「川の話」など出来るといい(中村D)

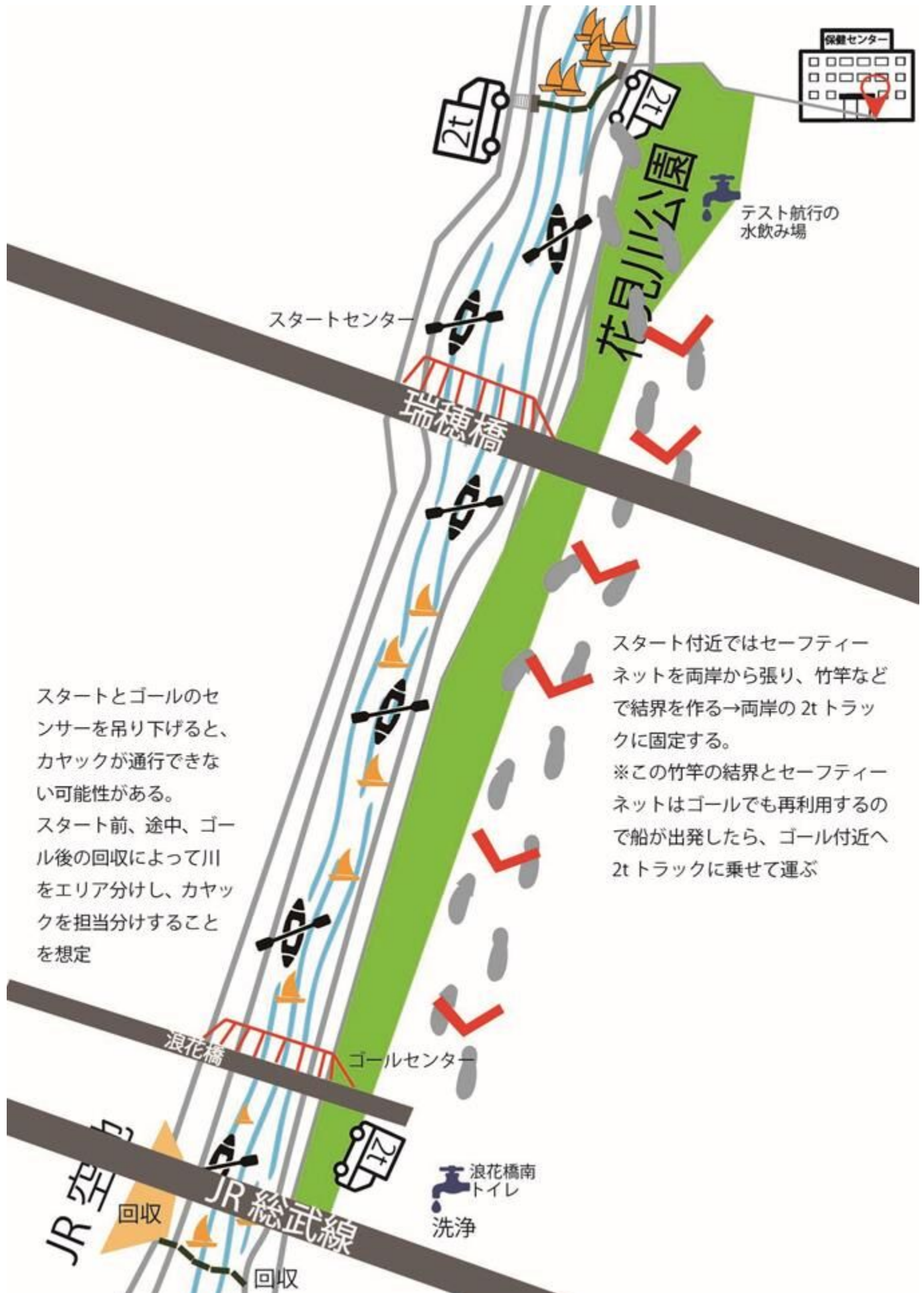
●天馬船の航行に関する許可

- ・花見川区役所付近～浪花橋の河川敷一時利用願い
- ・千葉県占用許可申請及び減免申請
- ・瑞穂橋と浪花橋の橋脚にセンサーを取り付けるための申請
- ・花見川両脇で2tトラックをサイクリングロードに通行許可(道路使用)
- ・水面に突き出した止水塔を水面の撮影に使用できるよう解放申請
- ・水辺の護岸(釣りスポット)で中継ポイントとしてテントを設置する許可
- ・JR高架下のスペースの使用許可(天馬船を回収した後一時保管場所として利用する)
- ・浪花橋付近の水色トイレ洗面台水道の使用許可(高圧洗浄機とつなげて、船の洗浄に使う)
- ・中継車、関係者車両が区役所駐車場に駐める許可

●関連イベントに関する許可

- ・千本桜緑地の使用申請
- ・芝生でレース結果発表、トークイベントを実施するため、ステージの設置許可
- ・キッチンカーの出店許可(キッチンカー経営者側から書類の準備が必要)

全体図面(案)



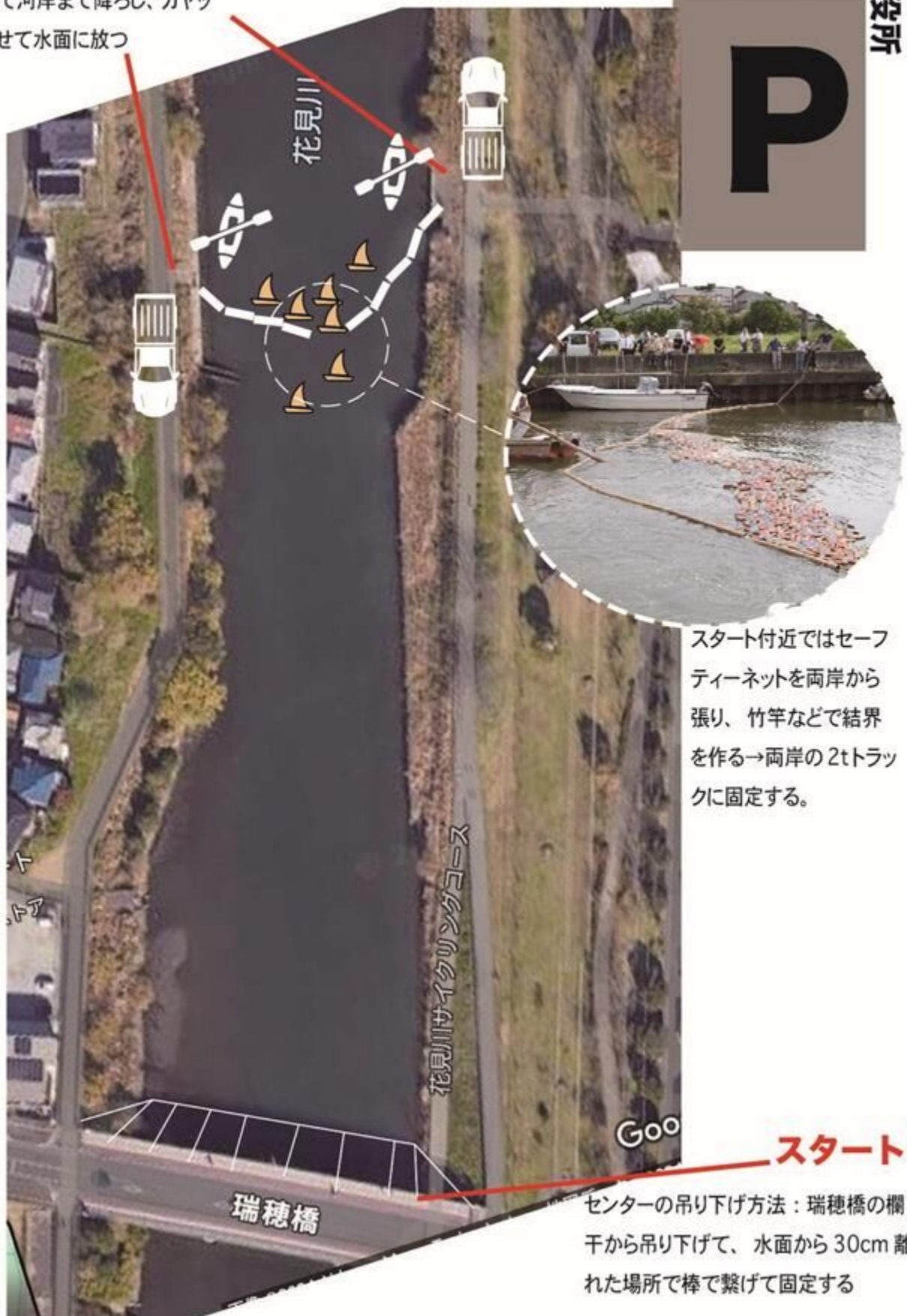
スタート図面(案)

2tトラック両河岸のサイクリング
ロードに駐車し、船をネットなど
に入れて河岸まで降ろし、カヤッ
クに載せて水面に放つ

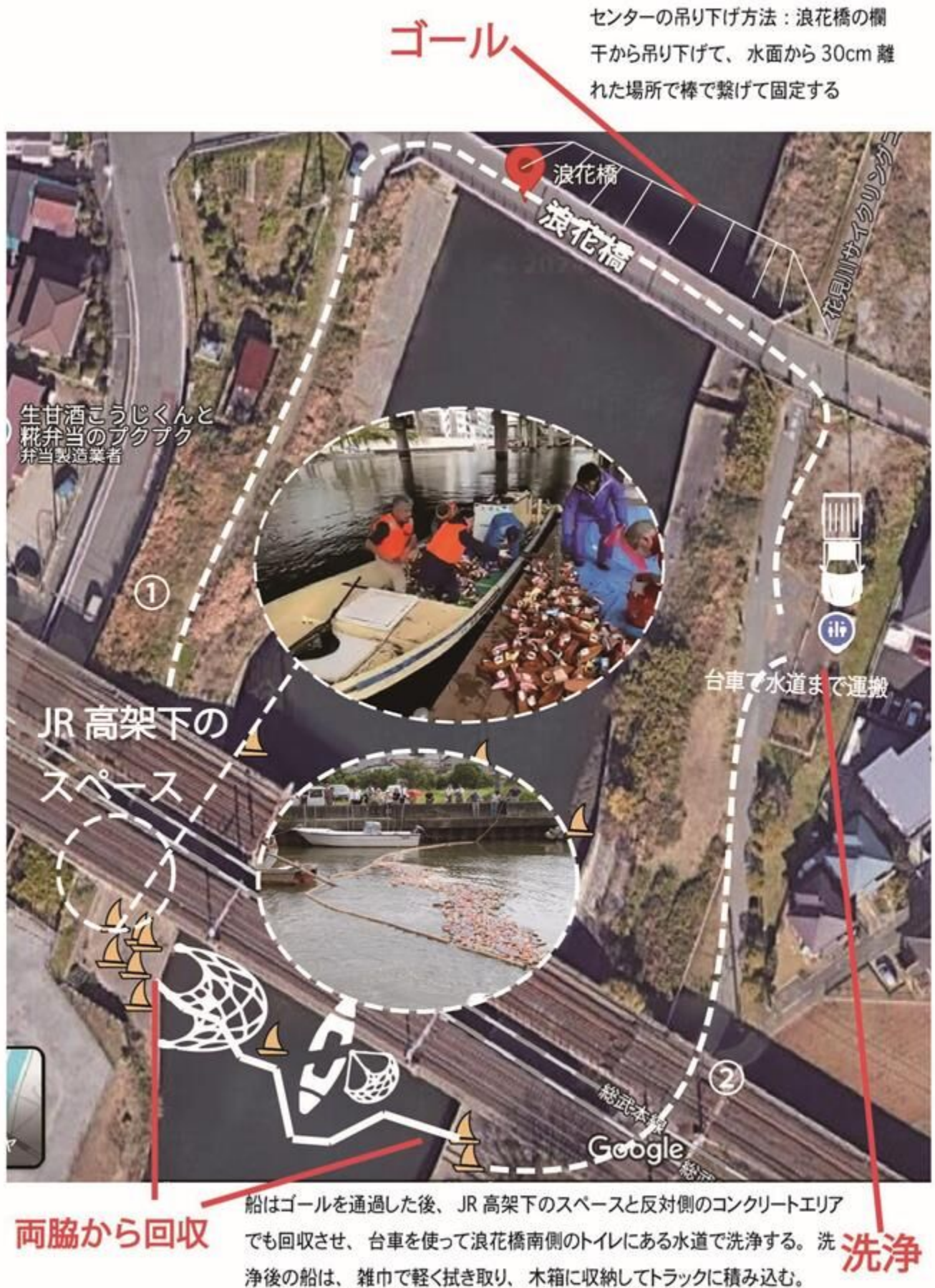
保健センター

区役所

P



ゴール図面(案)



2024年3月30日-31日 うみさとテラス花見川 千本桜緑地



2024年11月9日 花見川リバーサイドフェス2024 花島公園(ミズベリング花見川主催)



2024年12月23日(月)実施 「こども病院に芸術祭がやってくる！ 病院でアートプロジェクトをするためのプレ・ワークショップ」

1. 実施概要



千葉国際芸術祭2025のプレ企画として、千葉市緑区に所在する千葉県こども病院でワークショップを実施した。

「千葉県こども病院」には長期入院の子どもが多く入院しており、患者のみならず、不安な気持ちを抱えているご両親や兄弟、さらに日々忙しく働く医師や看護師など、この空間にいるすべての人々が少しでも元気になり、心が和らぐようなアートプロジェクトの提案を目指している。

今回はその準備段階として、患者さんを対象とする前に、まず病院スタッフを対象にリサーチも兼ねたコミュニケーションを図った。

編み物や縫い物といったクリエイティブな体験と対話を通じて、スタッフの現状や思いを聞き出し、今後のワークショップの方向性を探るためのイントロダクションとして位置付けた。

●参加人数:7名(定員10名)

2. 開催概要

プロジェクト名 :こども病院に芸術祭がやってくる！病院でアートプロジェクトをするためのプレ・ワークショップ
アートとの関わり「おともといっしょ」の提案
アーティスト :西原 珉(キュレーター) 奥野智萌(アーティスト)
開催日時 :2024年12月23日(月)16:00-17:30
会場 :千葉県こども病院内 第3会議室(千葉市緑区辺田町579-1)
参加対象 :患者向けだが第1回は病院関係者
参加費 :無料
参加方法 :病院内で取りまとめ

3. 講師紹介 西原 珉(キュレーター) 奥野智萌(アーティスト)



西原 珉

東京藝術大学美術学部卒業。キュレーター/心理療法士。1990年代の現代美術シーンで活動後に渡米し、ロサンゼルスでソーシャルワーカー兼臨床心理療法士として働く。家族療法、認知行動療法を中心に多くのアプローチを実施し、個人・グループに心理療法を行うほか、シニア施設、DVシェルターなどでコミュニティを基盤とするアートプロジェクトを実施。2018年に日本に戻り、アートとレジリエンスに関わる活動を行う。2021年4月より秋田公立美術大学で教鞭をとり、また国際美術展シリーズ「SPRING 2021」「SUMMER 2022」、展覧会「When we talk about us,」(2023)、国際芸術祭「東京ビエンナーレ2023」を手掛ける。現在、秋田市文化創造館館長、東京藝術大学先端芸術表現科准教授。



奥野 智萌

1998年京都府生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻先端芸術表現研究領域在学中。
漫画や銅版画といった小作品の制作を通して、創造性によって経験を作品へ変換することを試みている。

4. 当日の動き

15:00 千葉県こども病院内第3会議室集合

簡単なスタッフ自己紹介の後、会場設営を開始。

西原さん、奥野さんと相談しながら場所の設営。テーブルは想定より台数があったので正方形に近い形を作り、真ん中に奥野さん手作りのぬいぐるみやパペットを置いて心温まる雰囲気。



16:00 プロジェクトスタート

こども病院のスタッフの皆さんが入室。講師の西原さんより今回のプロジェクトについて簡単に説明。文化振興課より千葉国際芸術祭について話してもらった後、パペットを使いながら参加者全員が自己紹介。



奥野さんよりゆびあみで虹を編む説明。好きな色の毛糸を選び、ゆびあみスタート。ゆびあみが初めての人がほとんどの状況ではあったが、ざっくばらんに話をしながら和やかな雰囲気を楽しみながら実施。



途中院長先生や、先生、事務局の方も顔を出してください、皆さんにもパペットを使って自己紹介や今日のできごとなど好きな話をしてもらった。楽しくリラックスした雰囲気でそれぞれのゆびあみが完成。みんなの作品を集めて奥野さんが虹づくりスタート。



17:10 今後のプロジェクトについて
アートとの関わり「おともといっしょ」について西原さんより説明。現場で働くスタッフの皆さんに今後のプロジェクトについての理解を深めていただくと共に、留意点(衛生、安全、精神的影響など)やこどもたちについての生の声をもらう。



17:30 一人ひとりが作ったゆびあみの作品を奥野さんが一つにつなげて虹の編み物が完成。



5. 記録写真



6.評価/所感

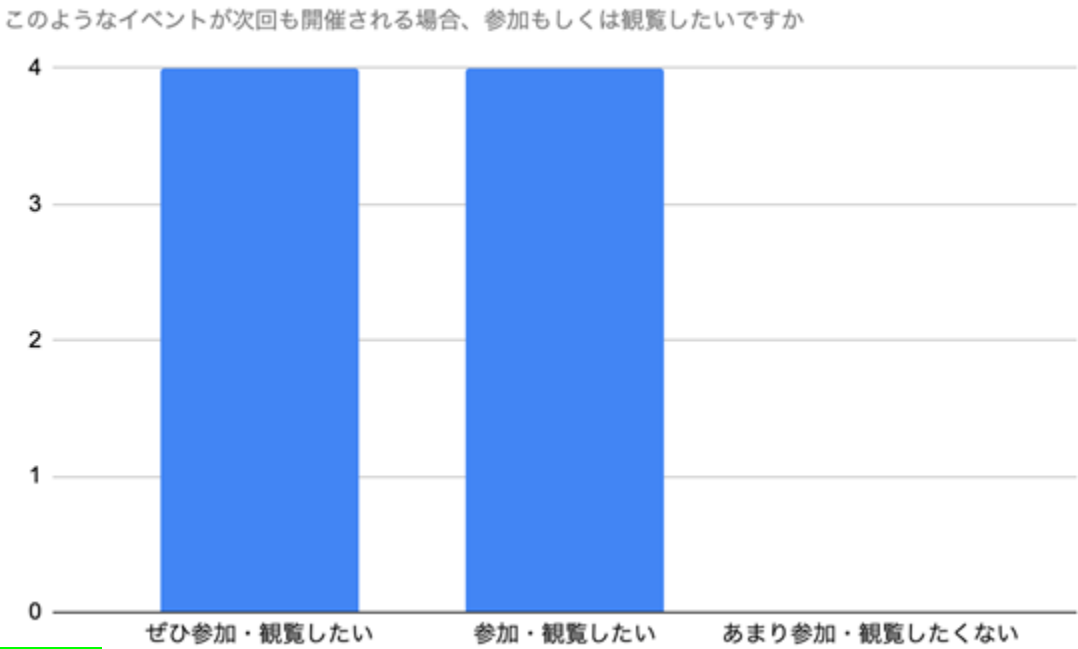
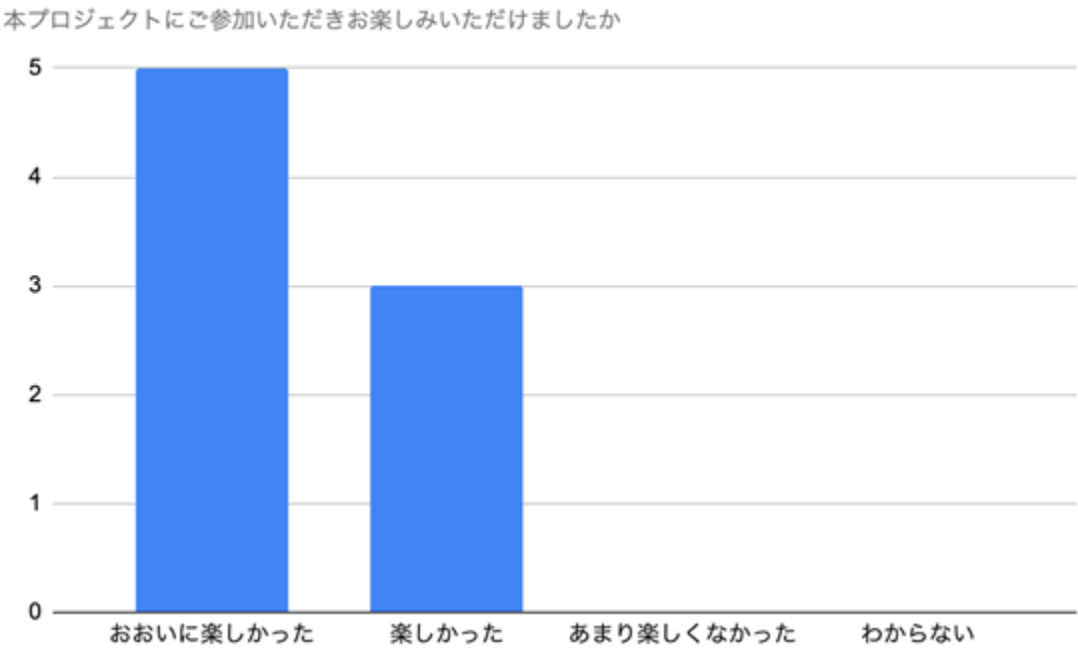
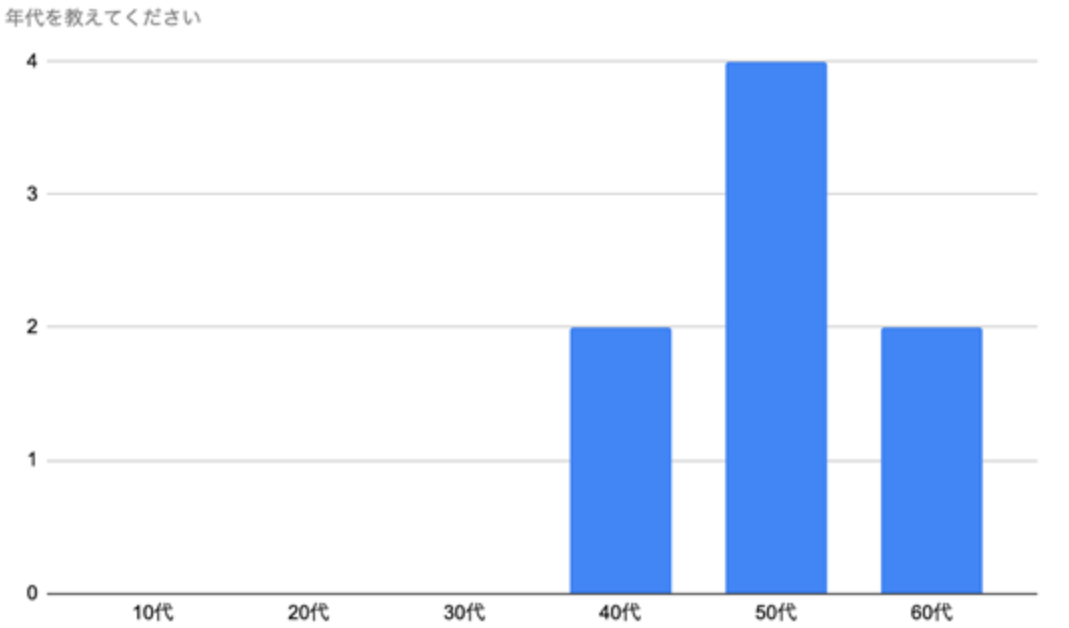
- ・西原さんと奥野さんの温かい人柄とパペットを使っでの自己紹介で一瞬にして参加者の心を掴んでいた。こども病院スタッフのリアルな声も聴き出せるワークショップだった。
- ・優しい素材である毛糸を使ってゆびで編むというワークショップは、そこに集まった人々の心をほっと和ませて、楽しい雰囲気の中で自由な発言が飛び交い楽しめたことでアートへの距離感が縮まった。
- ・参加者同士で教えあう場面が見受けられて、積極的に参加している様子が伺えた。
- ・西原さんの今後のプロジェクト「おともといっしょ」の実現のために、必要な情報がこども病院のスタッフの皆さんからかなり得られたように感じた。特にぬいぐるみの素材については実際にいろんなこども達に関わっているスタッフだからこその多くの意見が出た。
- ・参加した病院スタッフの方々からとっても楽しかった、毛糸に触れるのが久しぶりだったけどこのような機会が得られてこれからもこういう活動に参加したいという前向きな声を聞くことができた。

今回のプロジェクトには文化振興課の方々も参加され、プチワークショップと千葉国際芸術祭の関係性が明確に提示された。他のプロジェクトと本会期との関係性を、どのようにより効果的に説明できるかを考える必要があると感じている。

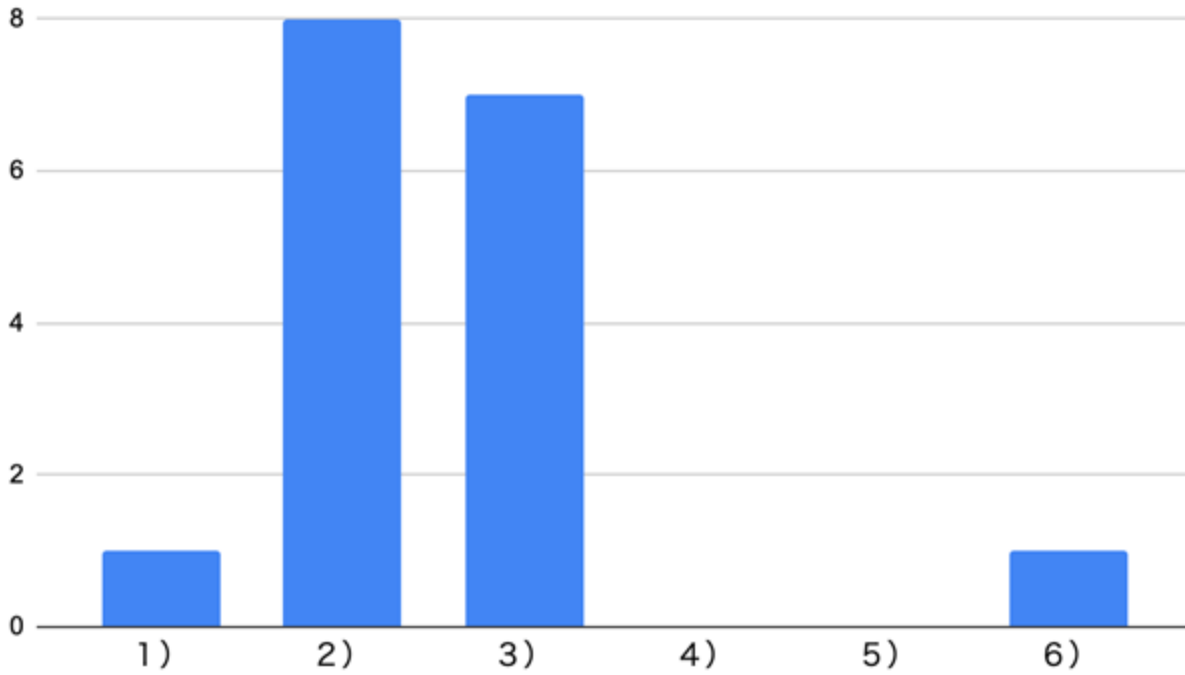
7.課題

本会期は同時進行で複数プロジェクトが進むため、本実施はマルチタスクを行う上での良い実践の場となった。実施した期間は冬のインフルエンザの流行が始まる季節であったため、メンバーの急な不在等、運営面でも支障がないようにチームビルディングや体制づくりの必要性を感じた。今後、本会期に向けて盤石な運営計画を組んでいきたい。





本プロジェクトにご参加いただき心境の変化はありましたか(複数回答可)



- 1) 普段と同じ場所が、新鮮に見えるようになった
- 2) 今後、来訪者(患者さんなど)への対応に活用できると思った
- 3) 職員間のコミュニケーション向上につながったと思った
- 4) 自分の私生活を充実できる機会になった
- 5) 特に心境の変化はない
- 6) その他

●設問

プロジェクトの今後の展開に期待することがございましたら記載してください。

※文章は原文のまま

- ・1時間程でしたが、話をしながら作品を作ったり、ワクワク楽しかったです。こども達にも経験させてあげたいです。
- ・子どもも、職員も楽しい時間が過ごせるような機会があるといいと思いました。病院外からの新しい刺激で、こどもや家族が安心して過ごせる時間が増えるといいと思います。
- ・患者さんときょうだい、家族がほっこりできる機会になるとよいと感じました。
- ・今日の話の中で、素材や時間、対象者など問題があるが、全部クリアにならなくても始めて欲しいと思いました。

その他、千葉国際芸術祭についてご意見がございましたらご記載ください。

※文章は原文のまま

- ・他の場所での企画も院内でお知らせできるとよいと思いました
- ・初めて知りました。もっと周知できるといいと思います。

2025年2月17日(月)実施 「こども病院に芸術祭がやってくる！ アートプロジェクトをするための準備運動 中村ディレクターワークショップ」

1. 実施概要



2024年12月に実施されたキュレーターである西原珉氏のワークショップに続き、中村総合ディレクターによるワークショップが千葉県こども病院で開かれた。前回の参加者とは異なり、様々な病院の部署の方々が集まり、こども病院様にとっても、普段交流することのない職員同士のコミュニケーションの場にもなったようだ。

参加者には事前に病院内の「よいところ、自慢したいところ、もう少し改善すればもっと良くなる」ところなどを3つの着眼点に分けて、各自でリサーチしておくという準備をご依頼した上で、参加いただいた。常にいのちと向き合うという緊張感を強いられる職場において、患者さまも職員の方々も気持ちよく過ごせる場を皆で考えるきっかけとなり、新たなコミュニティ形成の一助となることを目指した。

●参加人数:13名(定員10名)

2. 開催概要

プロジェクト名 :こども病院に芸術祭をやってくる！アートプロジェクトをするための準備運動 中村ディレクター ワークショップ
 講師 :総合ディレクター中村 政人
 開催日時 :2025年2月17日(月)16:00-17:30
 会場 :千葉県こども病院内 医師研修室(千葉市緑区辺田町579-1)
 参加対象 :病院関係者
 参加費 :無料
 参加方法 :病院内で取りまとめ

3. 講師紹介 中村 政人



中村 政人

1963年秋田県大館市生まれ。アーティスト。東京藝術大学絵画科教授。

東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻壁画修了。大韓民国弘益大学大学院西洋画科修士課程。

「アート×コミュニティ×産業」の新たな繋がりを生み出すアートプロジェクトを進める社会派アーティスト。「ヒミング」(富山県氷見市)、「ゼロダテ」(秋田県大館市)など、地域再生型のサステナブルアートプロジェクトを多数展開。2010～2023年、公設民営のアートセンター「アーツ千代田3331」(東京都千代田区)を運営。2021年から国際芸術祭「東京ビエンナーレ」を立ち上げ、千葉国際芸術祭2025の総合ディレクター。

4. 当日の動き

15:00 千葉県こども病院内医師研修室
芸術祭メンバー集合

芸術祭メンバーに簡単な当日の流れを確認した後、会場設営を開始。

中村ディレクターと相談しながら、長机で3つのグループを配置した会場の設営を行った。コンパクトなスペースであったため、メンバー同士の距離が近い分、一体感が生まれやすい環境となった。



16:00 プロジェクトスタート

こども病院のスタッフの皆さんが入室。中村ディレクターが挨拶した後、本日の主旨と流れを説明。



16:05 参加者自己紹介

参加者の皆さんが氏名と所属部署や職務を簡単に自己紹介。緊張感がややほぐれた印象に。



16:10 リサーチ内容取りまとめ

3つに分かれたチームごとに各自が事前にリサーチした内容を取りまとめた。芸術祭スタッフが1名ずつ司会と書記を兼ねた役割として配置され、話題を引き出したり、話をまとめた。内容を整理するため着眼点のポイントを3つ設定し(空間・機能・仕組み)、それぞれの項目に分類して検討。



16:30 グループごとに発表

各グループのスタッフそれぞれが事前に各自リサーチしたポイントをグループ内で話し、芸術祭メンバーがポストイットに書き留めていった。それをグループの代表1名が発表しながら、あらかじめ用意した拡大版院内マップに貼り付けていく。



16:45 全体で議論

意見が重なった場所や今まで気づかなかった新しい視点など、所属が違うスタッフが集まったからこそそのメリットが発揮された。初めは問題点や課題といったマイナスな点が出てきたが、議論が白熱してくると「患者さまや働く職員のために」という共通の目的に向かってより良くするには？という建設的な意見が目立ってくるようになった。



16:55 トピックを議論

今まで出てきた内容を参加者全体で検討し、その中でも優先度や実現性を考慮して、ある程度絞り込んでいった。



17:00 院内リサーチ

絞り込んだポイントについて、知らない人や新たな視点で確認する必要があるため、参加者全員でそのポイントを巡りながら、議論を深めた。



17:25 まとめ

現地視察も済ませ、改めて講師である中村ディレクターより今回のワークショップの総評と今後に向けた準備についてお話しさせていただいた。参加者からも一人一人感想を述べていただき、次につながる有意義な時間となった。



17:30 ワークショップ終了

日々の忙しい業務の中で時間を割いて参加して下さった病院スタッフの皆さまは、またすぐさまそれぞれの持ち場へと戻っていった。ひとときではあったが、所属を超えて、また芸術祭メンバーという第三者が入った状況でのこのワークショップが今後のこども病院の更なる活性化の一助となればと思う。



17:35 片付け

ワークショップで出てきたリサーチ内容のポストイットは貼り付けたままの状態でもた持ち帰ることとした。

17:50 振り返り

片付けが済んだ後、中村ディレクターを含む芸術祭メンバーで今回のワークショップの振り返りを行った。病院スタッフの熱い気持ちに触れ、アートの力でこの病院にどのようなリノベーションのきっかけを作ることが出来るのか、期待すると同時に責任の重さを実感した。



5. 参加者リサーチ内容

院内の改善ポイント着眼点

- ①**空間**: その空間を形成している視覚的、体験的情報。
環境的情報として院内外を対象。
- ②**機能**: その空間の利用目的に応じた設備やファシリティの持つ機能的効果。
サインなどの情報も含む。
- ③**仕組み**: 多様な院内のプログラムや管理システムを含むルールや仕組み。
患者さま側からの利用者目線、医師や病院スタッフからの目線。

6. 記録写真



7. 評価/所感

- ・病院という職場は複数の所属のメンバー（専門職）が意見を出し合って、協力し合いながら業務にあたるというのが日常的に行われている場であるため、今回もスムーズにそしてフランクに議論できるワークショップとなった。
- ・日頃働いている方は当たり前になってしまっている風景も、見る人が変わったり、視点が違えば「宝の山」であることに気づくことが出来たと言われた時はこのワークショップを行って良かったと思える瞬間であった。
- ・初めは病院の施設や仕組みへの足りていないところを挙げている方が多かったが、中盤からは患者さまや来院者の気持ちに寄り添うための施策のアイデア出しへと変化していったのは印象的だった。
- ・今回集まった病院スタッフはさまざまな職種の方だったことが良かったと思う。同じ病院内でも全く関わりのない方同士が、今回のワークショップをきっかけに新たなコミュニティが生まれた。これが継続して自律していくことが目的である。
- ・「こども病院というのは普通の病院とは全く違う事情を抱えている」という話を医師から聞いた時は、だからこそアートの力が役に立てるのでは？と感じた。（こども病院でアートプロジェクトを実施する意義）
- ・今回は講師である中村ディレクターの他に、本芸術祭の招聘作家の1人であるアーティストの前島悠太さんにも参加していただいた。彼は現役美大生であるが、今日のワークショップに参加することで病院への理解度を深めて、本会期でのプロジェクトに反映して貰う事を期待している。

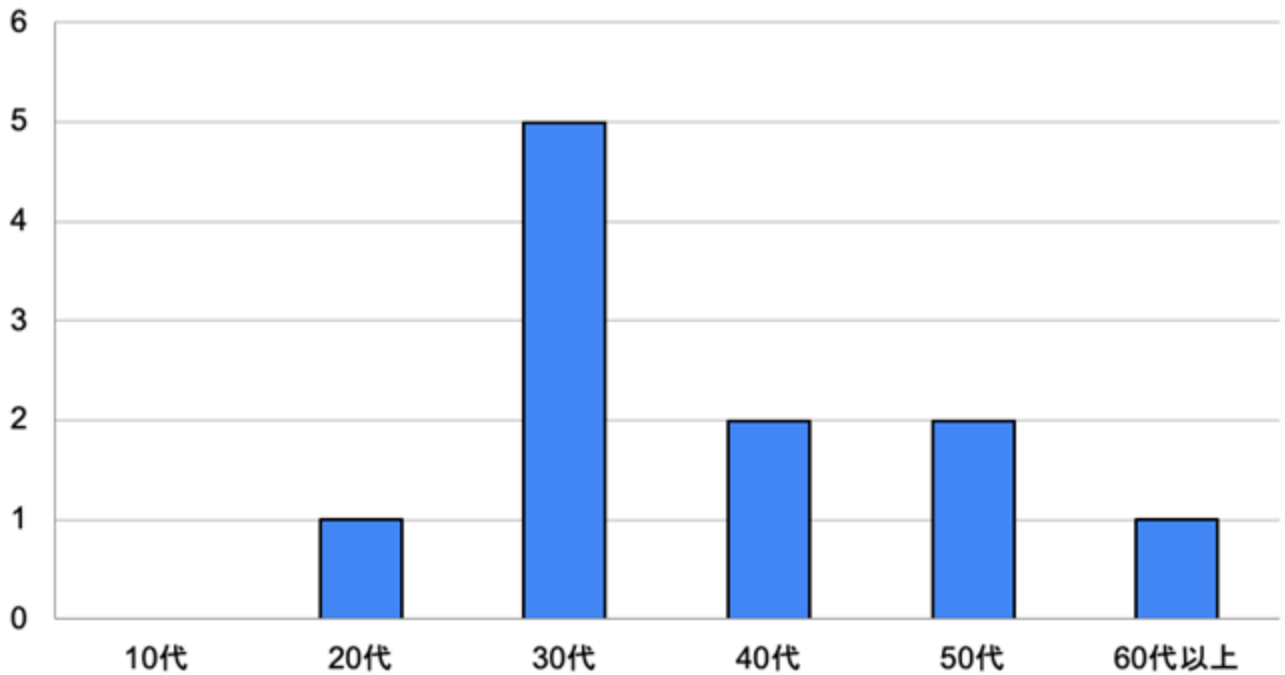
8. 課題

- ・多くのリサーチ結果が集まったが、今後病院側のご都合もお聞きしながら、本会期に向けてどのようなアートプロジェクトを計画し、それに相応しいアーティストをジョインさせるか、病院側と対話しながら丁寧に対応しながら進めていくことが大切である。
- ・芸術祭のアートプロジェクトが開催されている時だけでなく、その後も動きが継続していくことが理想であり、そのように働きかけていくことを最終目的としたい。

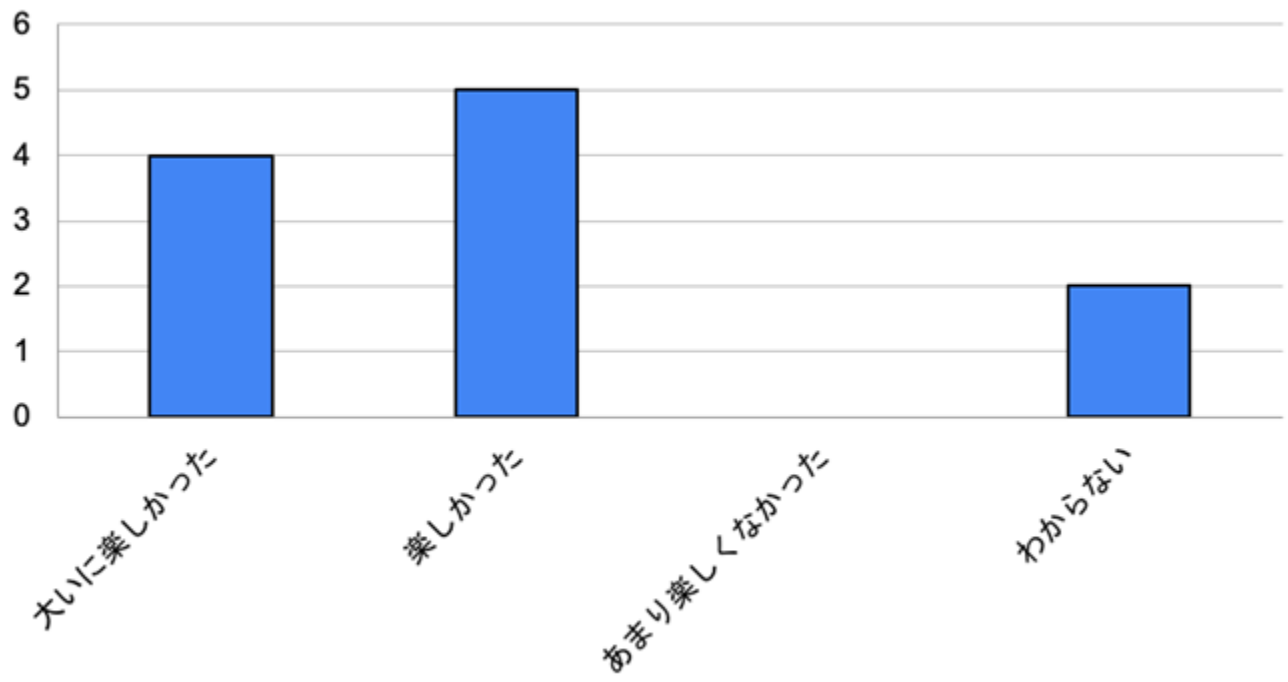


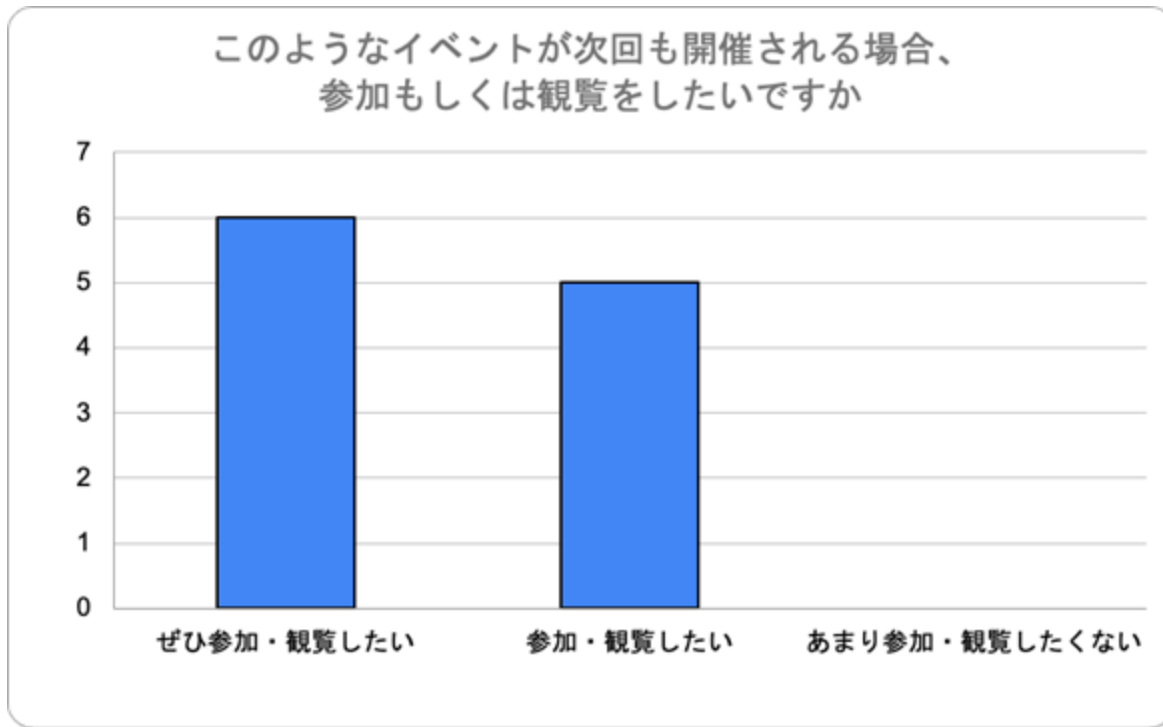
9. アンケート*取得数11

年代を教えてください

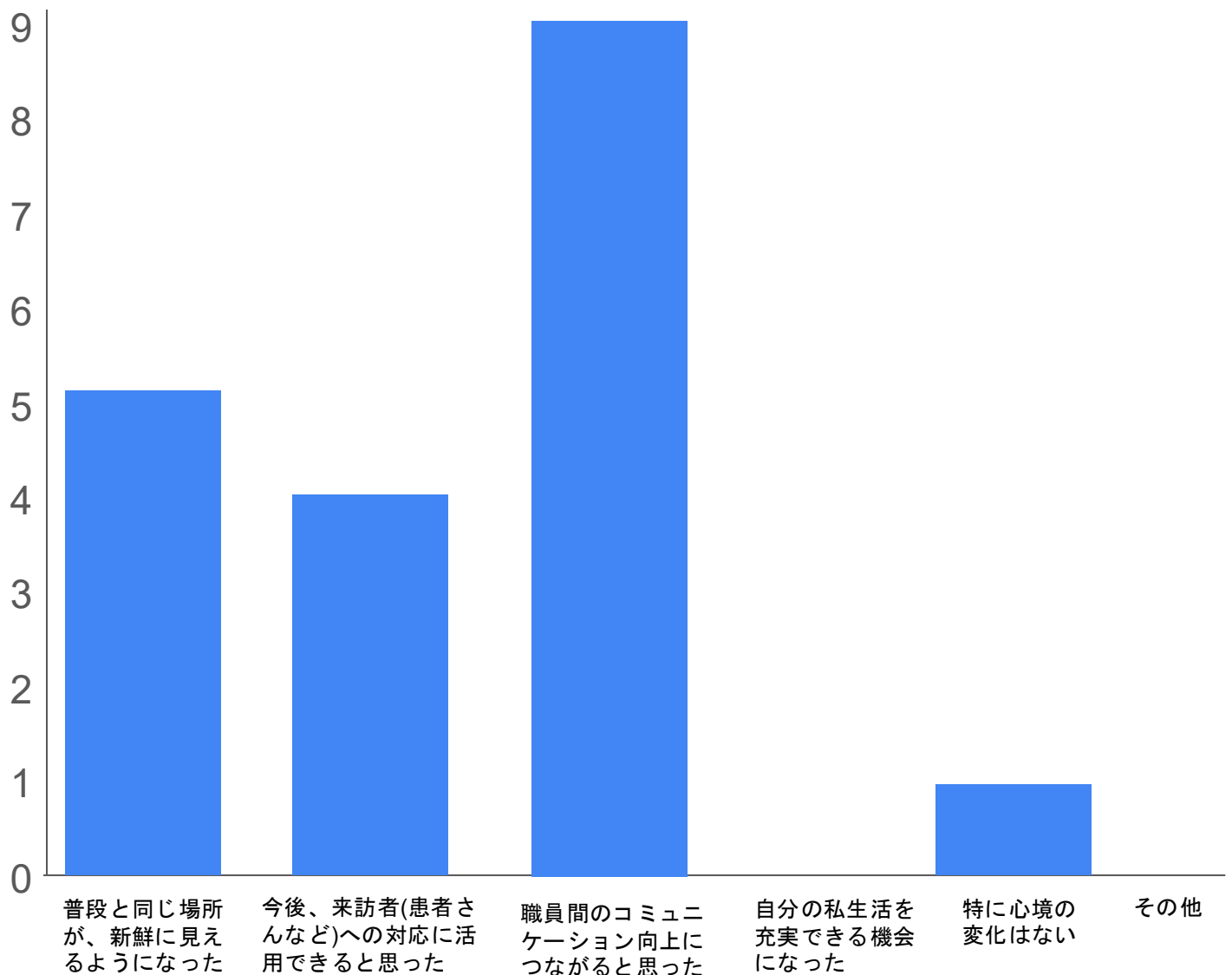


本プロジェクトに参加し、お楽しみいただきましたか





本プロジェクトにご参加いただき、心境の変化はありましたか(複数回答可)



●設問

プロジェクトの今後の展開に期待することがございましたら記載してください※文章は原文のママ

- ・現状の工夫と、変化がわかると、職員の日頃の努力など伝わるかと思います。
- ・会期後も古びずに存続できるようなものが良いと思いました。
- ・改めて新たな視点で院内を回る事で色々な発見がありました。
- ・普段語ることのない方達と、フランクに話せる機会が楽しかったです。新発見いろいろ！
- ・知り合いが増えると嬉しいと思いました。
- ・次回もっと具体的にプランが進んでいったら良いと思う
- ・イメージがつくようになると、もっとワクワクするかも…

その他、千葉国際芸術祭についてご意見がございましたらご記載ください。※文章は原文のママ

- ・せっかく話し合いの場を設けているので、何かしたプラスの結果に繋がれば良いと思う
- ・楽しんでいます

2025年2月1日(土)～3月1日(土)実施
まちばのまちばり ワークショップ「〇〇の人」(全5回 + 1回)
会場:西千葉工作室

2025年3月8日(土)～12日(水)実施
西尾美也「まちばのまちばり」中間成果展 ぞろぞろ、〇〇の人たち
会場:ZOZOSTUDIO

1.実施概要

本芸術祭のプレ企画として美術家 西尾美也氏が行うアートプロジェクト「まちばのまちばり」において「〇〇の人」と題した全5回(+1回)からなるワークショップとその成果展示を実施した。

本会期で西尾氏は、次の作品プランを構想している。

①古着という資材を公園の木々にストックするインスタレーション

②そのインスタレーションのそばにミシン工房を設置

③ワークショップの参加を重ねてテラーに認定された市民が ①古着を素材に②工房で創作に励む

④巨大な陳列棚を出現させテラーの作品を陳列する

今回のワークショップはこのプランに基づき、重要な役割を担うテラー集団を育成するためのワークショップとして全5回(+1回)、各回異なるテーマで服作りのワークショップを実施した。

展覧会では、各回の参加者がワークショップで制作した服などを展示した。

2.開催概要

ワークショップ

タイトル	〇〇の人
日時	第1回 2025年2月1日(土)13:00～16:00 第2回 2025年2月2日(日)11:00～16:00 第3回 2025年2月9日(日)13:00～16:00 第4回 2025年2月15日(土)13:00～16:00 第5回 2025年2月16日(日)13:00～16:00 第6回 2025年3月1日(土)13:00～16:00(追加で実施)
会場	西千葉工作室(千葉市稲毛区緑町2-16-3 萩原ビル1階)
対象	小学3年生以上～大人
参加費	無料
募集人数	各回10名
協力	株式会社マイキー／株式会社ZOZO

展覧会

タイトル	西尾美也「まちばのまちばり」中間成果展 ぞろぞろ、〇〇の人たち
日時	2025年3月8日(土)～3月12日(水) 10:00～18:00
場所	ZOZOSTUDIO(千葉市稲毛区緑町1-16-6)
入場料	無料
協力	株式会社マイキー／株式会社ZOZO

3. アーティスト及び実施体制

講師・アーティスト



Photo by Natsumi Kinugasa

西尾美也
1982年、奈良県生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)などを経て、装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロジェクトを国内外で展開。
「六本木アートナイト2014」ではテーマプロジェクトを手がけ、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館の3ヶ所で古着を再利用した大規模な作品を発表した。ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」を手がける。

プロジェクトディレクター	西山芽衣
プロジェクトマネージャー	両見英世
プロジェクトコーディネーター	永嶋千春
ファシリテーター	井藤優子／名取澄恵／牧野博美／水野麗
協力(古着提供)	株式会社ZOZO／ひみつのおしゃれ工房
協力(会場提供)	株式会社マイキー(WS)／株式会社ZOZO(展覧会)
撮影	ただ(ゆかい)第3回／第5回／各回の作品 池ノ谷侑花(ゆかい)展覧会会場

4. ワークショップ:〇〇の人

第1回「引き算の人／パッチワークの人」

日時:2月1日(土)13:00～16:00 参加者数:10名



服の一部をハサミで切り取る「引き算」と、異なる布をつなぎ合わせる「パッチワーク」の技法を用いたワークショップを実施した。「引き算の人」では、裁縫経験のない参加者でも、既存の古着にハサミを入れることで服の作り手になれることを示した。「パッチワークの人」では、「引き算の人」で切り取られた布を再利用し、直線縫いを学ぶ服作りの基礎として位置づけた。

参加者の声

- 普段、服を作るときは完成に向けて積み上げていくことが多いのですが、今回は削ることで生まれる形や可能性を楽しみました。
- 最初はハサミを入れることにはためらいがありましたが、一度入れると迷いが消え、自由な気持ちで扱えるようになりました。服を切ると後戻りはできませんが、切った布を他の布でつなぐ方法があると気づき、新しい発想で服作りを楽しめるようになりました。



第2回「ちばしの人」

日時:2月2日(日)11:00~16:00
3名)

参加者数:7名(欠席



「ちばしの人」は、まち歩きを通じて街の形を発見し、それを服に落とし込んでいった。参加者は西尾氏の指示のもと、まち歩きをしながら気になる形を次々に撮影していった。まち歩きの後、撮影した写真を見返し、特に印象に残った形を10点に絞り込んだ。これらの写真を参加者同士で共有することで、同じ場所を歩いたはずなのに、視点の多様さが浮かび上がった。選んだ形は、アップリケやシルクスクリーン印刷、アイロンシート転写などの技法を用いて服に表現された。偶然の発見から生まれた形が個性的なデザインへと変化し、街の記憶が一着一着に刻まれていった。

参加者の声

- いつも歩いている場所にも、上を見たり下を見たりすることで、意外な形があることに気づいて驚いた。
- みんなで歩いていて、誰かが立ち止まると「なんだなんだ」と自然に集まって、発見を共有できたのが面白かった。
- 鋭角な看板やダイヤ型の模様など、日常の中にある面白い形に改めて目を向けるきっかけになった。



第3回「音の人」

日時:2月9日(日)13:00～16:00 参加者数:10名



「音の人」は、服を楽器のように捉え、音の仕掛けを取り入れた服づくりに挑戦した。西尾氏はスナップボタンやレジ袋など音の出る素材を例に、服が奏でる音を肯定的に捉える視点を提示した。参加者は鍵盤やそろばん、シーグラスなどを用いて、音の鳴る服を制作。素材の組み合わせや配置を工夫し、歩くたびに音が鳴るデザインを完成させた。最後は全員でその服を着て合奏し、音を楽しみながら発表を行った。

参加者の声

- 鳥をモチーフに、羽根に見立てたペットボトルキャップで音が鳴る仕掛けを制作。小学生が風船で遊んでくれたのが嬉しく、交流が生まれて良かったと感じた。
- 歩くたびに音が鳴る縁起のよい靴を目指し、おみくじの「ジャラジャラ」を使った。足元が最も音を鳴らしやすいという発見があった。
- ファスナーの配置を工夫して弦楽器のような動きを表現。演奏を想定していたが、実際は思ったより音が出ず、素材の特性にも気づかされた。



第4回「かさぶたの人」

日時:2月15日(土)13:00～16:00 参加者数:9名(欠席1名)



「かさぶたの人」では、切り取られた服をかさぶたのように再生することに挑戦した。参加者は過去のワークショップで「引き算」された服を選び、どのように再生するかを考え、西尾氏との面談を経て制作にとりかかった。西尾氏からは物語を込めることでデザインに必然性が生まれるという考え方が示され、参加者は自身の調理経験から水ぶくれのような膨らみや皮膚の再生の過程で生じるバグなど、独自のストーリーを服に反映させた。講評では、誰かが切り取ったものに新たな意味を加えるプロセスの醍醐味が共有され、どの作品も創発的なデザインとして生まれ変わった。さらに西尾氏は、切り取られた服が増えるたびに再生させることが全体の活動において重要だと位置づけた。

参加者の声

- やけどの経験をもとに、かさぶたや水ぶくれを表現した。水ぶくれはコサージュのようにし、背中にはギャザーを入れ皮膚のつっぱりにみえるような工夫をした。
- 元のカジュアルなデニムを、ウェディングドレスのようなふんわりした形に再生。白いフリルで傷跡を隠し、可憐な印象に仕上げた。
- 普段選ばない服をあえて選び、自分らしくない服を「修復」する過程で、結果的に自分らしさが表れたことが面白かった。



第5回「のりしろの人」

日時：2月16日(日)13:00～16:00 参加者数：10名



「のりしろの人」は、他者との関係性を生む「関わりしろ」を服に取り入れるワークショップである。のりしろとは本来、紙や布をつなぐ余白を指し、今回はその発想をデザインに応用した。参加者は家族や動物など身近な存在を思い浮かべ、互いに関わる仕掛けを服に加えた。手を上げると連動する二人用ジャケットや、5人で着る服などが制作され、他者の存在を前提とした服が完成した。制作の中で他者へのまなざしが生まれ、関係性を生むデザインが多数見られた。

参加者の声

- 蝶々を招き入れる服として、さまざまな花柄を使った。上だけを縫ってひらひらと揺れるように工夫し、動きのあるデザインにした。
- 弟と妹(5歳の双子)のために服をつくった。いつも着替えているときに袖に手を入れてくるので、スカートの裾にたくさんの袖をつけて弟や妹が手を入れられるようにした。
- 自分が制作した服で、人が仲よさそうに一緒に着ているのを見るのが楽しかった。自分にそういう感覚があるというのに驚いた。



5. 追加ワークショップについて

第6回「オーダーメイドの人」

日時:3月1日(土)13:00～16:00 参加者数:4名



追加のワークショップとして「オーダーメイドの人」を実施した。本ワークショップは、過去に4回以上参加した方のみが参加できる発展的なプログラムとして位置づけられている。参加者は、晴れて「まちまちテラー(まちばのまちばりの略称)」として認定され、西尾氏が本会期で展開するインスタレーションに参加することができる。あらかじめ自身の身近な取材対象者を設定し、インタビューシートに基づいて取材を実施。取材内容からイメージをスケッチし、西尾氏との面談を経て服づくりを行った。後日、制作した服を取材対象者に着用してもらい、各自で写真撮影を行ってワークショップを終えた。

参加者の声

- まちばりクラブというクラブ活動にしてほしい
- 我が家のダイニングテーブルは幼稚園のお弁当袋制作の嫁さんとボタン選びやビーズネックレス作り(後にスプリングホックのヒントになる)の孫の3人用の工房台になっていました。更にそれを見ていた女房が納戸に大量にしまい込んでいた40年前子供用に使った端切れ類を嫁さんに引継ぐ等、明らかに「まちばり効果」が出ています。

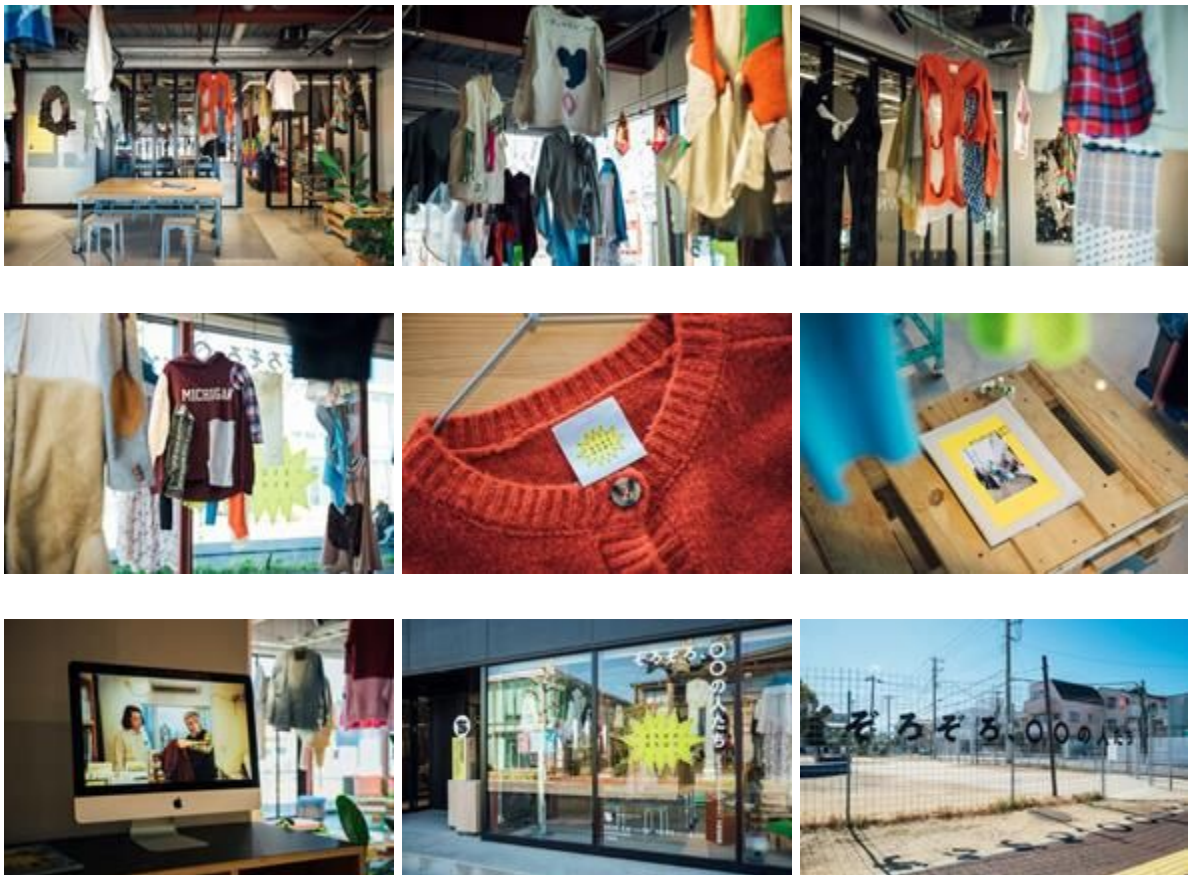


6. 展覧会：西尾美也「まちばのまちばり」中間成果展 ぞろぞろ、〇〇の人たち

日時：3月8日(土)～3月12日(水)10:00～18:00 来場者数：429名



のべ46名(ユニーク17名)が参加した全5回(+1回)のワークショップでは、計66点の作品が制作され、そのうち50点を展示した。会場は、株式会社ZOZOが運営するカフェ「ZOZOSTUDIO」を利用させていただいた。作品は天井に設置した吊元からゴム紐で吊るし、空間全体を活かした展示とした。この展示方法は、ZOZO社の担当者にも好評で、ZOZOSTUDIOにおける空間機能の新たな可能性として受け入れられた。キャプションの代わりに、各回のワークショップの意図や参加者の思いを記した記録集を制作し、店内の各席に設置。展示しきれなかった作品やワークショップ中の様子は、スライドショーにまとめディスプレイで上映した。



7. 広報・コミュニケーション

成果物



プロジェクトロゴ



展覧会チラシ



Webページ



インスタグラム

8. 実績

定量

古着点数	1400点以上 株式会社ZOZO ひみつのおしゃれ工房 など
ワークショップ応募者数	各回10名、キャンセル待ち5名 キャンセル待ちは5名で締め切った
ワークショップ参加者数	ユニーク17名(のべ50名) 各回ごとに10名、7名、10名、9名、10名、4名
展示来場者数	429名 各日ごとに71名、103名、103名、90名、62名
インスタグラム 2025年3月23日現在	投稿数:6 閲覧数:68264(1回目の投稿は取得できなかったため含まず) いいね:988
チラシ	2800枚
見学者数	1名
アンケート回収	ワークショップ17名(回収率100%) 展覧会103名(回収率25%)
インタビュー回数	46回(各回のワークショップ終了後に全参加者に対し、5分程度のインタビューを実施した)

定性(アンケート、参加者からの声、展覧会来場者の声より)

ワークショップ	創作への気づき・自信 自分がデザイナーになった気分だった 普段着ない服を選んだことで、新しい自分らしさに出会えた 普段適当に作っていたけど、今回はきっちり作ろうと思えた ▶評価軸：自己表現への楽しみ、創作へのポジティブな転換 素材・道具との出会い 初めてミシンを使って楽しかった ファスナーや金属音、ペットボトルキャップなど素材の可能性に気づいた 柔らかい生地は縫うのが難しかったけど、工夫して乗り越えた ▶評価軸：技術習得の実感 街を見る目の変化・発見 何気ない道の割れ目が面白い形に見えた トンボの飾りを見つけた 普段見てないだけで、街には面白い形がある ▶評価軸：身近な日常を捉え直す視点の変化 装うこと・関わることの拡張 服は1人で着るものだと思っていたけど、誰かと着るという発想に驚いた 自分の服を他の人が鳴らしてくれて嬉しかった 知らない人とつながれる服を作ってみたいと思った ▶評価軸：服を媒介としたコミュニケーションや共創の芽生え テーマ解釈の広がりや深まり かさぶたからウェディングドレスをイメージした のりしろをただの余白ではなく、人と繋がる部分として捉えた 介護や兄弟を迎えるといったパーソナルなテーマを作品に反映 ▶評価軸：抽象的なテーマの発展、個人の経験との統合 内省のプロセス 自分の発想が固かったと気づいた 他の参加者に着てもらえず寂しかったことで、他者の視点に気づいた 自分らしくない服を選んだことが、新しい自分につながった ▶評価軸：自己との対話や気づき
---------	--

展覧会	市外展開への期待 浦安でも展示をしてほしい ▶評価軸：他地域への波及可能性、文化的活動の広がり 記録集の郷土資料化 県立図書館の郷土資料としてぜひ送った方がよい ▶評価軸：文化的資源としての価値、公共知化の兆し 民間施設との接続と空間の拡張 吊元（展示物を吊るすための部材）を残せるなら活用したい ▶評価軸：空間の発展的活用と、民間企業との接続 コラボレーションと広がり ZOZOSTUDIOさんの企画で地元の焼き菓子屋naguさんとコラボした芸術祭クッキーを販売参加した人たち一人一人がクリエイティビティを通してつながり合える嬉しいのだと感じています ▶評価軸：地域経済との接続、芸術祭を媒介とした関係性の拡張 多世代が交わる場 子供の普段見れない一面を見れて、うれしくなりました 多世代交流の中で一人一人の表現を楽しみました。自由な発想への刺激を沢山ありがたく受けました！ 子供もとても楽しかったと喜んでいました。またぜひ開催お願いします 娘が興味を持ちそうなので本人が関わりたいと言ったら一緒に参加してみたい ▶評価軸：年齢を超えて学び合える場、家庭内での体験の共有 街にひらく芸術祭 近所でこのようなイベントが開催されて嬉しいです 普段自分が活動しているまちで芸術祭の空気が流れているのが新鮮でよかったです！このような取り組みがより広まれば良いなと思います 全くアイデアが浮かばない私にとって刺激的でしたこんなに楽しい気持ちになる時間は久しぶりです ▶評価軸：文化資源としての親しみ・誇り・発見の創出
------------	--

9. 総論

今年度、西尾氏によるアートプロジェクト「まちばのまちばり」は、全5回(+1回)のワークショップと展覧会を実施し、多世代・多様な背景を持つ市民と共に創造のプロセスを共にした。小学3年生から高齢者までが参加し、手芸や裁縫経験の有無にかかわらず誰もが参加できる寛容な文化的空間＝コミュニティが自然に形成されたことは、本事業の大きな成果のひとつである。

ワークショップでは「引き算」「パッチワーク」「まち」「音」「服の再生」「関わりしろ」など、西尾氏によるユニークな視点が示され、服を媒介にした創作活動が展開された。形にしていくプロセスを通じて、日常の風景や自身の体験、さらには人との関係性を捉え直すまなざしが育まれた。服という身体的かつ生活に根ざしたメディアを通じて、参加者は「服との関係性」だけでなく「人との関係性」への気づきを得ていった。

各回の制作プロセスでは、参加者の体験や状況がテーマの解釈や素材の選び方に反映され、自己表現への手応えや肯定感が醸成された。ワークショップ後のインタビューを通じて、内面の気づきや変化を言葉にしていく実践も重ねた。

また、ファシリテーターとして地域に暮らす手芸を得意とする市民の力を借りた点もプロジェクトにとって有意義だった。彼女たちの参加が、本プロジェクトが「まちに根ざした活動」を目指していくための説得力を高めていった。

さらに、株式会社ZOZOとの協働や、地元の焼き菓子店とのコラボレーションに見られるように、本プロジェクトは民間企業や地域の小商いとも緩やかにつながりながら展開された。アートプロジェクトや本芸術祭がまちの経済や人の営みと結びつくプロセスは、文化的活動が日常と交わり、共に育っていく可能性を示している。

展覧会では、制作された服や記録集を展示し、他者の目に触れることによって、新たな可能性を開いた。来場者からは「浦安でもやってほしい」「記録集を郷土資料として残したほうが良い」といった声も寄せられ、プロジェクトの外側へと波及する兆しも見え始めている。

10. 課題(来年度に向けて)

今年度の「まちばのまちばり」は、ワークショップと展覧会を通じて、多世代・多様な参加者が集い、服を媒介に創造的な交流を生み出した。一方で、来年度以降の展開に向けて、以下のような課題が浮かび上がっている。

今後さらに多様な市民が継続的に関われる仕組みづくりが求められる。たとえば、ワークショップの頻度や受け入れ体制を整えた上でより長期的なコミュニティ形成を視野に入れた設計が必要である。

次に、まちまちテラーのスタートに向けた体制づくりも重要な課題である。まちまちテラーが活動を継続・発展していけるようなサポート体制や開かれた場所などが求められる。また、単に名前で終わらないよう、地域からの実際の注文や担い手としての自負心が芽生えるための機会も必要だ。

加えて、公共空間との接続や実装に向けた調整も、今後の展開を左右する。西尾氏の構想にある「ジャングルジム市場(まちまちいちば)」など、屋外での展開を見据えた場合、安全性や管理体制、行政や利害関係者との協議といった多方面での連携が不可欠となる。実装におけるハードルを乗り越えるための計画と段階的なテスト、利害関係者との関係構築も検討課題といえる。

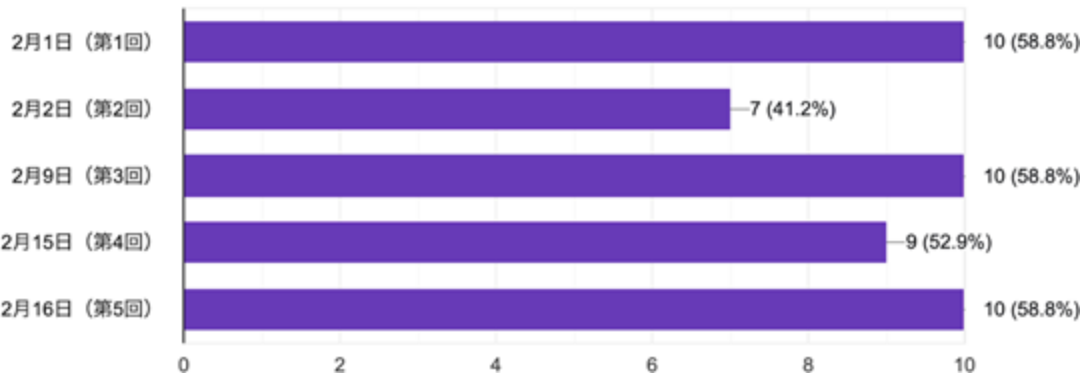
また、プロジェクトに関するアーカイブや、成果を社会的に共有・評価していく枠組みも必要になってくるかもしれない。丁寧にインタビューや記録を蓄積する実践は引き続き重要であり、それらを活かして、地域の方や事業者との連携を促す発信の工夫も求められる。

今年度に生まれた民間企業や商店とのつながりをさらに育てていくことは、文化的活動を一過性にしないための重要なポイントとなる。関係構築を継続し、活動の成果がまちに還元される仕組みづくりが重要だ。

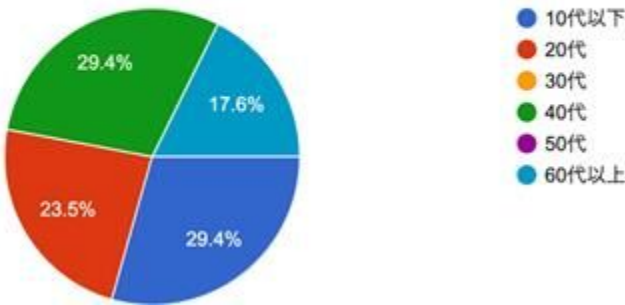
11. アンケート

ワークショップ：〇〇の人

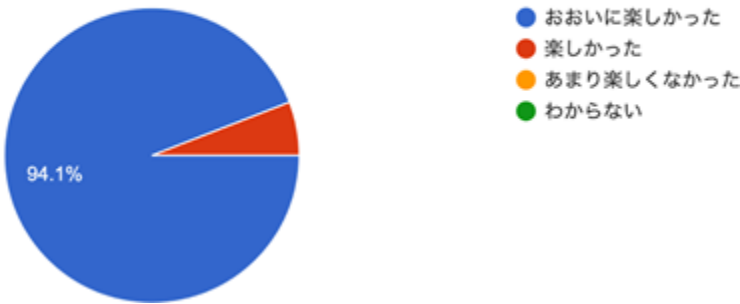
参加した日程を教えてください
17 件の回答



年代を教えてください
17 件の回答

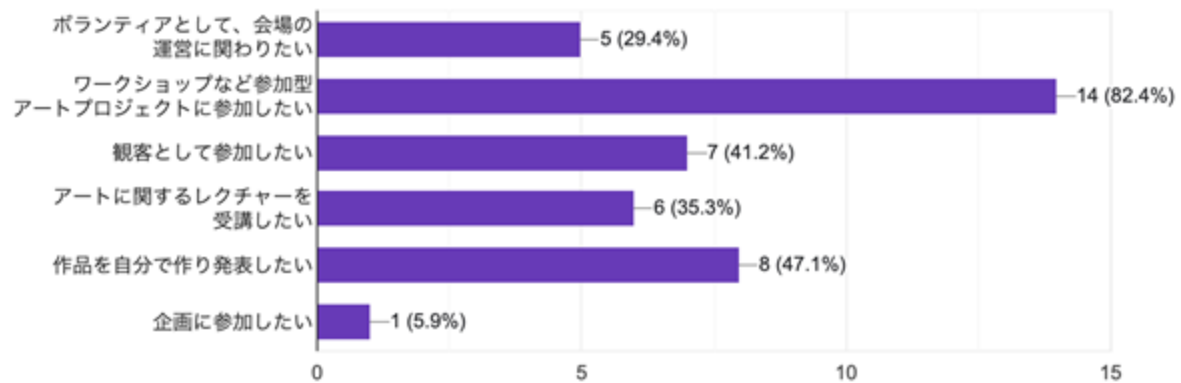


本ワークショップにご参加いただきお楽しみいただけましたか
17 件の回答



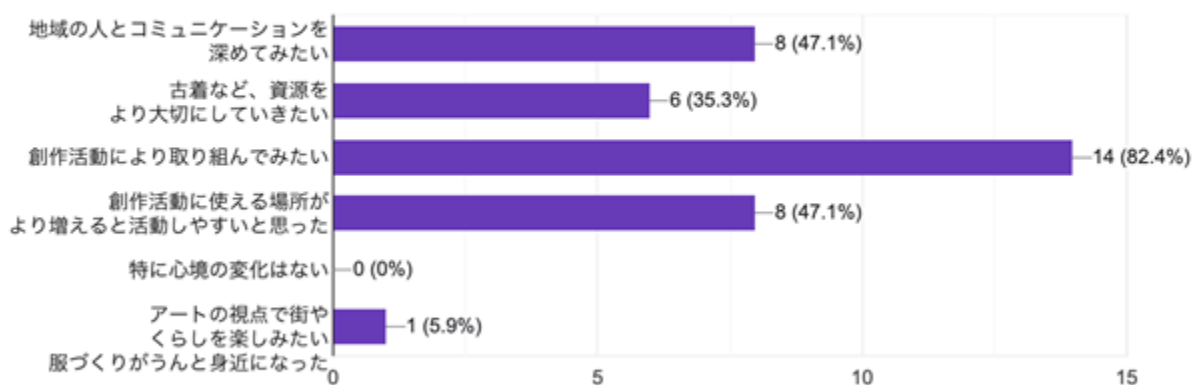
芸術祭にどのように参加してみたいですか（複数回答化）

17件の回答



ワークショップに参加して心境の変化はありましたか（複数回答可）

17件の回答



まちばのまちばりの活動に期待することがございましたら記載してください

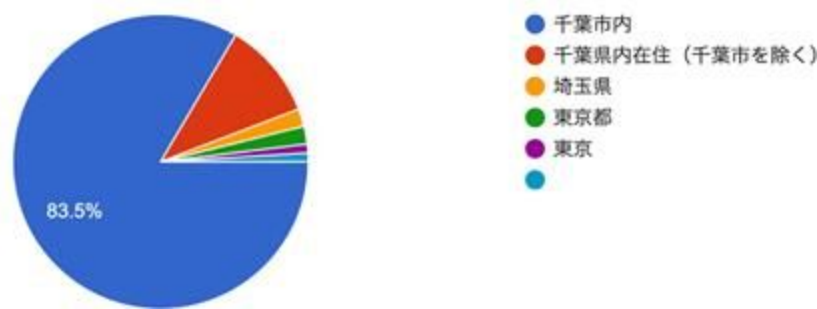
1. いろんな世代と一緒にチャレンジして楽しめる貴重な場だと思いますのでぜひ色々な場所で続けてください。また参加したいです。
2. 創作活動の場の広がり
3. 西尾先生の作品づくりの背景やぬい方の技法をまなべたことが面白かったです。そういったことを深めたり、その作品を通して人とつながる活動に興味があります。
4. おや子で参加したい！
5. 服を作ることのハードルがぐっと下がって、ワクワクどんな形にしようかなと難しいことを考えすぎなくても服として仕上がって楽しかったです。
6. 定期的なワークショップなどの活動を期待しています
7. 次回が楽しみ
8. またやってほしいです！
9. たのしいまちばり。参加する人たちが楽しく仲よくなれるような…具体的に書けず申しわけありません。
10. まちばの風景が楽しく変わる事を楽しみにしています

その他、千葉国際芸術祭2025についてご意見がございましたらご記載ください

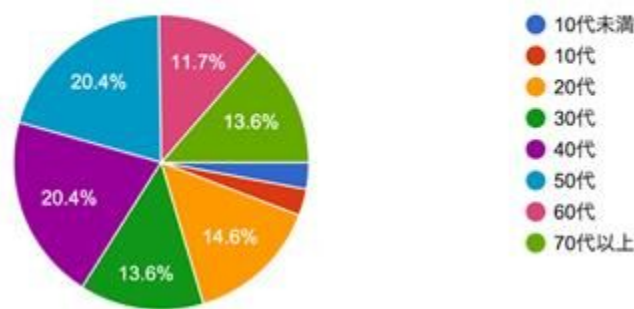
1. アートの力でまちを豊かにしてほしいです！
2. 今年、初めてしりました。告知活動をもっと活発にしてほしい
3. この前千葉市区役所に私用で訪れた際に方の千葉国際芸術祭の企画ははいけんしました。様々なアートワークが市の中で同時多発的に行われているのが、ああ良いなあとあらためて感じました。
4. たのしみにしています。どうなっていくのかワクワクしています
5. 楽しみにしています
6. 全体像の判かる広報が欲しい
7. しらべてもあまりよくわからなかったのもっとたくさん宣伝してほしい。
8. 特になし
9. 同上(まちばの風景が楽しく変わる事を楽しみにしています)

展覧会：西尾美也「まちばのまちばり」中間成果展 ぞろぞろ、〇〇の人たち

お住まいの地域を教えてください
103 件の回答

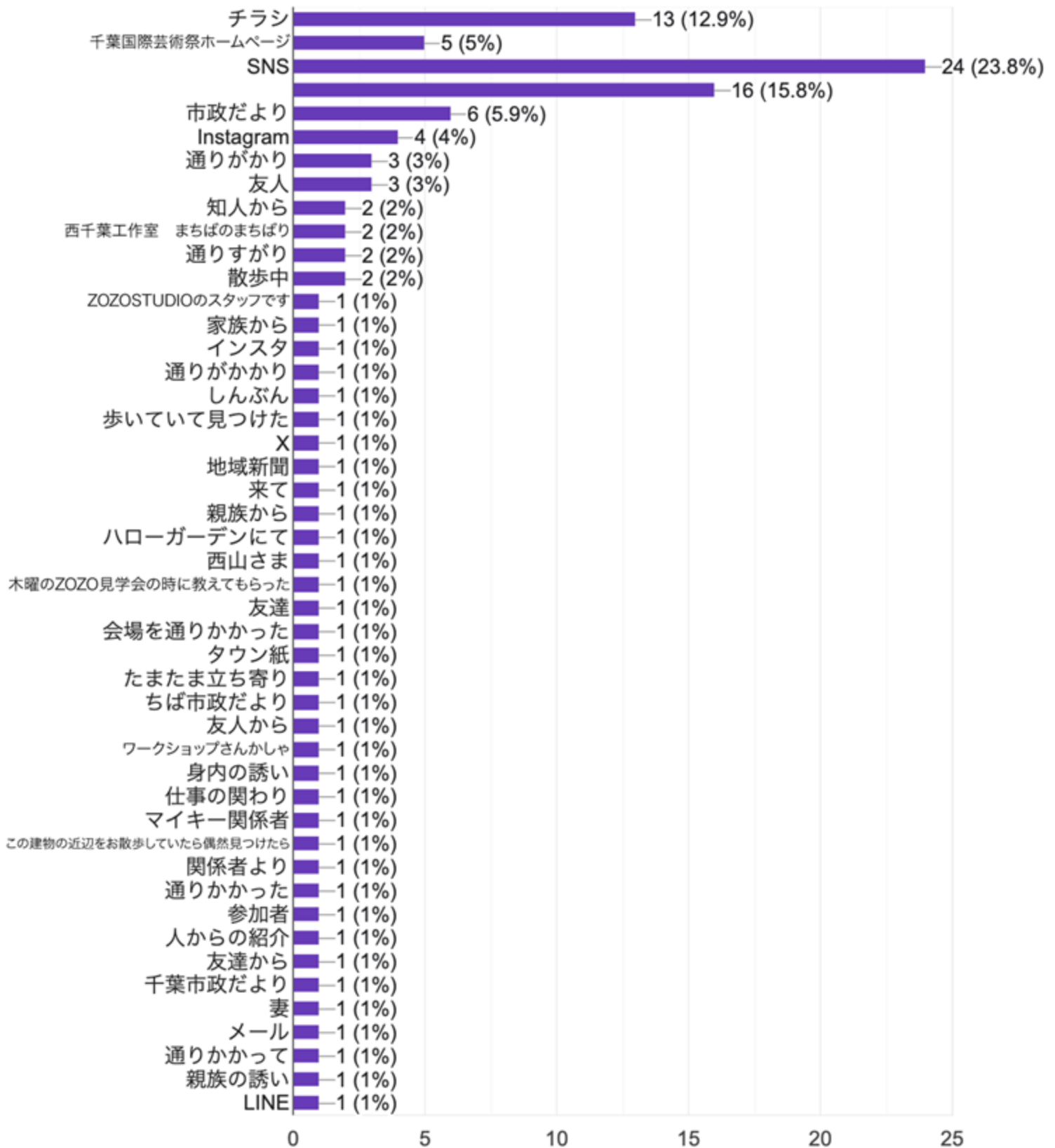


年代を教えてください
103 件の回答

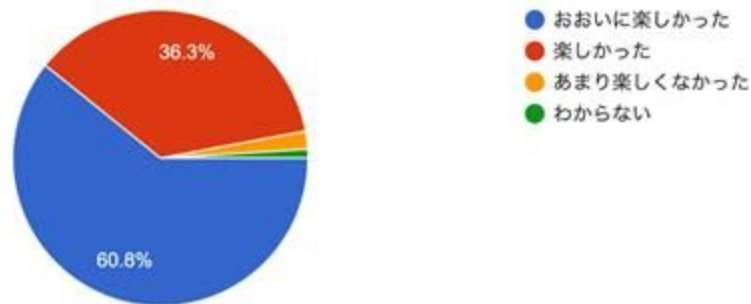


この展示をどのように知りましたか

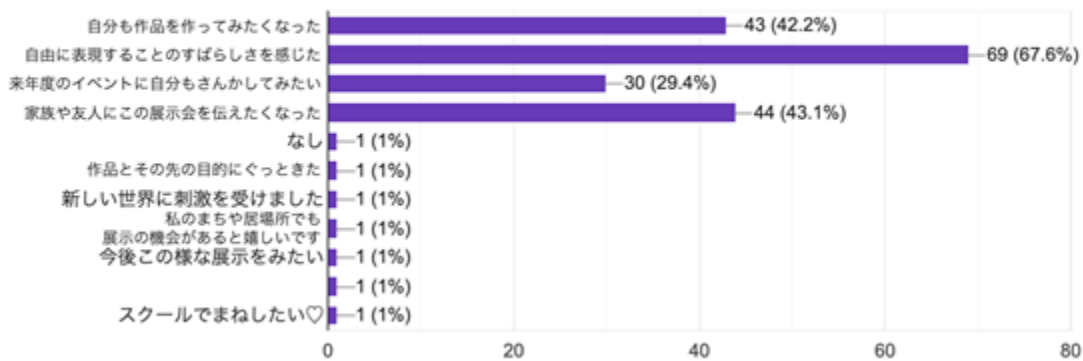
101 件の回答



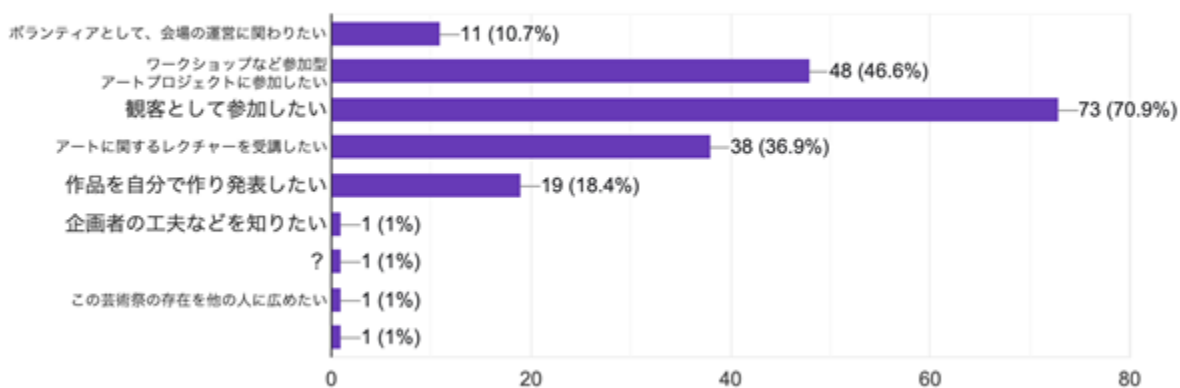
この展示はお楽しみいただけましたか
102 件の回答



この展示をみて、どう感じましたか
102 件の回答

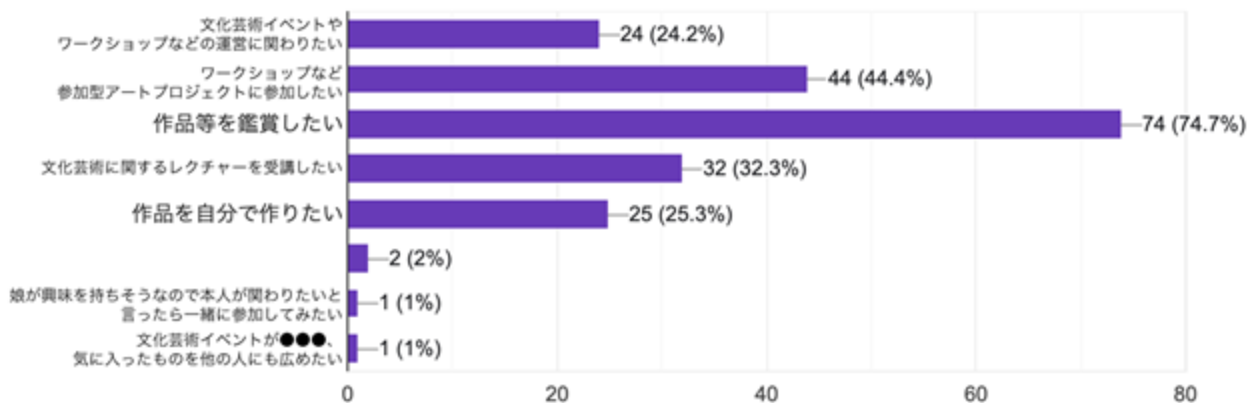


千葉国際芸術祭にどのように参加してみたいですか
103 件の回答



文化芸術にどのように参加してみたいですか

99 件の回答



その他、千葉国際芸術祭について感想やご意見などございましたらご記載ください

1. 楽しみにしています。
2. 地元での芸術祭とても期待していました！ 今後の展開も楽しみにしてます。
3. とっても楽しい展示でした！ 衣服の新しい可能性を知ることができました☆彡
4. 子供の普段見れない一面を見て、うれしくなりました。
5. とても楽しかったです！
6. とても興味深かったです。
7. 通りがかりにみせていただきました。ありがとうございます
8. これまでみんなで作ったふくがたくさんみれたのしかった。
9. 身近でこんなにもわくわくできる自由で楽しい企画があるということがとても嬉しいです。たくさん開催してほしいです！
10. 近所にこのような企画があり、新しさもある。
11. 全くアイデアが浮かばない私にとって刺激的でした
12. 最初ハードルが高いかと思いましたが、小学生も楽しく参加できました。生まれて初めてのミシン、大人の方との交流、とても良い経験になったようです
13. 次回も見てみたい。次も続けていただきたいです！
14. 楽しみにしてます！
15. 市内でひらかれるとの事、気軽に参加することができると思うので楽しみです。
16. 2025年の秋の本イベントも楽しみです。ぜひ継続してアートの楽しさと面白さを広げて下さい。
17. とても貴重な体験をさせていただきありがとうございました！ 子供もとても楽しかったと喜んでいました。また是非開催お願いします♪
18. 作品がみんな動いてました。自由な発想が自遊に遊んでました。ワクワク・ドキドキにあふれている空間でした。
19. アートを身近にしてくれる素敵な機会をありがとうございます。
20. とても良いイベントです。大いに楽しみ、創造への食指を動かすことができました。心にとっても良い栄養です。只”ち”について他のイベント含めて「チバ芸術サイ」行ったらやってたというものが多く広報の強化が要るかもと思います。
21. ワクワクがいっぱいでエネルギーをいっぱいもらいました🌟🌟
22. 参加した人たち一人一人がクリエイティビティを通してつながり合える催しなのだと感じています。このような取り組みがより広まれば良いと思います。
23. 若い方々の活躍を楽しみにしています。パリコレにも出られる様、日々努力して下さいネ！
24. 千葉大に勤めてましたが反対側に来たのは初めてでした。こんなに面白い世界が広がってるなんて！！
25. 今回のイベントで初めて知りました。楽しかった！
26. 各作品をつくられた方々の発想がすばらしく私のような頭では考えられない作品でとても楽しい時間でした
27. わくわくしています。お話を伺うことが出来、子どもたちに触れる感じる参加する機会があると嬉しく思います。大人がこんなに楽しい気持ちになる時間は久しぶりです
28. 千葉でこのようなイベントがあることが知らなかった。小、中学生にもぜひ教えてあげてほしい。
29. とてもたのしみにしています。

30. 宣伝をしっかりやった方がよいと思う。昨年の●を●●●●(房総芸術祭?)では、上総牛久でよい展示があったのにほとんど宣伝がなく知らない人が多かったと思う
31. とてもおもしろいイベントなので別の企画にも参加したり鑑賞したりできるようにしたいと思いました。
32. 参加型のワークショップ・イベントに参加してみたいとなりました
33. 新しい時代の芸術祭の息吹を感じました。まちまちテラーの誕生と活躍を楽しみにしています。
34. プレというにはもったいないくらいのクオリティで来年度が楽しみです。別の地域(自治体)の芸術祭に関わっているため、プレ期間の仕立て、参考にしたいです。
35. 普段自分が活動してるまちで芸術祭の空気が流れているのが新鮮でよかった！
36. 作品をまとめた本もあったおかげで参加者や西尾さんの意図とセットで鑑賞できたのがよかったです。
37. さわって 着れて 楽しかったです！
38. 本祭も楽しみにしています。本日はとても楽しめました、ありがとうございました。
39. 近所でこのようなイベントが開催されて嬉しいです
40. 今後の展開が楽しみです！
41. 多世代交流の中で1人1人の表現を楽しみました。自由な発想への刺激を沢山ありがたく受けました！
42. 千葉国際芸術祭への参画等、応援します！！
43. とても楽しかったです。近所なので工作室にも参加してみたいと思いました。
44. 音楽とコラボしませんか？ Steel pan
45. 次回のイベントに参加してみたいです。
46. まだ始まっていませんが本開催を楽しみにしています。

2025年2月19日(水)～3月2日(日)実施 「先生たちのアートアンデパンダン展」 会場:きぼーる1Fアトリウム



1. 実施概要

本企画では、千葉市内で働く「先生」たちを対象に、自由な創作の場を提供する。出展に際し審査のない「アンデパンダン」形式を採用し、絵画、彫刻、写真、インスタレーション、工芸、書、音楽、演劇など、ジャンルを問わず作品を発表できる展覧会。

教員自身が日頃抱えているアイデアや思いを自由に表現し、型にはまらない創作の喜びを実感できる機会をつくるとともに、先生が表現者としての姿を見せることで、生徒をはじめとした周囲の人々の創造性を刺激し、そこから新たな活動が生まれていくことを期待し実施した。

審査や評価のない本展では、専門分野にとらわれず、自身の専門科目を超えた表現を楽しむことができるため、アートをより身近に感じる機会となった。なお、2025年度の本会期では、教員に限らず、全市民や千葉市にゆかりのある方々も対象とした「アンデパンダン展」を開催する予定である。

***来場数合計:3801人**

2. 開催概要

タイトル : 千葉国際芸術祭2025プレ企画「先生たちのアートアンデパンダン展」
開催日時 : 2025年2月19日(水)～3月2日(日) 9:00～19:00*最終日は17時まで
会場 : Qiball(きぼーる) 1F アトリウム (千葉市中央区中央4丁目5-1/JR千葉駅より徒歩15分)
出展作家 : 56人
出展作品 : 159点
入場料 : 無料

3. メインビジュアル



イメージビジュアルは、アーティストで千葉国際芸術祭2025総合ディレクターでもある、中村政人が手掛けた。

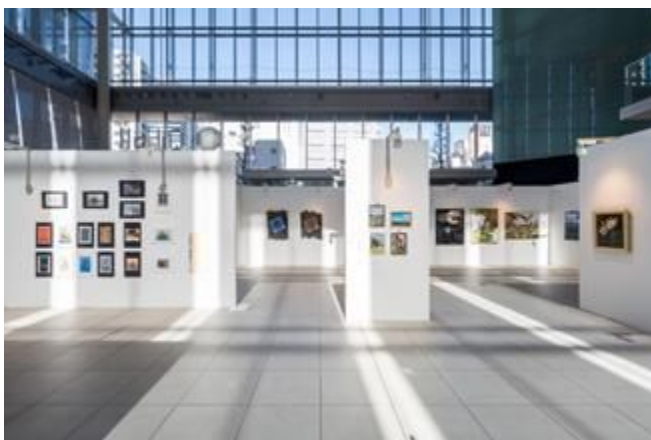
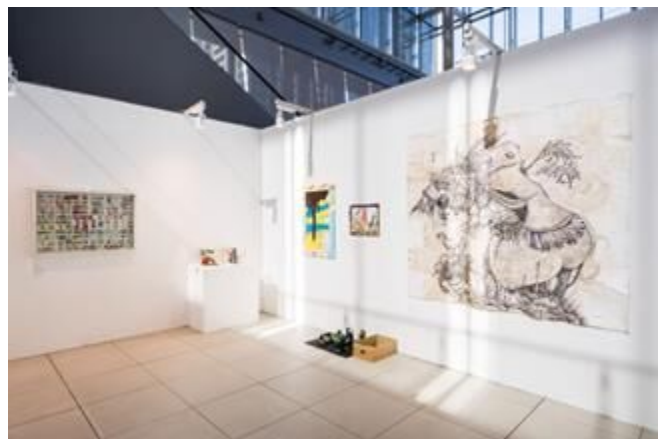
伸び伸びとした線で「自由」と描かれたドローイングには、「自由な表現」を称賛し、日頃の役割や職業、属性から「自由になる」瞬間を大切にしようというメッセージが込められている。

本企画をきっかけに、誰しもが自分の表現を大切に、地域の中で創造性を発揮し、アートを通して「自由」を手にするまじづりにつなげていきたいと考えている。

4. 作品募集スケジュール



5. 記録写真(会場風景)



6. 展示作品情報



出品者からのメッセージ:(大学の教員) ※会場に掲示

アートアンデパンダン展の誰でも作品を発表できるという自由な特徴に背中をおされ、約20年ぶりに筆を執ってみました。特に美術の教員をしているわけではありませんが、大学で説明者の方のお話を伺い参加させて頂きました。私の実家にはいつも玄関に百合の花が生けられております。自分らしい作品として、昔の趣味や実家の思い出を反映させた、純粋で安らげる百合の花をシンプルかつアート展にふさわしい様子を描いてみました。忙しい日々の中、このような機会が無ければなかなか絵を描く時間はとれません。この作品「白い百合」は私に描く楽しさを思い出させてくれた作品です。



出品者からのメッセージ:(特別支援学校の教員) ※会場に掲示

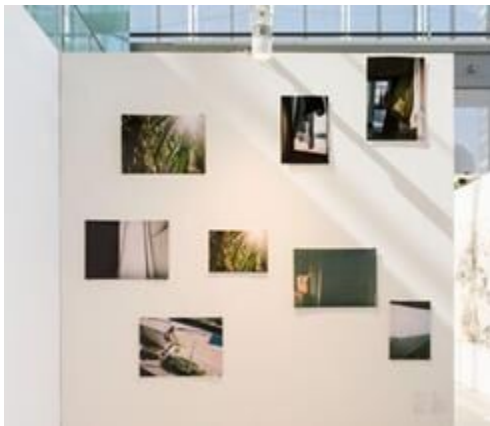
ひまわり学級には、12の個性豊かな光彩がひしめき合い、毎日が万華鏡のように煌めいています。特に図工の時間は、子どもたちの創造性が解放される魔法の時間。それぞれの内なる宇宙から生まれた色彩や形が、キャンパスという名の宇宙に散りばめられ、唯一無二の作品として息を吹き返します。モノづくりを通して、子どもたちは創造の喜びを知り、誰かの心を動かす喜びを体感します。それは、小さな芸術家たちが、自分の才能という名の種を蒔き、未来へ向かって大きく育てていくための、大切な一歩となるでしょう。



出品者からのメッセージ:(数学教員) ※会場に掲示

(一部抜粋)

出展にあたり、制作を始めた当初、陶器のみの展示を考えていました。しかし久しぶりに美術作品を創る機会をいただいたので、クリーンな見せ方ではつまらない。焦点の絞られない、自己がイマ感じている矛盾をはらむままとりのなさを表現したいと感じるようになりました。教室の中にはさまざまな美しさと価値観が存在しています。私は担当する教室で多くの小さな植物を、手作りしたプランターポットで育てています。3年に一度卒業生を送り出す教室。卒業生にはこのプランターポットを卒業証書と共に渡しています。「WATASHI」は私であり、渡しでもあるのです。



出品者からのメッセージ:(数学教員) ※会場に掲示

「うちからそと そとからうち」

掃除や洗濯は休日に行う 部屋に入ってくる 外からの音 部屋から見る外はなにかに遮られる外は 風に揺れている ただそこにあるもの 今ここにあるもの

僕は数学教師をしています。皆さんの知っている通り、学校現場は大変です。仕事に追われる平日は殺伐としています。掃除や洗濯は休日によろこびます。休日、家事をしながらみつけた内と外が生み出す関係性を被写体としました。稚拙ではありますが、これが僕の日常です。是非お楽しみください。



出品者からのメッセージ:(花道教室の先生) ※会場に掲示

雪深い森に遅い春がやってきます。こずえにはまだ雪が残っています。しかし、降り積もった根雪は溶け始めています。早春の日差しが大地に届き始めています。春の花が芽吹き、咲き始めています。小鳥たちが戻ってきます。リスやウサギも現れています。森に遅い春がやってきました。あなたにも春の息吹が聞こえませんか？

お花を生けると、心が躍ります。生の花の香りにほっとしたり、花の色に励まされたりします。難しいことは考えずに自分のイメージしたままに、気持ちの向くままに生ければよいのです。長く不登校生徒の方を担当してきました。不登校のお子さんや保護者の方を対象にお花を教えています。一緒に楽しんでみませんか。



出品者からのメッセージ:(千葉明德短期大学の教員) ※会場に掲示

手軽なカメラ機能付きのスマートフォンの普及で誰も写真家の時代になり、私自身も海外の「iPhoneオンリー」の写真展に入選したことがあります。そのことに気を良くしたのか、益々写真を撮るのが面白くなりました。ここに展示される写真もそのような写真ばかりです。ところが、写真は被写体よりも撮影者についてより多くを語るとも言われています。私自身は撮影されることに對して、無抵抗な身近な自然(特に葉や木々)や自然現象、又はそれに関する人間の存在か不在について物語るようなテーマを好んで撮ります。望む効果を出すために後からアプリで編集加工したり、合成したり、描いたり、印刷方法を工夫したりなどをする場合もあります。それでもなお、できれば、見たまま、感じたままの、多くはその一瞬一刻をシンプルに表現できればと願っています。千葉までの通勤時間がかかり長いこともあり、もしかして、iPhoneが私の車内のゲーム機のように、あたかもポケット・スタジオになっているかもしれません。その他の作品は今年になってから手掛けているコラージュ作品です。学生たちが残した素材を使ってコラージュを作ってみたり、写真をパソコンでフォントコラージュしてみたりして楽しんでおります



出品者からのメッセージ:(千葉明德短期大学 教員) ※会場に掲示



昨年、「造形あそび」という本を読み、雷のような衝撃を受けた。「あ、自分がやりたいのはこういうことかもしれない！」
その日、著者である深谷ベルタ先生に連絡を取り、次の日会うことに。先生の職場である大学内で一緒に造形あそびをはじめたら、「造形の先生をやらないか」と誘われた。そして今、私は千葉明德短期大学で働いている。
今回出している作品は、昔描いた絵と、ベルタ先生とのあそびの中で生まれた作品です。
みなさんに使ってもらう、この四角いピースたちは、私が捨てようとしていたもの。絵の具を塗って、割って、その破片を組み合わせて遊んだあと、ゴミ袋に入れていた私。それを見て、「もったいない！ まだまだ遊べるよ」とベルタ先生。□や△にしてみると、組み合わせるだけでも面白いことを教えてくれました。
かっこいいカタチを目指してピースを私が並べていると、「気持ちいいように置けば、それでいいの」というベルタ先生の言葉に、ハッとしました。
うまくやろうとせずに、「きもちいいな」「落ち着くな」というトコロを見つける。そういう姿勢で楽しんでいいんだあと、心が軽くなったようでした。

7. 関連イベント①作品鑑賞会



実施概要

千葉国際芸術祭2025の総合ディレクター・中村政人氏を迎え、「先生たちのアートアンデパンダン展」において対話型鑑賞を実施。参加作家と直接対話を交えながら、作品の背景や制作意図について多角的に考察し、鑑賞者それぞれの視点を深める鑑賞会を行った。

タイトル	: 芸術祭総合ディレクターと巡る作品鑑賞会
開催日時	: 2025年2月22日(土)13時～14時30分
会場	: Qiball(きぼーる) 1F アトリウム (千葉市中央区中央4丁目5-1/JR千葉駅より徒歩15分)
講師	: 総合ディレクター 中村 政人
入場料	: 無料
参加方法	: 会場(Qiball(きぼーる) 1F アトリウム)に直接お集まり
申し込み	: 不要

作品鑑賞会—当日の動き

鑑賞会の開始前に、総合ディレクターより挨拶。



当日は参加された先生方から、作品の創作経緯や技法、ストーリーについて説明があり、中村ディレクターとの直接の対話を交えながら作品に対する理解を深めた。



参加者とともに作品を鑑賞した後、それぞれが一言ずつ感想を発表し、本展に出品しての現在の思いなど、自由に発言する時間を設けた。



7. 関連イベント② 演劇



実施概要

舞台上には、護衛の騎士と怪しい魔法使い「マーリン」。マーリンは、通りかかる人たちに声をかける。
「そなたこそ、真のブリテン王。あの剣を引き抜くのだ。」
演劇に参加してみたい人はそのまま舞台上に上がり、マーリンの誘導で剣を引き抜く。すると...
通りかかった人が演劇の世界に入ってしまう。恥ずかしい、楽しい、ワクワクする、気まずい、演劇の世界に入ったからこそ感じる気持ちを味わうことのできる体験型演劇を行った。

タイトル :『アーサー王伝説』より(演劇体験)
開催日時 :2025年3月1日(土)13:00~15:00 循環上演
会場 :Qiball(きぼーる) 1F アトリウム (千葉市中央区中央4丁目5-1/JR千葉駅より徒歩15分)
出演者 :演劇集団「MOKUGEKI」アッキー、織衣理紗子
入場料 :無料
参加方法 :予約不要、現場にて役者で声をかけて参加する

記録写真



7. 関連イベント③弾き語り



実施概要

「うちからそと そとからうち」は、家の中で共存する「内」と「外」の関係性を探求する作品であり、写真を通じてその考察を表現している。加えて、自宅を拠点に大学生の頃から継続的に音楽制作を行ってきた。音楽を作ることは、外界(社会や出来事)との折り合いをつける手段であり、喜びや切なさ、不思議さといった日常の心の機微を記録する行為でもある。本展示では、作品「うちからそと そとからうち」とあわせて、音楽の演奏を行った。

タイトル :『うちからそと そとからうち』(弾き語り)
 開催日時 :2025年3月2日(日)16:10~16:30
 会場 :Qiball(きぼーる) 1F アトリウム (千葉市中央区中央4丁目5-1/JR千葉駅より徒歩15分)
 出演者 :Ema
 入場料 :無料
 参加方法 :予約不要

記録写真



8. 評価/所感

- ・今回のアンデパンダン展は先生方が日頃の教育活動の枠を超え、純粋な創作活動を行う場となった。特に、美術教員ではない先生の作品や、異なる分野の表現が交差することで、既存の「先生らしさ」とらわれない多彩な表現が生まれ、ユニークな作品が多数展示された。
- ・先生が創作に関わることで、生徒や学校関係者にも大きな刺激を与える機会となった。生徒にとって、「教える側の先生が表現者でもある」という新しい視点を得ることで、創作活動への関心が高まり、教育現場における芸術の役割がより広がる可能性がある。また、教育関係者も巻き込みながら、創造的な環境を生み出す契機となった。
- ・展示された作品を通じて、参加者同士の対話が生まれ、多様な視点を持つ交流の場となった。出展した先生方は、異なる教育現場で働く他の先生たちの考え方や経験を知ること、自身の職場での日常や教育活動を改めて見つめ直すきっかけを得ることができた。
- ・審査のないアンデパンダン形式を採用することで、作品の優劣ではなく、それぞれの個性や表現そのものが尊重される場となった。これにより、表現の可能性が拡張され、既存の枠にとらわれない自由な創作の重要性が示された。
- ・複数の先生方が、本展で見られたような、個性的で自己と対峙するような作品を生み出している事が印象的だった。当初の想定を超える創造性を発表する機会を芸術祭が提供でき、本会期の「アンデパンダン展」への期待が高まった。
- ・自分の先生も出展しているかもしれないと思われる鑑賞者が多く、実際に、過去の恩師の作品に初めて対面した来場者もいた。先生を通じたネットワークの広さの効果が垣間見えた。

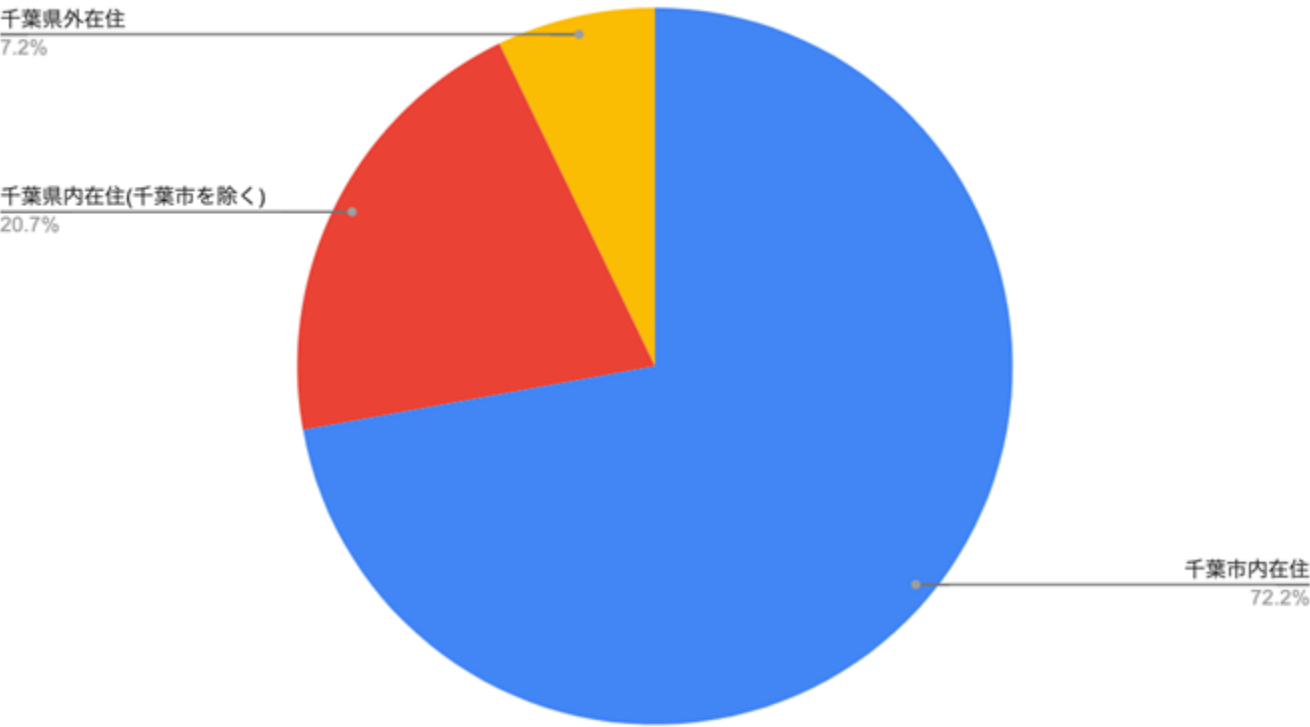
9. 課題

- ・ワークショップや公開制作など、観客がより能動的に関われるプログラムを増やすことで、より開かれたイベントになる可能性がある
- ・2025年度は市民も参加対象になる予定だが、先生と市民がどのように交流できるか、どのような関係性を築けるかが課題となる。
- ・審査のない「アンデパンダン展」の特性上、作品の完成度にはばらつきがあることは当然の事として、展示方法や展示プランに一層の配慮が必要であると実感した。
- ・本展の目的としての「自由な表現の場」は達成したが、鑑賞者によっては「アートとしての質が一定でない」と感じる場面もあり、一層、本展の意義や説明を明確に伝える必要があった。「アンデパンダン」という概念を普段アートに関わっていない方々にどのように説明するかが課題となる。

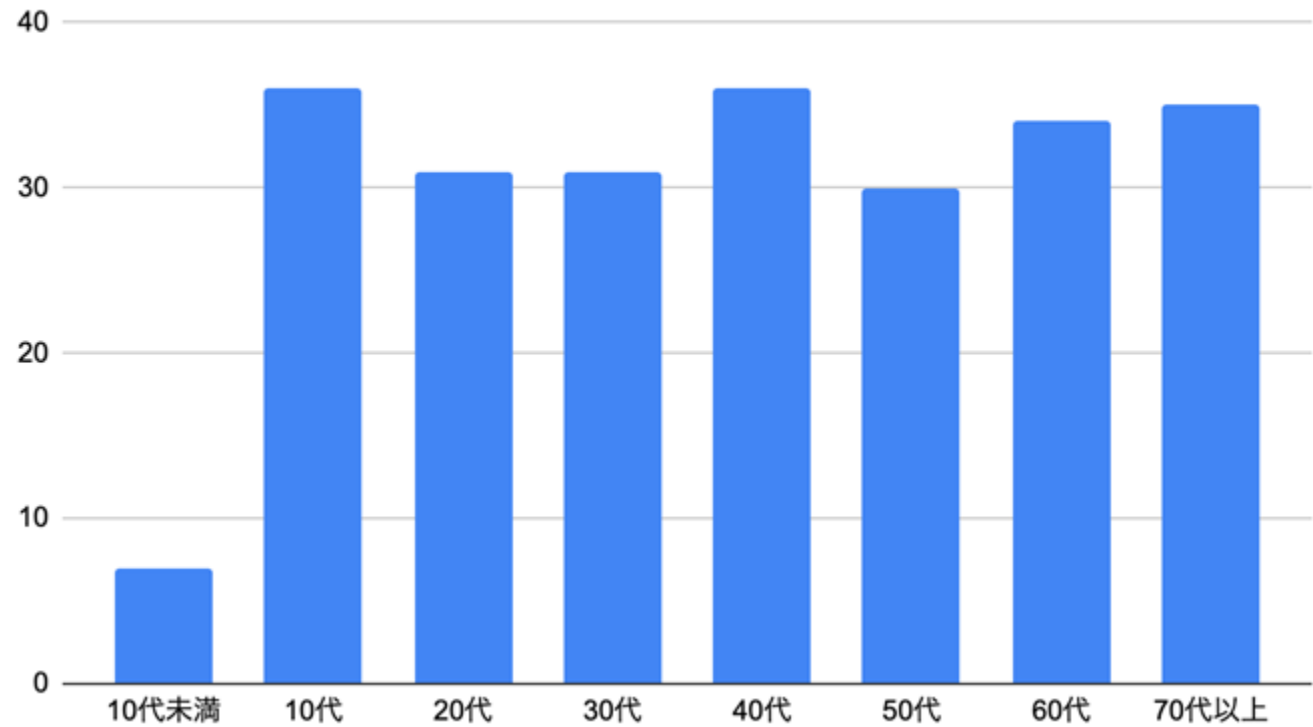


10. アンケート

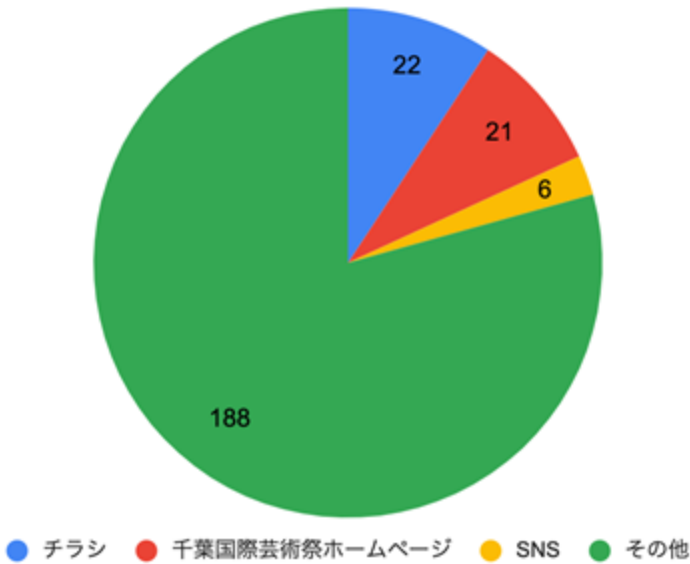
お住まいの地域を教えてください



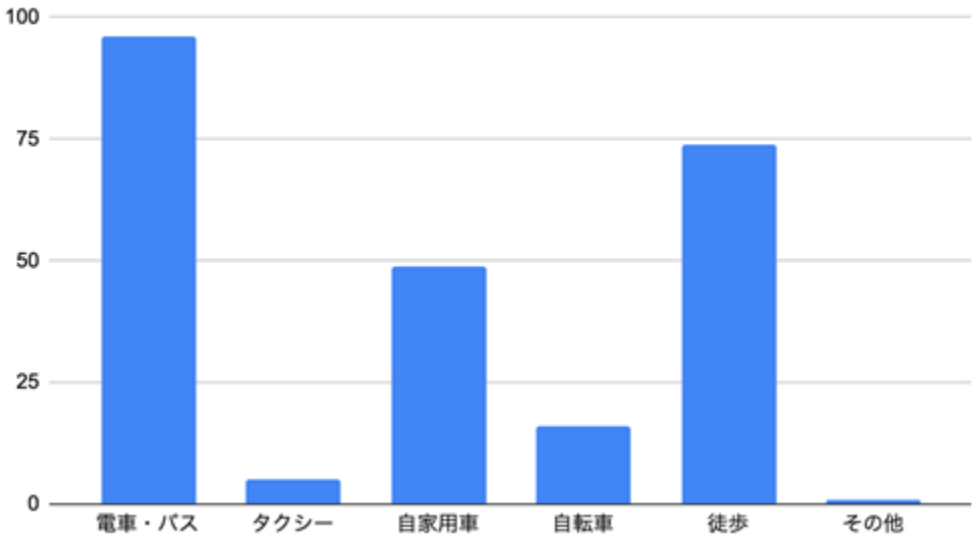
年代を教えてください



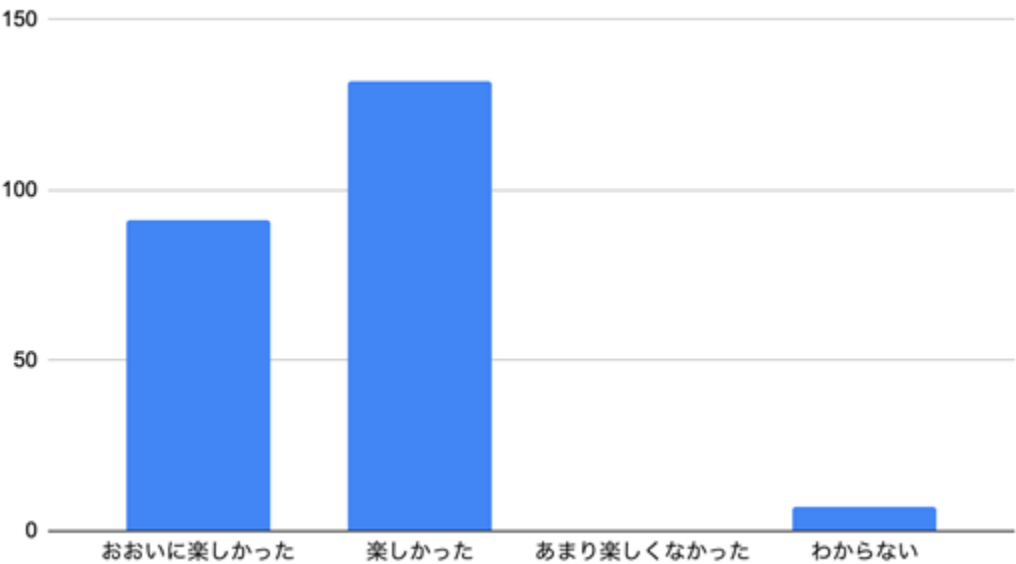
この展示をどのように知りましたか(複数回答可)



会場にどのように来ましたか

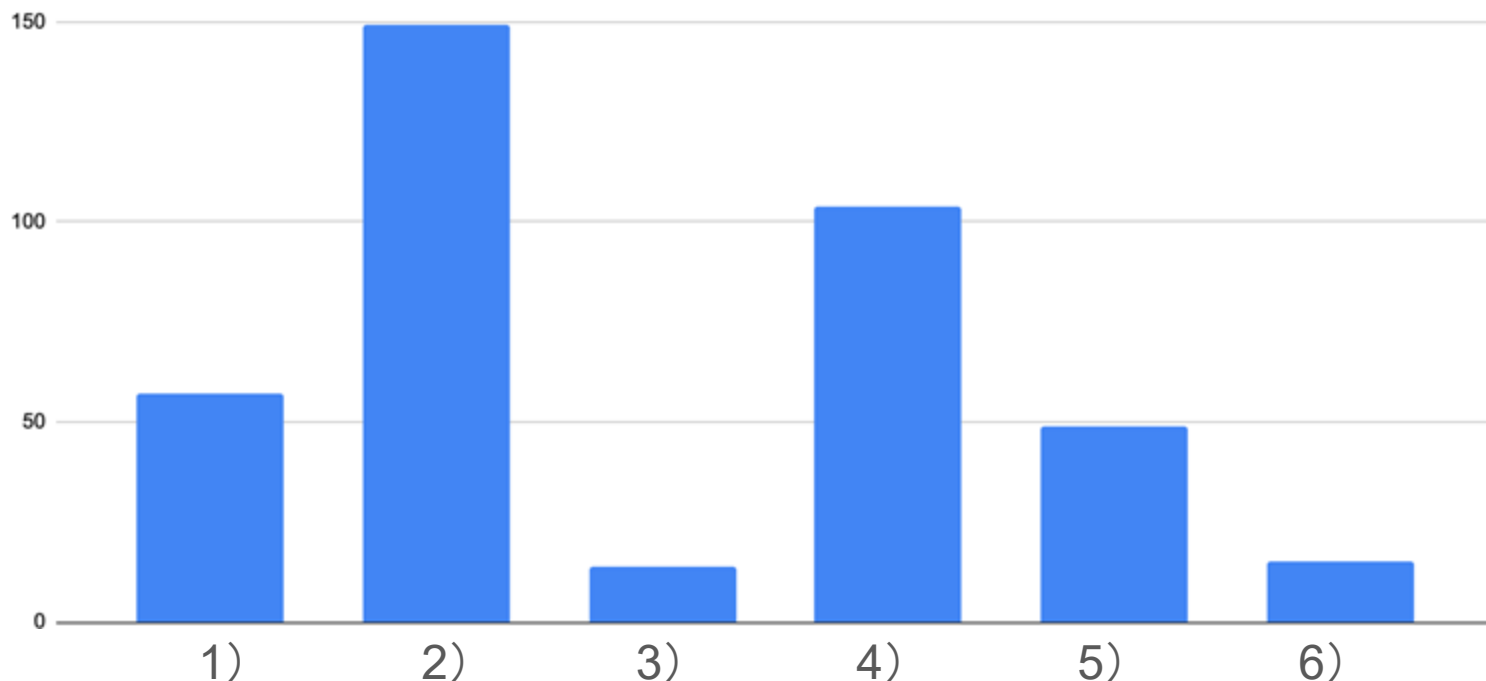


この展示はおたのしみいただけましたか



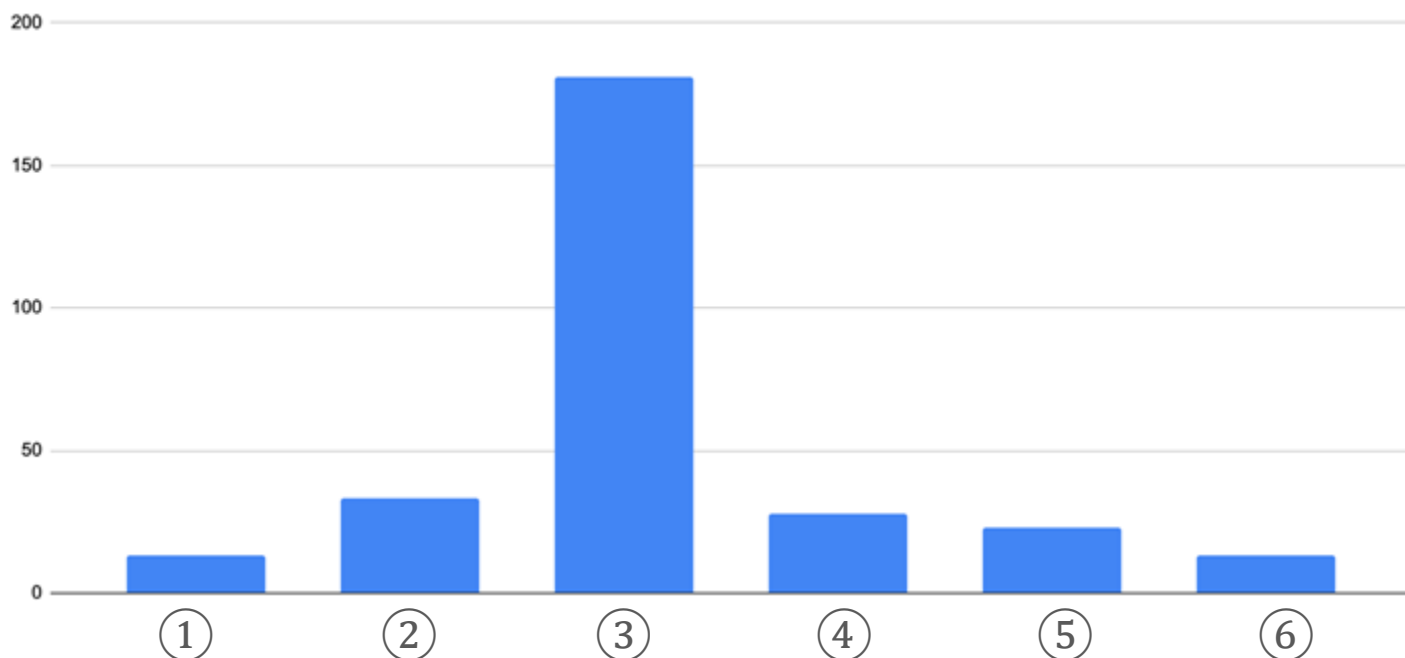
この展示をみてみて、どう感じましたか(複数回答可)

千葉国際芸術祭2025令和6年度企画事業実施報告書



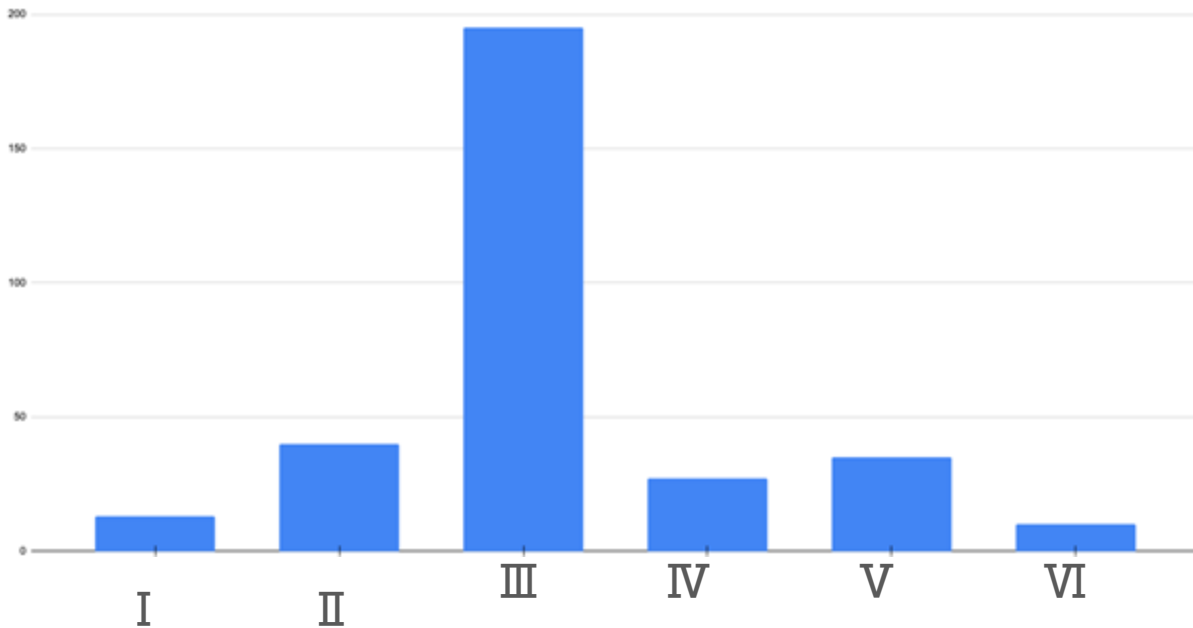
- 1) 自分も作品を作ってみたくなった
- 2) 自由に表現することのすばらしさを感じた
- 3) 来年度のアートアンデパンダン展に自分も出展してみたいと思った
- 4) 多様な表現を受け入れる場は大事だと思った
- 5) 家族や友人にこの展覧会を伝えたくなった
- 6) その他

千葉国際芸術祭にどのように参加してみたいですか(複数回答可)



- ① ボランティアとして運営に関わりたい
- ② ワークショップなど参加型アートプロジェクトに参加したい
- ③ 観客として参加したい
- ④ アートに関するレクチャーを受講したい
- ⑤ 作品を自分で作り発表したい
- ⑥ その他

文化芸術にどのように関わりたいですか(複数回答可)



- I. 文化芸術イベントやワークショップなどの運営に関わりたい
- II. ワークショップなど参加型アートプロジェクトに参加したい
- III. 作品等を鑑賞したい
- IV. 文化芸術に関するレクチャーに受講したい
- V. 作品を自分で作りたい
- VI. その他

●設問

その他、千葉国際芸術祭について感想やご意見などございましたらご記載ください。※文章は原文のママ

- ・個性があって、おもしろく、世界かんがあった。
- ・どの作品も個性ゆたかですばらしかった。
- ・楽しかったです、がんばってください。
- ・さらに多様な表現が展示されると期待も高まります。やる方は大変ですが…ありがとう。
- ・今回、はじめて知りました。イベントなどの情報配信、大切だと思います。もっと早く来たかった。会場の施工、造作、立派でした。丁寧でした。照明の当て方、もうひと工夫の余地あり。プロ、アマの垣根はもはや感じませんね。
- ・様々な作風があり、楽しめました。展示もゆとりがあり、ゆっくり楽しめました。
- ・楽しませていただきました。ありがとうございます。
- ・コンパクトでしたが、とても鑑賞しやすかったです。
- ・すばらしい展覧会になって、感無量です。ありがとうございます。
- ・今回、出品してよかったと思った。ありがとうございます。
- ・すばらしい企画ですね。楽しかったです。また来ます。
- ・次回も機会がありましたら是非。この場所が便利でとてもよかったです。
- ・期待しています。
- ・キャプションの字が小さく見えにくい。
- ・カラフルな作品が多くてみていて、とても楽しかったです！ありがとうございます。
- ・どの作品も独創的でした。
- ・作品を作っている人は沢山いるので、発表する場がもっと増えるといいなと思った。
- ・トマトの絵と「白里海岸」と「光の道」が良かったです。大きい絵が好きなので、3点ともこの2倍もっとあったら、大きい家買って玄関に飾りたいです！みなさん創作活動楽しんでください！
- ・子もちの30代です。子どもがうまれてからは美術展などに行く機会もなかったので、きぼーるに来たついででも拝見できてとてもお得でした。ありがとうございます。
- ・「Red」の非凡さを感じた。
- ・本日来場するまでこちらの展示のことを知らなかったのもっと告知があると良いかも…。私自身は音楽をやっているのも、機会があれば参加したいです！ありがとうございました、楽しかった！

- ・西さんの作品がデビッドリンチみたいで好きです。
- ・もっと大規模な展示をしてほしい！
- ・子どもの作品がかわいかったです！
- ・技術や社会的思想が目まぐるしく変わっていく中、それに合わせて体形的に変化していく芸術を感じされた。
- ・『生き物バンザイ』という作品が躍動感があって良かった。
- ・今回の作品は、日常の中で目につくものを題材としてもが多かったと思います。このような場で日常の再発見は慣れた日常を新鮮に感じさせる良い機会だと思います。
- ・展覧会は未成年が参加できないなどの制限がよくあるが、アンデパンダンのシステムで誰でも参加できるのは良いなと思った。
- ・大切な事だと思いました。
- ・さわっても良い作品があり、3才の子どもも楽しめました。身近な素材が使われていて、それが説明に記載されていたのも良かったです。
- ・たまたま知った。もっと千葉国際芸術祭を調べてみたくなった。
- ・ラベルや解説の位置が低く、腰より上だと助かるなと思った。
- ・表現をしてきた先生方のご自身の作品を自由に出せる場がもっとたくさん増えて、先生が創造を楽しめる環境があれば子供たちはその姿を見て素敵に育っていくと思う。このような取り組みはとてもよいと思います。
- ・いろんなアートに触ることができて楽しかったです。
- ・千葉で活動する先生方の作品が見れる貴重な機会をありがとうございました。
- ・美しい作品の美しい展示ありがとうございました。一般展示も期待しております。
- ・お世話になった先生の作品があると聞いたので来てみました。先生としての姿しか知らなかったの、作品がみられて良かったです。
- ・生き物ばんざいが子どもがきに入っていました。
- ・どんな方が作った作品なんだろうと思いながら楽しみました。
- ・みなさんのすばらしい作品を見せていただき、ありがとうございました。
- ・高橋郁里さんの「Bird Color Chart」が特に気に入りました。その他の作品もすばらしかったです。色々なジャンルの作品が展示されているのが良かったです。書道関係の作品、写真など色々な方が参加可能な展示会だと感じました。
- ・とても興味深かったです。ありがとうございました。
- ・無料は気軽に見れて良いです。そして思わずいろんな発見がありました。いろんな手法おもしろいです。ありがとうございました。
- ・すばらしい作品が多く、勉強になりました。
- ・芸術祭の存在を知らなかったの、もっとPRが必要ではないかと思いました。ステキな作品が多いのに、もったいない感じがしました。
- ・偶然観させて、楽しめました。
- ・この様に人に見て頂ける場所があるという事が作る人の楽しみや目標になると思います。楽しかったです。
- ・気軽に見れて楽しかったです。また来たいと思いました。写真のような絵や「跳ね橋」が好きでした。
- ・いろいろな作品があって楽しかった。絵があつたり、彫刻があつて面白かった。自分も上手に絵を描きたい。
- ・きぼーの1Fは通りかかりでも鑑賞できる所なので、よいと思います。どの作品も、とてもよいと思いました。ひまわり学校の版画もよく表現されてました。
- ・かつてご一緒した先生の作品を拝見しました。ご本人と再会できたような気持ちになりました。よい作品展でした。ありがとうございました。
- ・先生方の作品に元気をいただきました。
- ・プレですが、千葉国際だから、日本ばいもの、千葉のもの外国のものとかもあるといいかな？でも、本当にいろいろな表現があつて、すばらしい企画でした。よく集まりましたね、感激です。
- ・様々なタイプの絵画作品があり、見応えがありました。
- ・何を展示しているのかわからない。
- ・前澤さんアート部門よろしく(千葉のため)
- ・いろいろ作品を見ることができて、ステキな時間をありがとうございました。子どもたちにも見てほしいと思いました。このような催事がある事すら…もっとアナウンスが広がるといいなと思いました。
- ・他用な作品が多く楽しめました。中でも「光の道」齋藤賀子さんの作品は良かったです。また開いてください。
- ・このアンケート渡しのは出口がふさわしいと思う。入口で配る意味がわからない…
- ・今回はじめて参加させていただきましたが、とてもいい場所に展示していただき、嬉しかったです。また是非参加させていただけると嬉しいです。
- ・パーティー、照明、展示がとてもきれいでびっくり！スタッフの皆様ありがとうございました。お手伝いできず申し訳ありません！DMはダサすぎ。もう少しまともなのほしい。市の文化部の職員の方に作らせても面白いかも(笑)。アンデパンダンで白、本展について海外アーティスト招くもいいけど、国内作家年齢制限は理解できません。

2025年3月25日(火)～31日(月)実施 「今昔絵有動物借景」(美術館デジタルアーカイブ活用) 会場:千葉市動物公園

1. 実施概要

本芸術祭のプレ企画として、ARなどのデジタル技術を用いて、千葉市美術館が所蔵するコレクションのデジタルアーカイブを市民に向けて活用するためのプロジェクトを実施した。
アーティストユニットTMPRによる「今昔絵有動物借景」では、千葉市美術館所蔵作品のデジタルデータとCGを組み合わせた表現を制作、それらを千葉市動物公園内の動物展示エリアで展開することで、実際の動物と動物が描かれた絵画をデジタル空間上で同時に存在させることを実現した。

本会期でTMPRは、動物展示エリアにとどまらず、園内のレストランのほか、ARの特徴を活かし、市内のこども病院など様々な会場での展示を検討している。また、ワークショップの開催などを通じての市民参加の方法を検討している。

2. 開催概要

展覧会

タイトル	TMPR「今昔絵有動物借景」
日時	2025年3月25日(火)～3月31日(月) 9:30～16:30(入園は16:00まで)
場所	千葉市動物公園 平原ゾーン[ミニアキヤット・象・きりん・ライオン展示エリア付近] (千葉市若葉区源町280)
参加費	無料 ※別途、動物公園入園料が必要。
協力	千葉市美術館、千葉市動物公園

3. アーティスト及び実施体制



TMPR(岩沢兄弟+堀川淳一郎+美山有+中田一会)

デジタルとフィジカル、ハイテクと手作業、モノの視点とヒトの視点を行き来しながら、まちと遊ぶアートユニット。立体デザイナー、立体プログラマー、平面デザイナー、対物プランナー、対人プランナーが協働中。
2023年結成。読み方は「てんぶら」。

スタッフ

記録撮影:ただ(ゆかい)

TMPRマネージャー:磯野玲奈

4. AR作品《今昔絵有動物借景》

総体験回数：1,389回

千葉市動物公園の平原ゾーンにてAR作品を展示。訪れた参加者は自身のスマートフォンで展示エリアに置かれた看板のQRコードからTMPRが制作したWebアプリにアクセスし、AR作品を体験した。キリン、アジアゾウ、ライオンのエリアでは、千葉市美術館が所蔵するコレクションのデジタルアーカイブの各動物が描かれた作品が画面上に現れ、実際の動物たちと同時に見ることができた。ミニアキタのエリアでは、まるで参加者がミニアキタの視点でキリン、アジアゾウ、ライオンを眺めるかのような縮尺で3DのARを映し出した。視点や身体感覚の変化による揺らぎを感じられる体験作品を展示した。



5. デザイン

TMPRのデジタルを活かした体験と、千葉市立美術館の所蔵作品のイメージを掛け合わせ、本体験のロゴを制作した。

ロゴのデザインを踏襲したポスター、体験マップ、体験場所に設置するサインも制作し、参加者がスムーズに体験できるよう工夫をした。ポスターと体験マップは浮世絵や版画を想起させるリソグラフ印刷を採用した。



ロゴ



ポスター



体験場所のサイン

6. 広報



Webページ

インスタグラム

7. 実績

体験回数

ミーアキャットエリア	827回
キリンエリア	225回
ライオンエリア	161回
アジアゾウエリア	176回
アンケート回収	17件

8. 総論

実施したAR作品《今昔絵有動物借景》では、単にスマートフォンだけで完結するARとは異なり、動物園内での看板制作や実際の動物の前でAR体験を実施した。これにより、現実空間に独特な違和感やユーモラスな感覚が生まれるという、身体性を伴う鑑賞体験を提供できた点が成果であった。

スマートフォンを通じて現れるバーチャルな千葉市美術館所蔵作品のデジタルデータと、目の前にいる動物たちとのギャップや調和を楽しむことで、日常的な鑑賞行動とは異なる新鮮な視点が育まれた。鑑賞者はAR作品を追いながら普段は行わないような身体の動きを自然に取るようになり、その結果、展示空間や対象となる動物の立体感・スケール感をより鮮明に感じ取るにつながった。

また、AR体験のためのwebアプリの設計やコーディング、案内する看板のグラフィックデザインをTMPRメンバーが手掛けたことも、本プロジェクトの価値を高めた重要な要素のひとつである。専門的なクリエイターが鑑賞体験の導線を設計することで、単なる技術体験を超えた質の高い文化的体験としての意義が明確になった。

本作品は、デジタルコンテンツとしてのARの可能性を超えて、身体感覚や空間認識を通じて文化的・芸術的な新たな鑑賞のかたちを提示することができたと言えるだろう。

9. 課題(来年度に向けて)

AR技術を用いたユニークな鑑賞体験を提供し、動物園や美術館など専門性の高い複数の施設と連携することによって、新たな交流の可能性を示した。一方で、プロジェクトのさらなる発展を考えるうえでは、以下の課題が明らかになった。

まず、プロジェクトの実施期間が短かったことにより、各施設との調整や連携を十分に深めることが難しかった。今後はより長期的な展望を持ち、プロジェクトの計画から実施までを段階的かつ十分な期間をもって進めることで、より密度の濃い協働を実現していきたい。

また、複数の施設間における連携をよりスムーズに進め、単一空間でのAR作品の体験にとどまらず、施設ごとの専門性や特色を活かした作品制作、さらには動物園や美術館の専門職員の皆さまとの協働リサーチやプログラムの企画など、より積極的な連携を目指していきたい。特に、美術館や動物公園などの施設間を横断する取り組みを可能にする調整機能が不可欠である。今後の展開では、TMPRの活動がそれらの施設間を媒介し、創造的な交流や協働の土台となることを意識的に目指していく。

さらに、今後プロジェクトが目指す方向性について、具体的なイメージを共有・可視化することも課題である。特に各施設が得意とする領域を十分に引き出しつつ、協力・共創による文化的価値の創出をより具体的にイメージしやすい形で提示することが、関係者間の理解を高めるうえで重要となる。

これらの課題を解決し、TMPRの活動を通じてさらに豊かな文化交流を生み出す場となるよう、継続的にコミュニケーションを図っていく。



10. アンケート

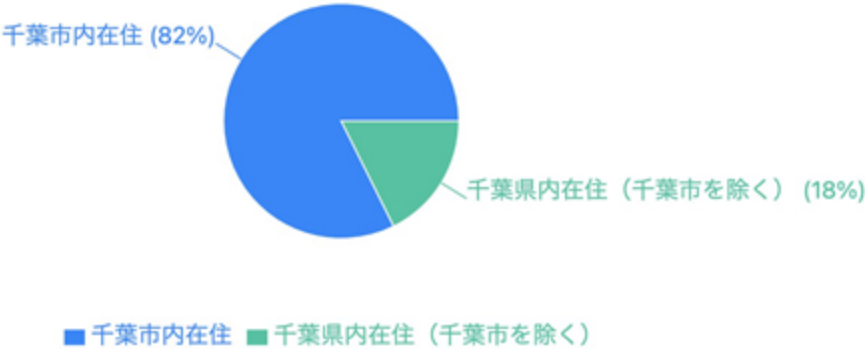
千葉国際芸術祭 アンケート分析結果

基本情報

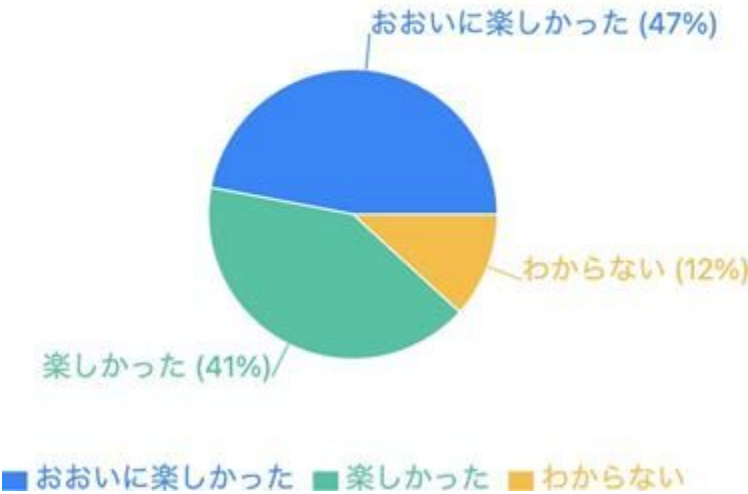
17
総回答数

88%
満足度
(楽しかった・おおいに楽しかった)

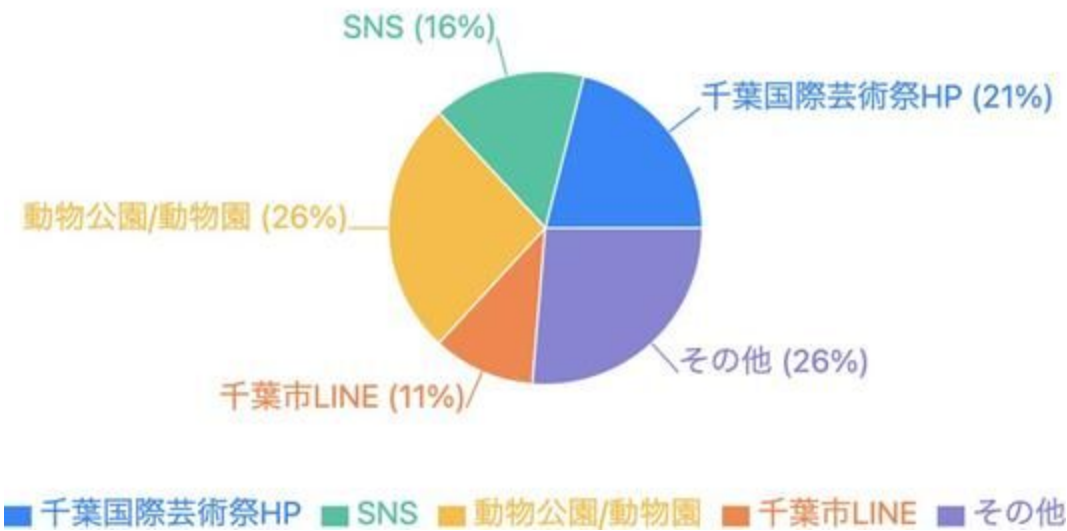
回答者の地域分布



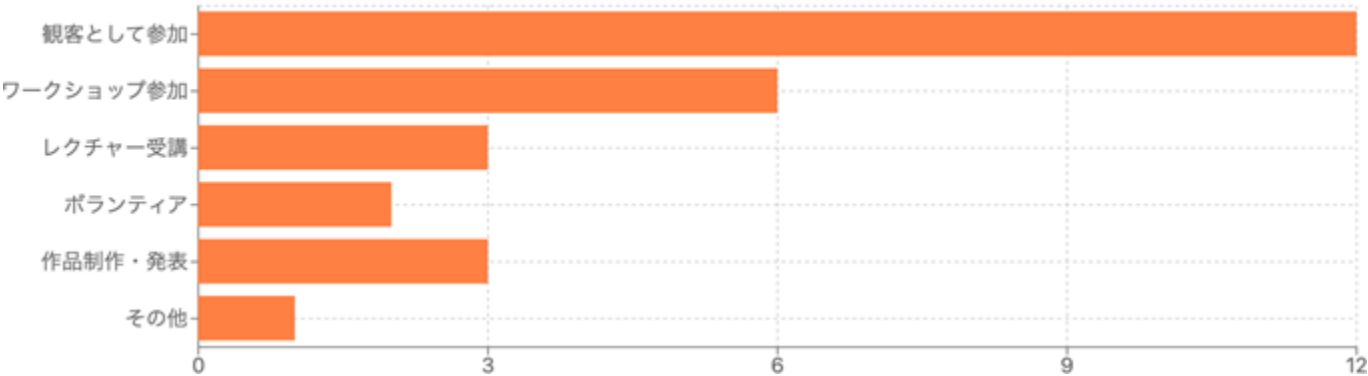
楽しさの評価



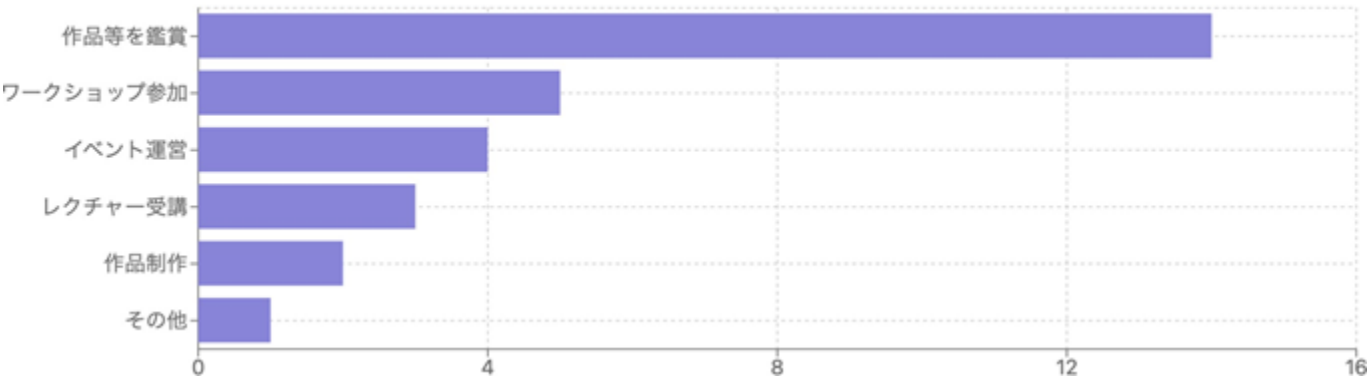
展示を知った方法



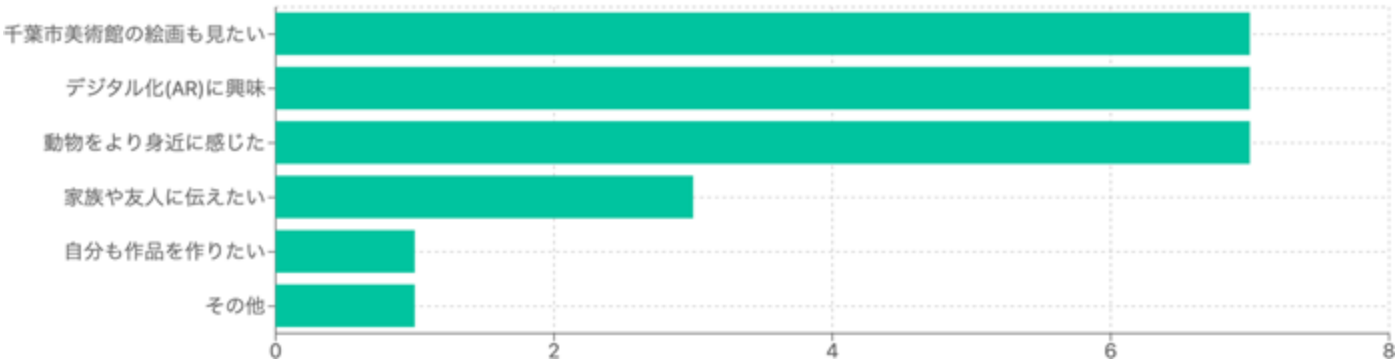
芸術祭への参加希望方法（複数回答）



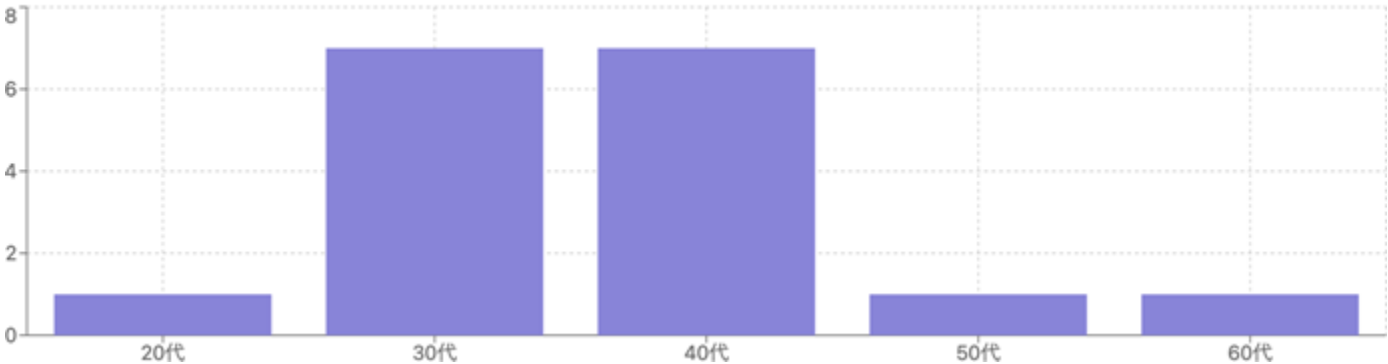
文化芸術への関わり方希望（複数回答）



展示の感想（複数回答）



回答者の年代分布



その他、千葉国際芸術祭2025についてご意見がございましたらご記載ください

- 1. 広報頑張ってください！
- 2. 何かが始まるんだな、というくらいしか気にかけていませんでしたが、今回のプレ企画を体験し、このアンケートに回答することで一般市民も参加できる芸術祭のようで楽しみになりました。

千葉国際芸術祭2025 プレ会期(令和6年度) 広報活動報告

千葉国際芸術祭2025プレ会期における広報活動は、芸術祭の開催を表明し、期待感を多くの人に抱いてもらうための第一歩として実施した。参加アーティストや具体的な開催日時・会場・チケット等の詳細が確定していない中での広報活動となるため、「ロゴおよびコンセプトの発表」「情報発信のための媒体づくり・体制づくり」「マスメディアとの信頼関係構築」「プレ会期企画を通じた情報発信・関係づくり」など、基盤整備を目的とした活動を主軸に置いた。

●記者発表会の実施

市長及び総合ディレクターが登壇し、コンセプトやロゴ、プレ会期のプログラムについてなどマスメディアに向けて発表。発表会と同時に、公式ディザナーサイト、公式SNSを公開し、プレスリリースを配信、プレスキットを共有するなど、本格的な広報活動を開始した。記者発表会をきっかけに記事・番組として取り上げられた本数は38本。

・実施日：令和6年10月21日



●公式ティザーサイトの構築／運用

芸術祭の情報発信を行う基幹的な媒体としてティザーサイトを公開した。ロゴやコンセプトが目を引くインパクトあるトップページデザインを心がけた、また千葉市でアートプロジェクトを実施したい世界中のアーティストに向けた「ソーシャルダイブ」は千葉市のイメージを伝えるための工夫を施し、各プロジェクトの活動や開催を伝える「お知らせ」ページの定期更新を行った。お知らせページの公開記事本数は27本。すべて日英バイリンガルで運用している。

・公開日：令和6年10月21日

・URL：<https://artstriennale.city.chiba.in/>



●公式SNSの公開／運用

千葉国際芸術祭メディア運用方針に合わせ、芸術祭情報を発信するための各種SNSアカウントを運用した。特に地域情報・イベント情報・アート情報に関心の高いユーザーが多いInstagramに注力し、写真と言葉を駆使した「楽しさ」を伝える情報発信を展開した。

・運用開始日：令和6年10月21日

・Instagram(フォロワー1,208人)：

https://www.instagram.com/chibacity_art_triennale2025/

・X(フォロワー149人)：https://x.com/ccat_2025

・Facebook(フォロワー120人)：<https://www.facebook.com/chibacity.art.triennale2025>



●プレスリリース配信／メディアアプローチ

プレスリリースを配信した他、定期的に媒体に向けての情報発信を行った。具体的にはカルチャー系雑誌・アート系ウェブメディア・旅媒体・新聞などを中心に、総合ディレクターインタビューや芸術祭特集への掲載などを実現した。

・プレスリリース：

「千葉国際芸術祭2025」ティザーサイト、ロゴ、プレ会期企画を発表！（令和6年10月21日）

「千葉国際芸術祭2025」プレ企画「先生たちのアートアンデパンダン展」開催（令和7年2月5日）

●認知拡大を目指す広報ツール

広報ツールやグッズを制作し、市内掲示・配布を行った。

・制作したツール：のぼり、ポスター、フライヤー、ステッカー、クリアファイル、バッジ、デジタルサイネージ動画、ロゴ入り屋台、ロゴ入り風船



●認知拡大を目指す広報イベント

「栗原良彰『わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！』in イオンモール幕張新都心」開催に合わせ、人通りの多いショッピングモールで芸術祭認知を拡大するための、大型モニター動画上映・SNSフォロワーUP施策・ロゴ入り風船及びステッカーの配布を行った。

・実施日：令和7年1月19日



千葉国際芸術祭2025 本会期に向けての課題

1. 展示・作家の作業スペースの確保

本会期では、大型インスタレーションや参加型作品の展示において課題が出るのが予想されます。本会期に向けて、公共施設や空き店舗、廃校などの活用を含め、多様な展示スペース・作家の制作活動や作品保管のためのスペースの確保が必要です。

2. 作家の宿泊滞在スペースの確保

制作期間および展示期間中の作家の滞在先が限られており、特に長期滞在を要する制作活動に支障をきたすことが予想されます。地域内の宿泊施設との連携強化や、空き家を活用したアーティスト滞在施設の整備が必要です。

3. 告知スペースの拡充

芸術祭の認知度向上・参加者募集のため、市内の公共施設や商業施設との連携を強化し、効果的な情報発信のためのスペースを確保する必要があります。また、商業施設のデジタルサイネージ活用のための連携についても検討が必要です。

4. 市民ボランティア組織の必要性

本会期に向けて、ガイドや会場運営、作家支援などの役割を担う市民ボランティア組織の立ち上げと、専門的な研修プログラムの実施が必要です。

5. 庁内連携の強化

観光、まちづくり、教育、国際交流など多岐にわたる部署が一丸となって取り組める体制構築が重要です。定期的な連絡会議の開催や情報共有プラットフォームの整備の推進が必要です。

6. 海外・市外作家向け情報整備

多言語対応の情報パッケージの作成や、作家サポート専任スタッフの配置が求められます。

7. 地域資源との連携強化

本会期では、芸術祭事業および連携事業において、地域の特色を活かした企画を増やし、地域住民や事業者との協働体制を強化することで、芸術祭の地域への浸透と持続可能性を高める取り組みが必要です。

本報告書は令和6年度プレ会期の実施を踏まえ、令和7年度本会期に向けての主要課題をまとめたものです。今後、各課題について具体的な対応策を検討し、実行していきます。